

(リ) ナノモルセ示ヲ合別ノ物産ニ別國ハ点圈色彩ノ中國

從三位勳二等男爵 園田安賢君序文  
從四位勳四等農學博士 佐藤昌介君序文  
從六位農學士 安東義喬君校閱  
小 坂牛天民著



之利源

明治  
39 9 28  
内交

發兌元 富貴堂

序

抑本道は沃野千里四面環海所謂天府の地にして農産物に鑛物に木材に魚介に年々の産額數千萬圓に上る、今や戦後事業界の發展に伴ひ獨り清韓兩土の需要を増加せるのみならず尙進んで歐米諸國に向て之が販路を伸張するに至れり、加之工業の如き又逐年進歩の趨勢を示し織物に磁器に鐵具に其他工藝品の各市場に出現するもの多からんとす、而して輓近の如き資本國內に充實し之が運用の途を求むる切なるの時に際し企業者の本道事業界に向つて資本を投下し北海の富源を開發せんとするは實に喜ぶべきの現象と謂ふべし今や北海道物産共

進會を開催し海陸の物産及工藝の諸品を蒐め審査品評を加へて大に奨励の策を講じ且比年著しく發達せし本道進歩の真相を示して事業家諸氏の参考に資せんとす天民坂牛君此に見るあり一書を著はし之を社會に紹介せんと欲し名けて北海の利源と云ふ章句簡なりと雖も其事實に至りては悉く之を網羅して餘さず且其持論を表白して以て世の識者に質さんとす眞に企業家の指針と爲すに足るべし書成るに及んで聊か所感を卷首に題す

明治三十九年九月一日

從三位勳二等男爵 園田安賢

### 北海の利源序

今茲北海道物産共進會の開くるや天民坂牛君一書を著し本道の實況を列叙し併せて其抱負を披瀝す其記事簡にして要あり其立言質にして浮ならず本道拓地殖民興業殖産に資するもの蓋し尠少ならざるなり況や附するに名區勝地の状態を以てし趣味自ら津々として人をして神飛び意躍らしむるに足る眞に能く本道面目を發揮したるものと謂ふべし命じて北海の利源と云固より誣ひざるなり想ふに我國現時國運の發展に伴ひ益々殖民企業の領域を國の内外に擴張し以て世界的富強の基礎を鞏固にするの急務なるあり本道に於ける所謂國內殖民の事

蹟は豈新興國民の經濟的奮闘を海外企業地に試る者に對し亦好羅針盤たらざらんや編成るに及び余深く其時務に適するの舉を悦び聊か一言して以て序と爲す

明治三十九年八月下澣

從四位勳四等農學博士 佐藤昌介

凡例

- 一、本書は北海道物産共進會開會に際し本道實業上の諸問題に就て其内容を分辯し將來に對する發展の豫想を下し本道企業者の參考に資せんとするにあり
- 一、著者は去る明治卅五年札幌區に於て開催したる實業大會に際し北海要覽なる小冊子を著はし聊か本道を紹介する所ありしが今回の共進會を機とし近年著しく進歩したる各般の状況を訂正増補し以て戰後經營に伴ふ本道發展の隆運を表白する所あらんとす是れ此著ある所以なり
- 一、北海道廳に於て共進會來觀者に配布するの目的を以て第二拓地殖民要録の編製中なるを以て可成記事の衝突を避けん爲め舊書の過去の沿革及び現今の状況を叙述するに反し本書は主として將來に對する進度を豫想し且論評を加へたるものなり

一、將來に係る豫想的數字は總て道廳獨立經營案の骨子たる横山事務官起稿の北海道利源調査書に據れり著者は該獨立案を全然賛同する者に非ずと雖も然れども國家經濟上本道の經營を確實に獨立する成案を得るを以て本道の幸福之れに如くものなきを信ずると同時に將來に對する具體的數字の據るべきものを以てせり

一、樺太島に對する事情は近刊一二の書に散見するの外多く其記事を見ず本書は該島の概畧を摘録するに止ると雖も樺太問題の研究に熱心なる市川天涯君の起稿に係るを以て同島の梗概悉すことを得たるは信じて疑はざる所なり

一、本道名所舊跡等を附記せるは本道來觀者にして山海に包藏せる一大寶庫の存在を認識すると共に山河景象の雄大にして大陸的狀態を目撃するに至らば大に其詩囊を肥やし精神的修養の料を得て異郷の鬱を散ずるもの少な

からずと信ずるを以てなり

一、本書の参考として北海道利源調査書、北海道誌、北海誌料、北海道地誌、日本名勝地誌、北海名所案内、日本風景論、札幌沿岸史、小樽港史、小樽統計要覽、函館商業會議所卅八年度統計報、拓殖要覽、殖民公報、寺院沿革誌等の諸書を引用せり

一、北海道廳商工課長安藤農學士は目下物産共進會開催準備に際し事務多忙なるに拘はらず本書校閲の勞を執られ又拓殖課員河野犀川君は本書編纂に關し種々有益なる材料を供せられたり茲に兩氏の厚意を謝す

一、本書の材料蒐集に就て共進會協賛會の補助を得たるは謹んで其好意を謝する所なり

一、本書の材料中本道西海岸沿線の事項を省畧して東海岸の事實を網羅したる傾きあるは汽車沿道は殖民要録の旅行案内に精しきを以て東海岸より増

凡例

四

毛に至る事實を紹介するの急を認めたるに由る看官之を諒せよ

明治三十九年八月下澣

著者識

### 北海の利源目次

緒言	一
移民	五
農業	一〇
養蠶	一九
牧畜	二三
鑛業	三三
林業	四一
漁業	四六
工業	五九
商業	六三
目次	一

目次

交通.....二

水電事業.....三

本道の産物.....六

樺太概況.....一〇

附 録

開拓功勞受賞者.....三

興復社の事業.....三五

興復社  
共進會 本道出品成績.....一〇

名所舊蹟.....一五

あいぬ風俗.....一六

追分節の由來.....一六

北海道歌.....一五

本道の八景詩歌.....一五

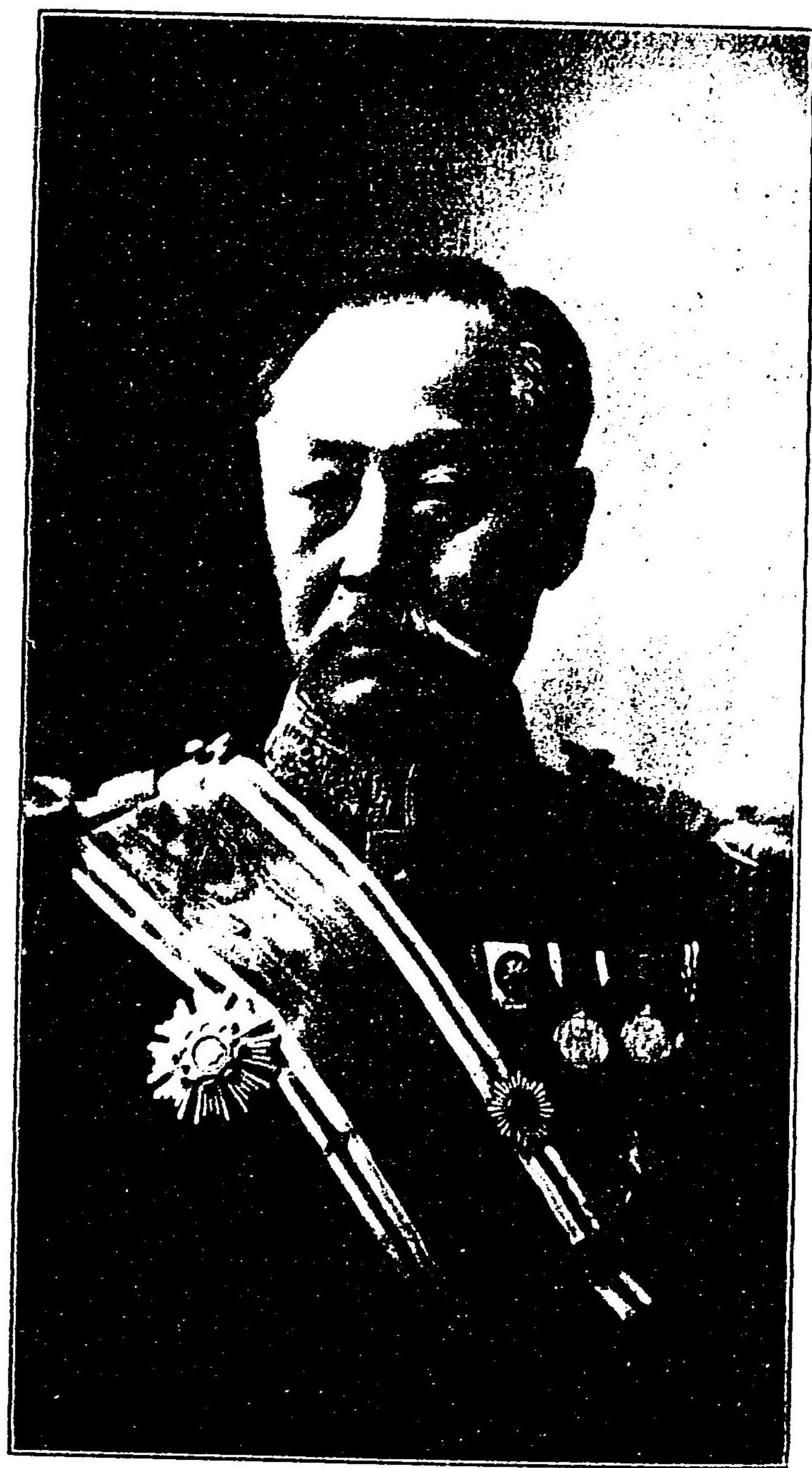
札幌案内.....一七

寫真圖解.....一

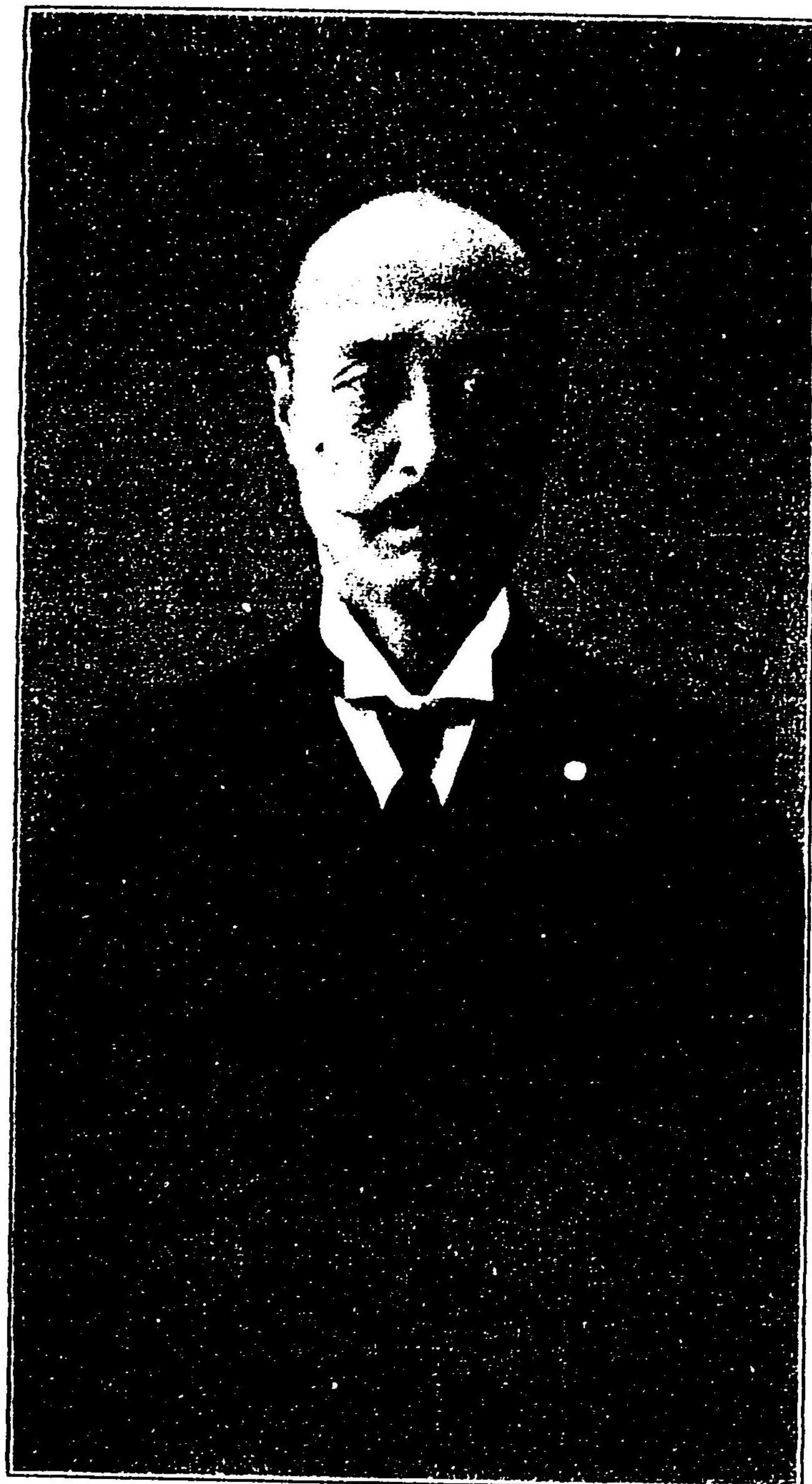
目次終

目次





會進共產物道海北  
府男田園頭會



頭會會贊協會進共產物  
君介昌藤佐士博學農

北  
海  
道  
廳



北  
海  
道  
物  
産  
共  
進  
會  
場



場  
物  
博  
一  
第  
園  
公  
館  
函

大官幣社 札幌神楽社



月  
第廿五兵  
隊



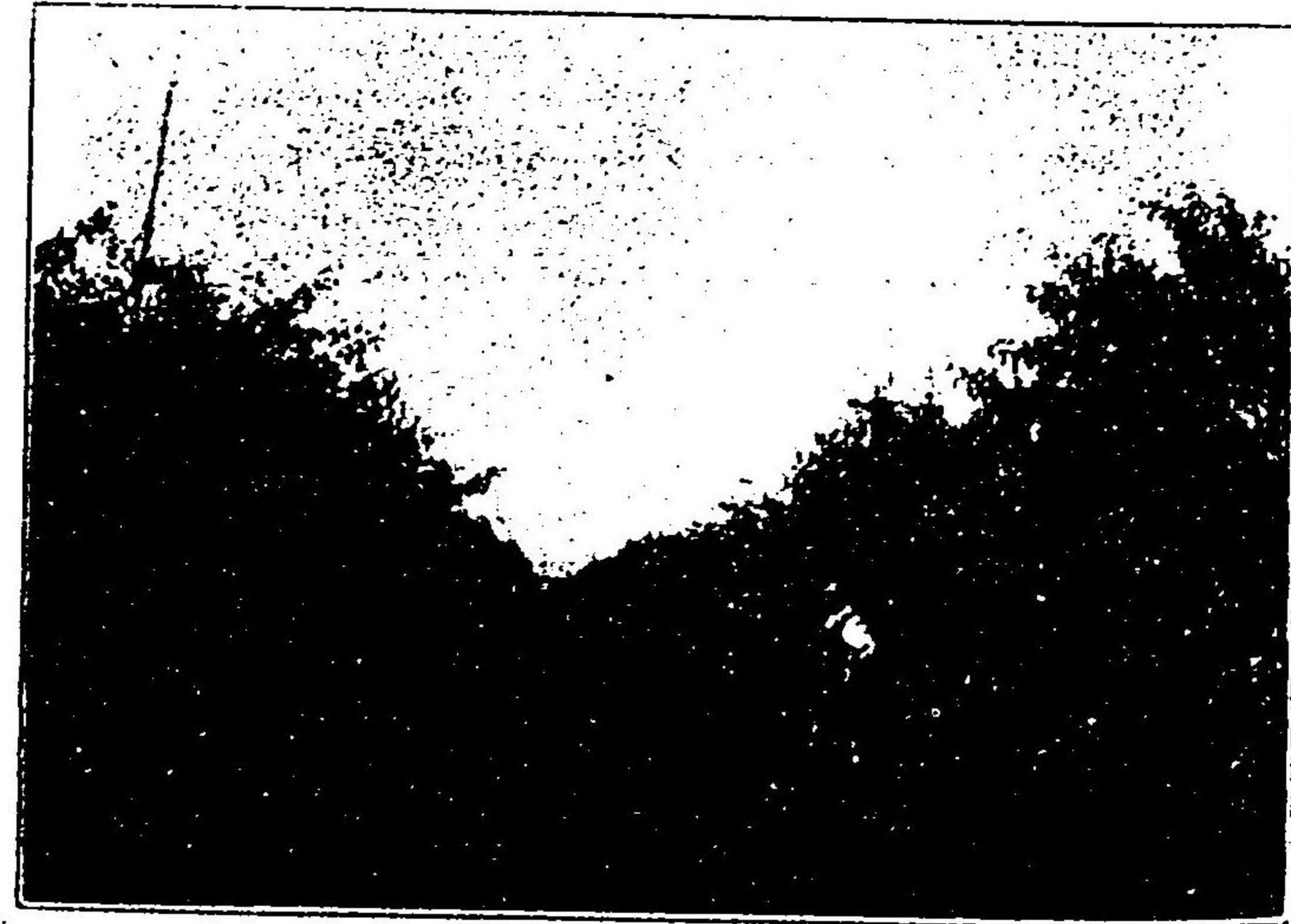
豊  
平河  
畔より  
藻岩山  
を望む



支笏湖及樽前山



赤巖溫泉水友館

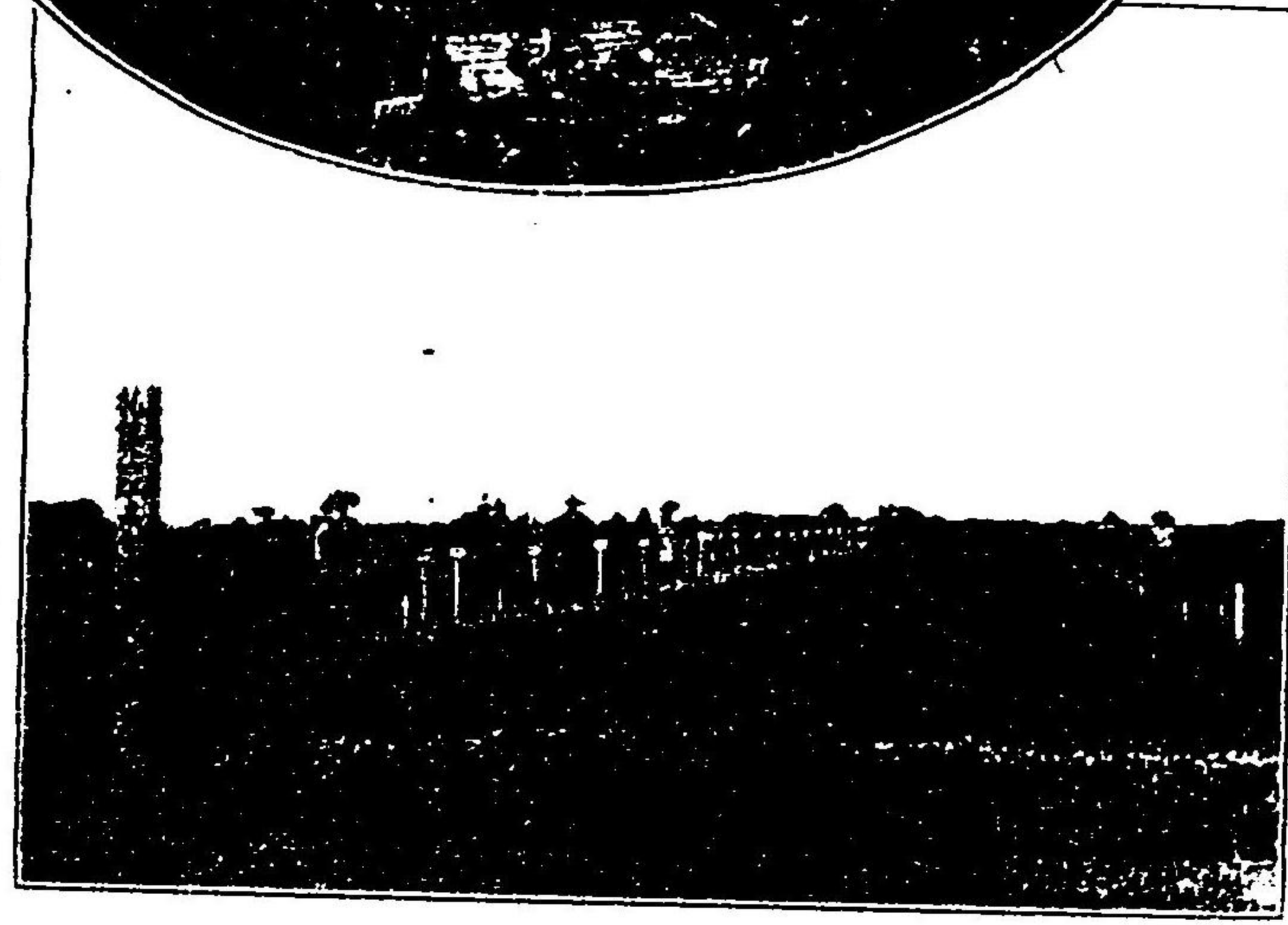


白石村之蘋果園

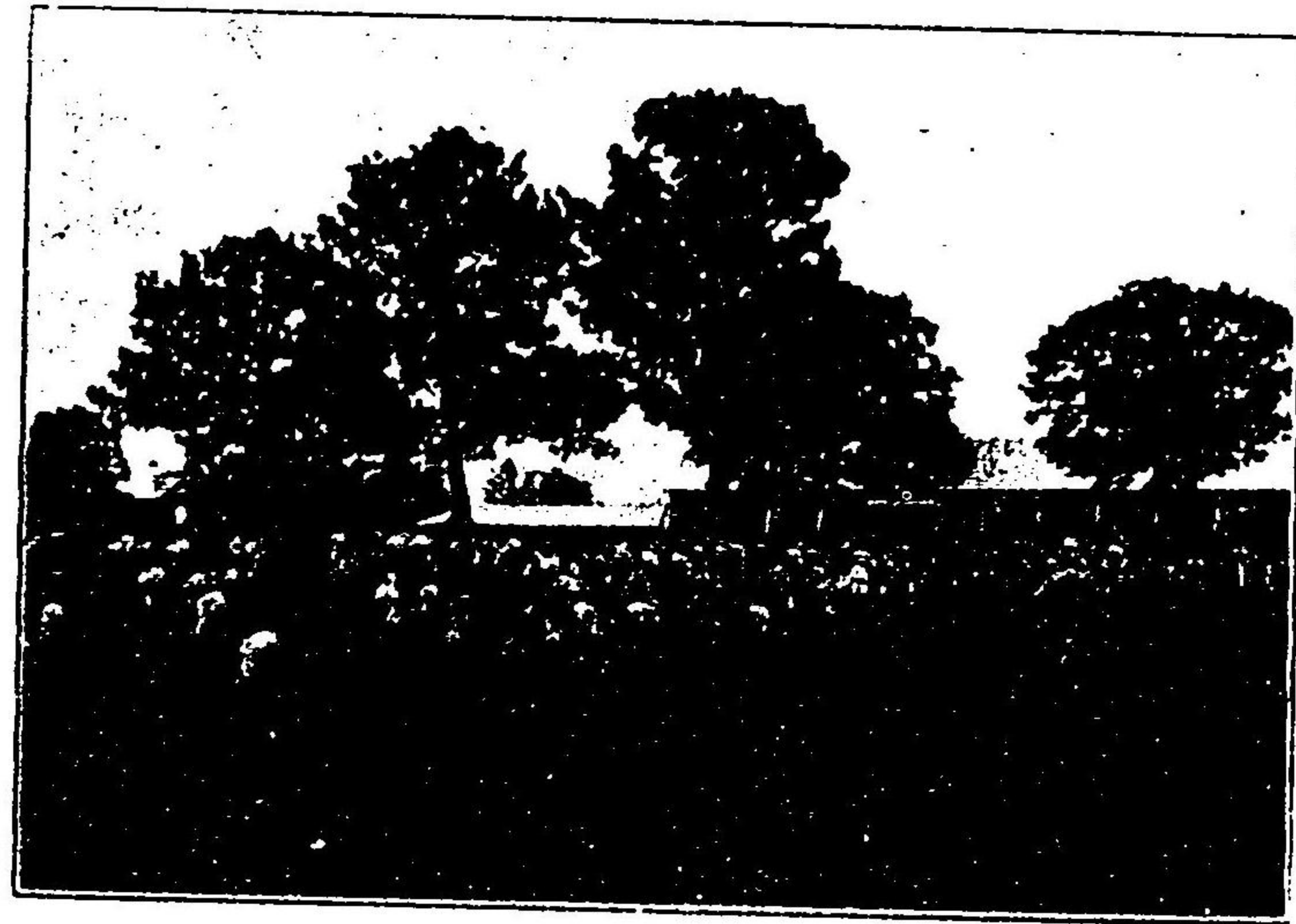
比羅夫公園より富良野を望む



札幌村之玉葱畑



眞駒内綿羊放牧之圖



前田農場小樽殺菌部



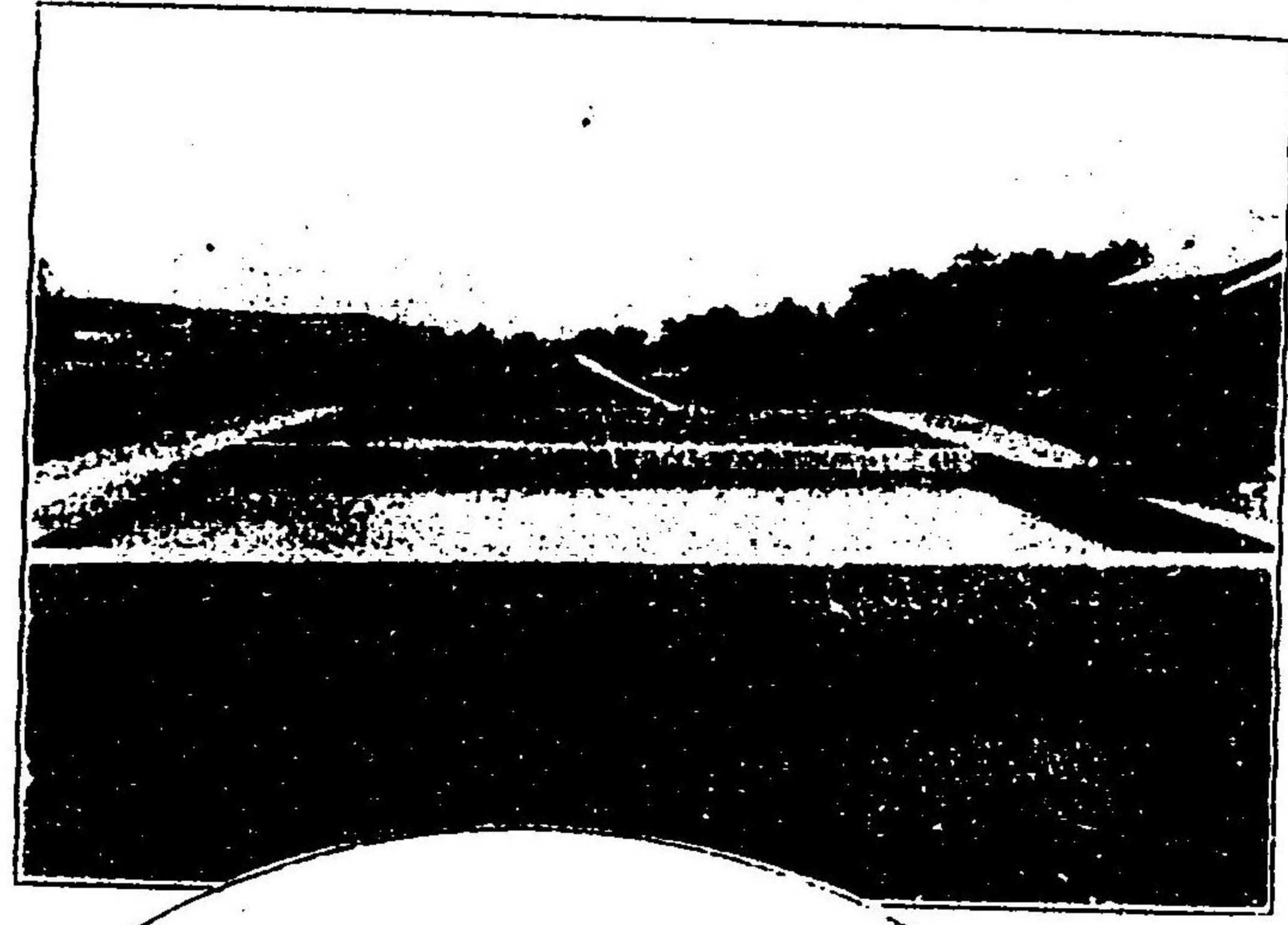
前田農場種牛之圖



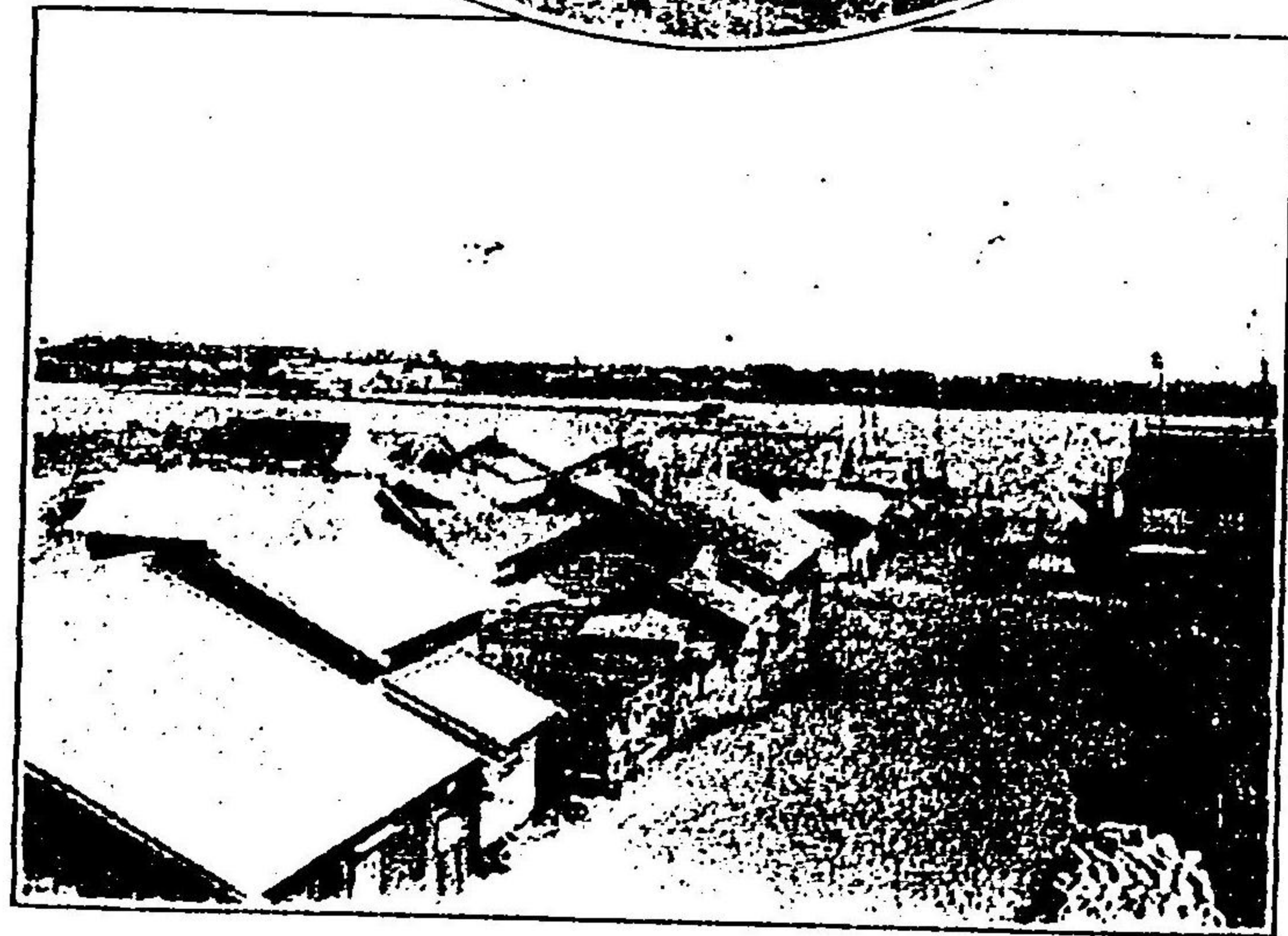
石川牧場ローマン號之圖



小樽假設水道源之圖



高島水産調査所



石狩市街



祝津村 練沖揚之景

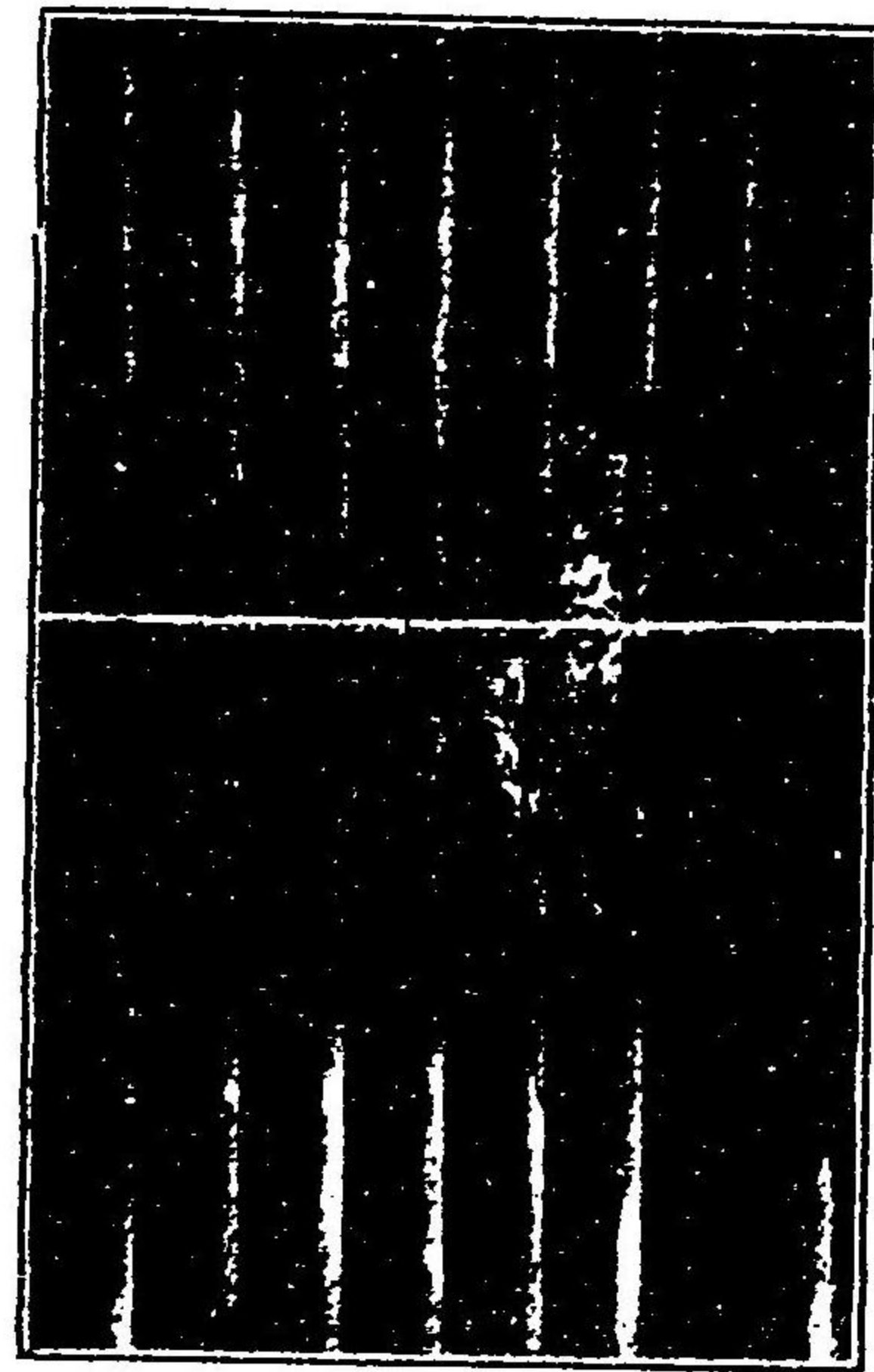


古平村 練榨稻製造之圖



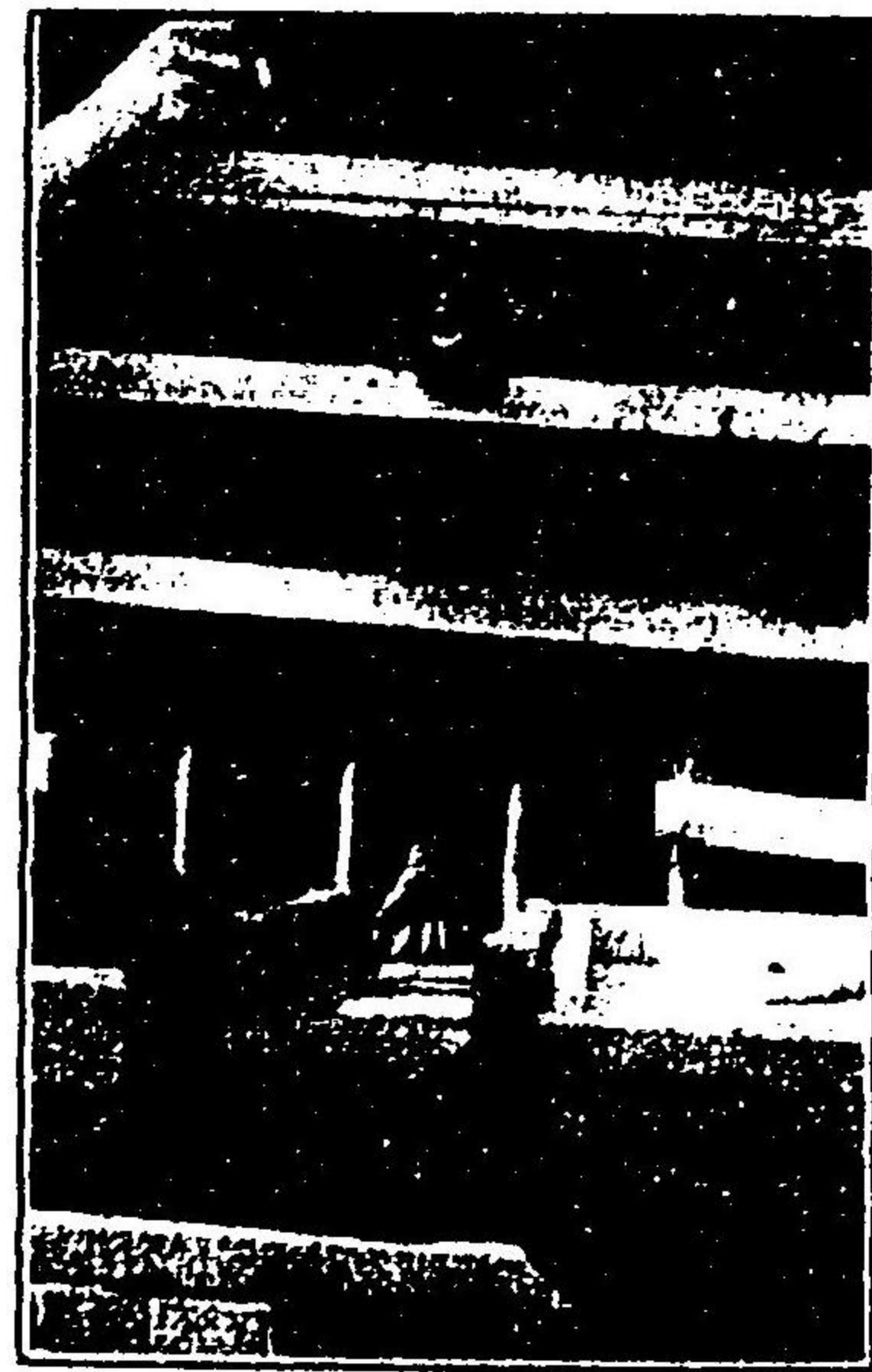
有勢內 溫泉之圖

小 楸 花 園 公 園



金 澤 動 物 園 之 豹

金 澤 動 物 園 之 熊



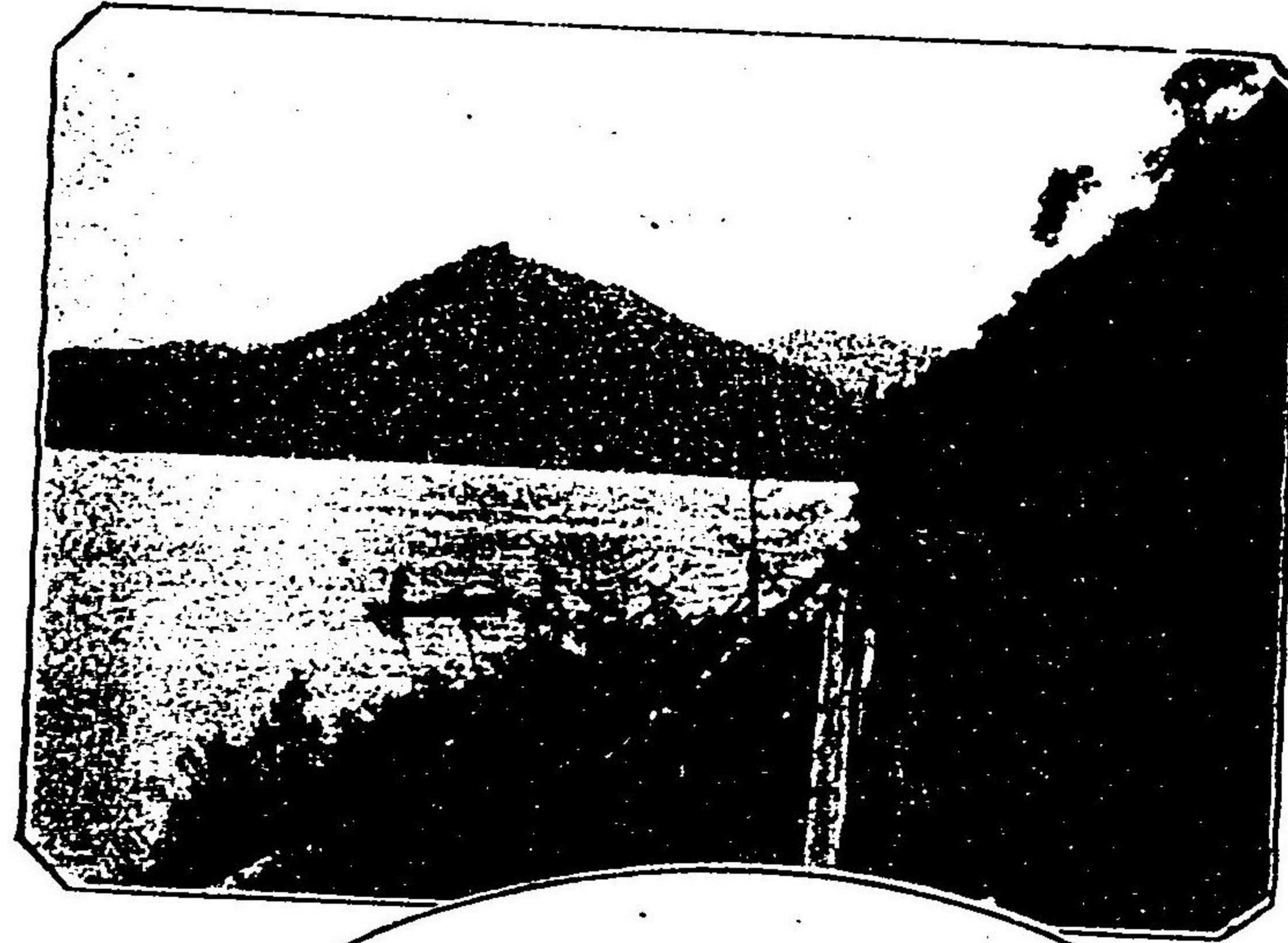
登別溫泉之湯瀧



登別溫泉之瀑



定山溪觀月橋



支笏湖及惠庭岳



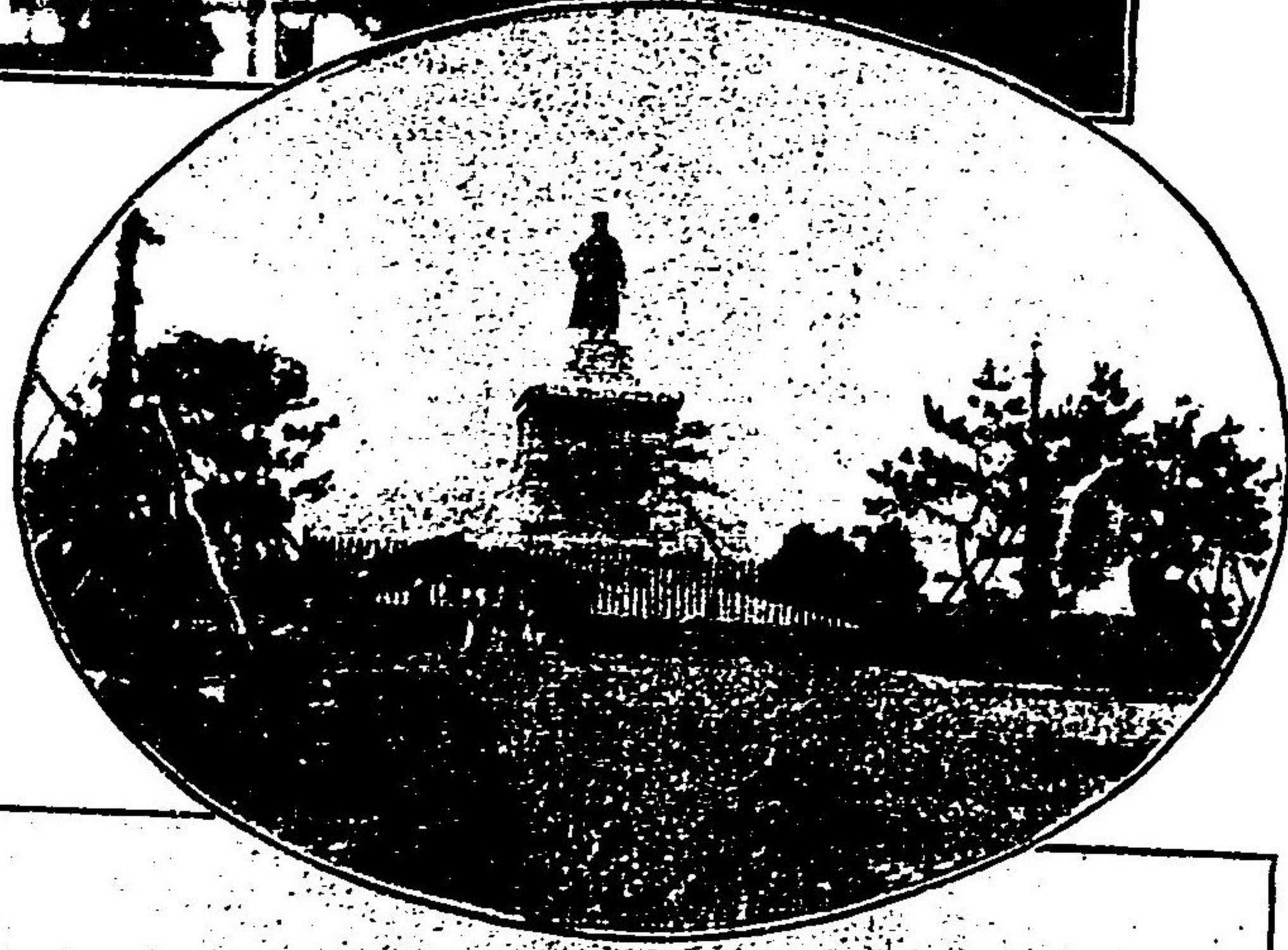
定山溪之温泉



第一千滝



札幌豊平館

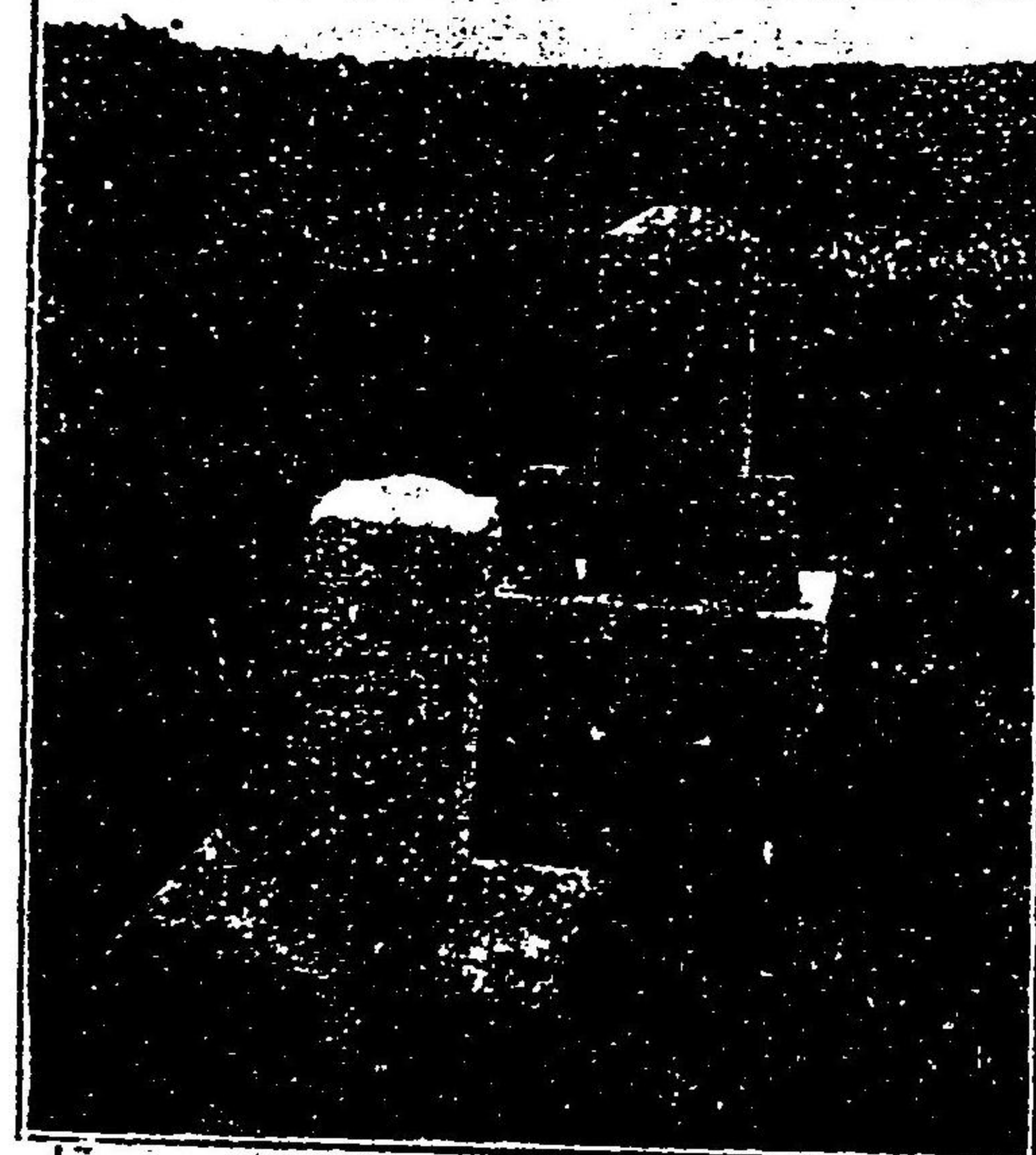


黒田伯勝之銅像

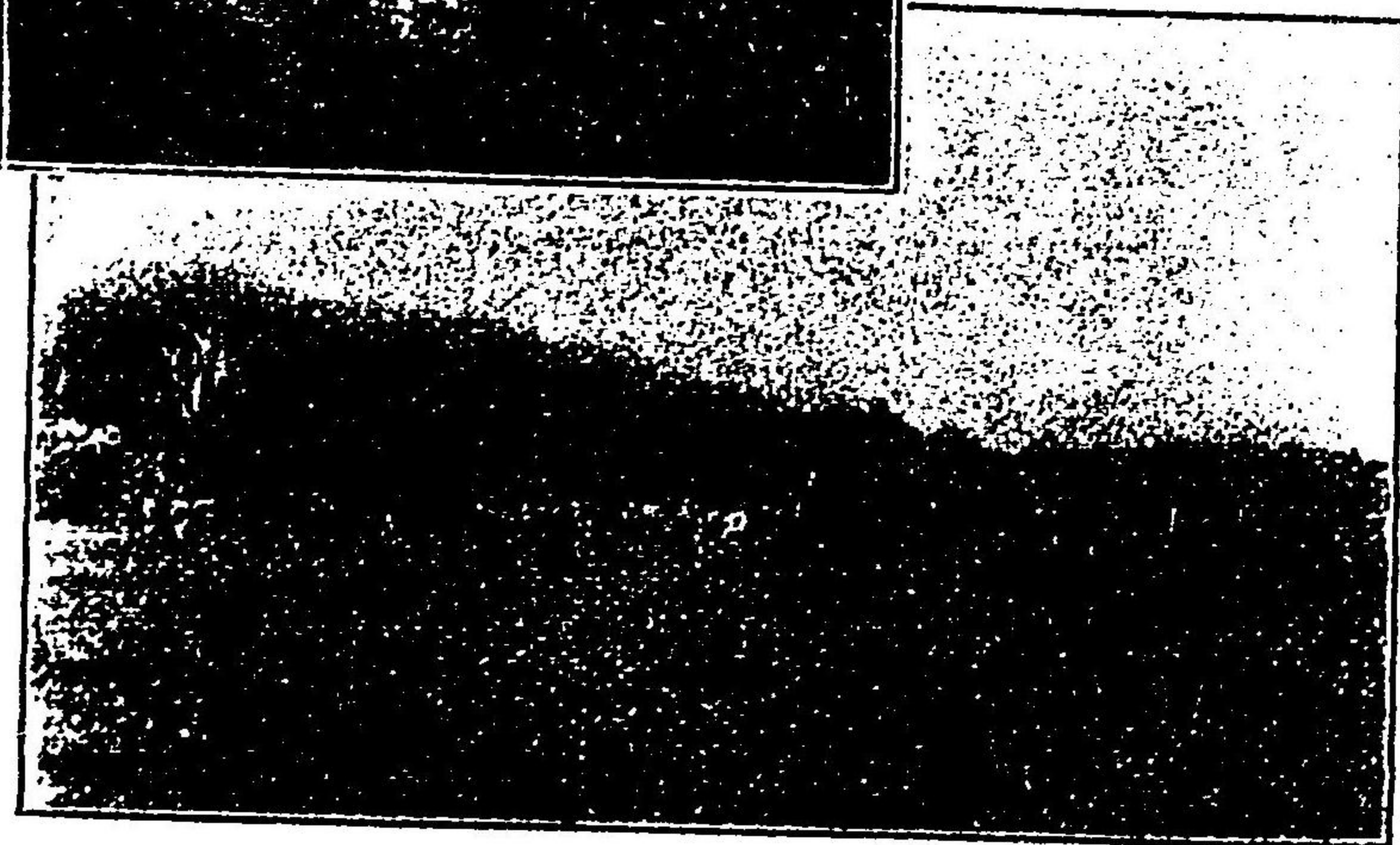


大沼より胸ヶ嶽を望む

む望を山尻利りよ村形沓

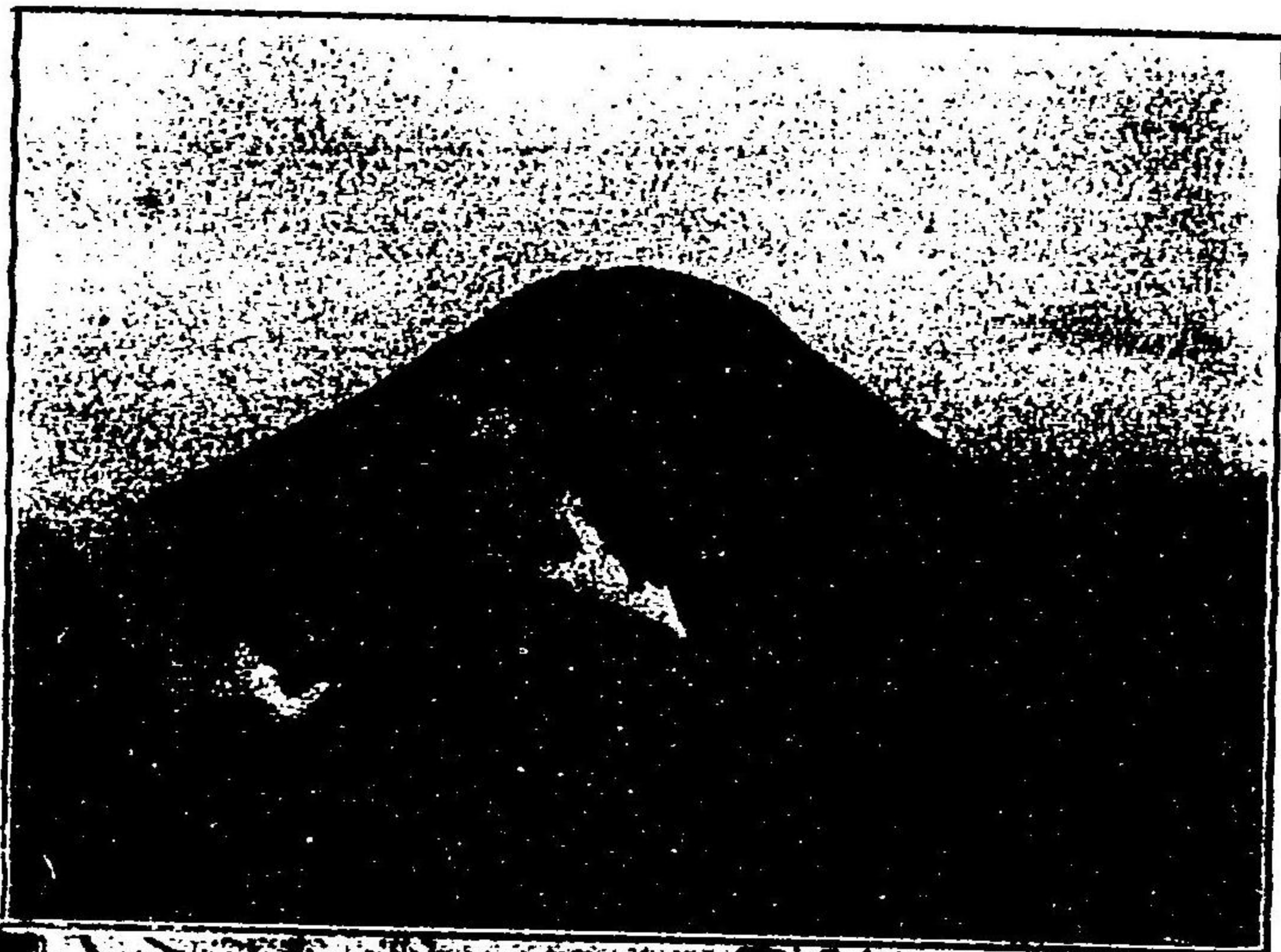


會津藩士之墳墓



場馬牧深野村伏萩高日

雄阿寒岳



洞爺湖より  
有珠嶽を望む



真駒内種畜場



あ い ぬ 之 風 俗



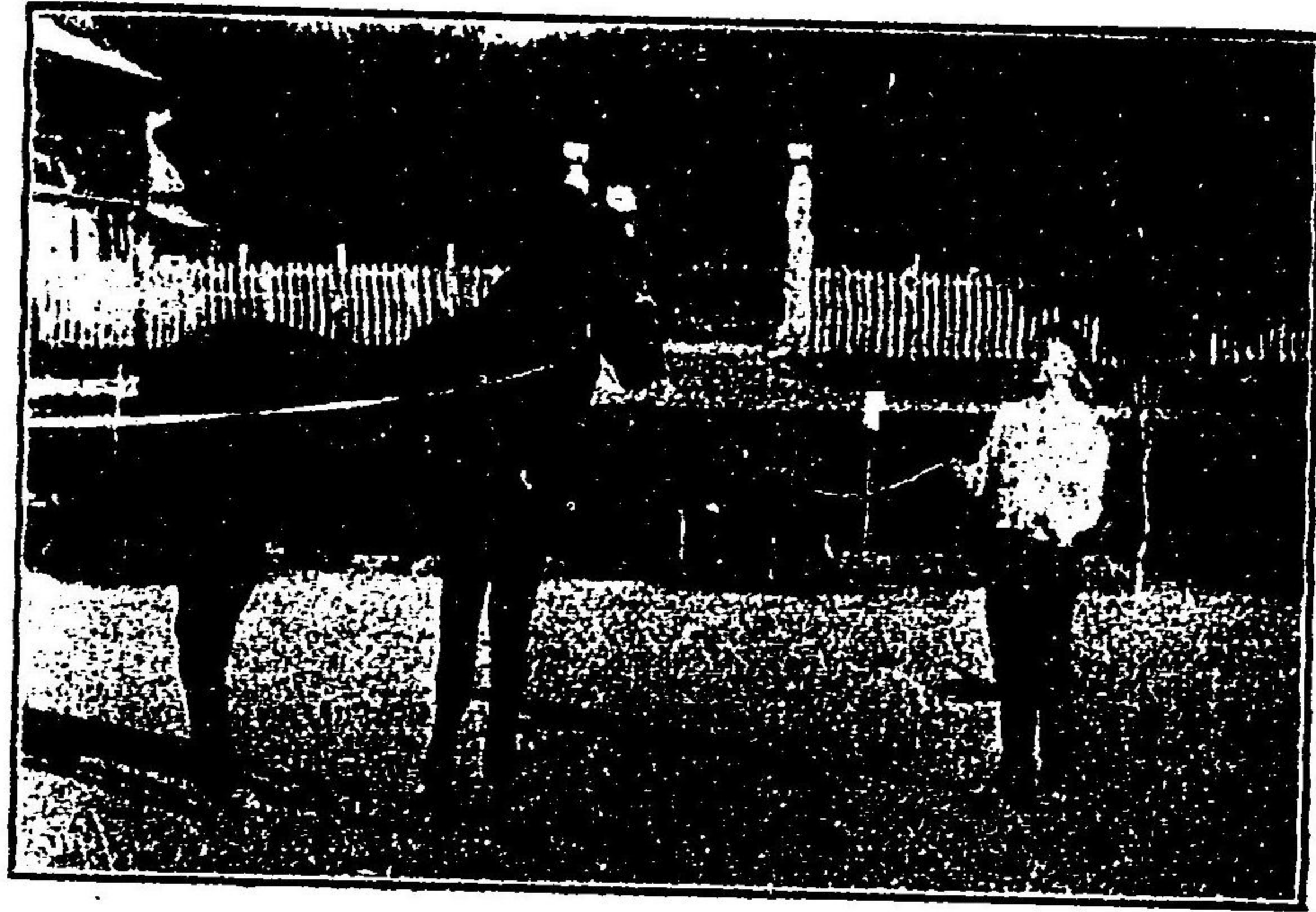
あ い ぬ 會 長 盛 装 之 圖

あ い ぬ  
美 人





日高名馬明石號之圖

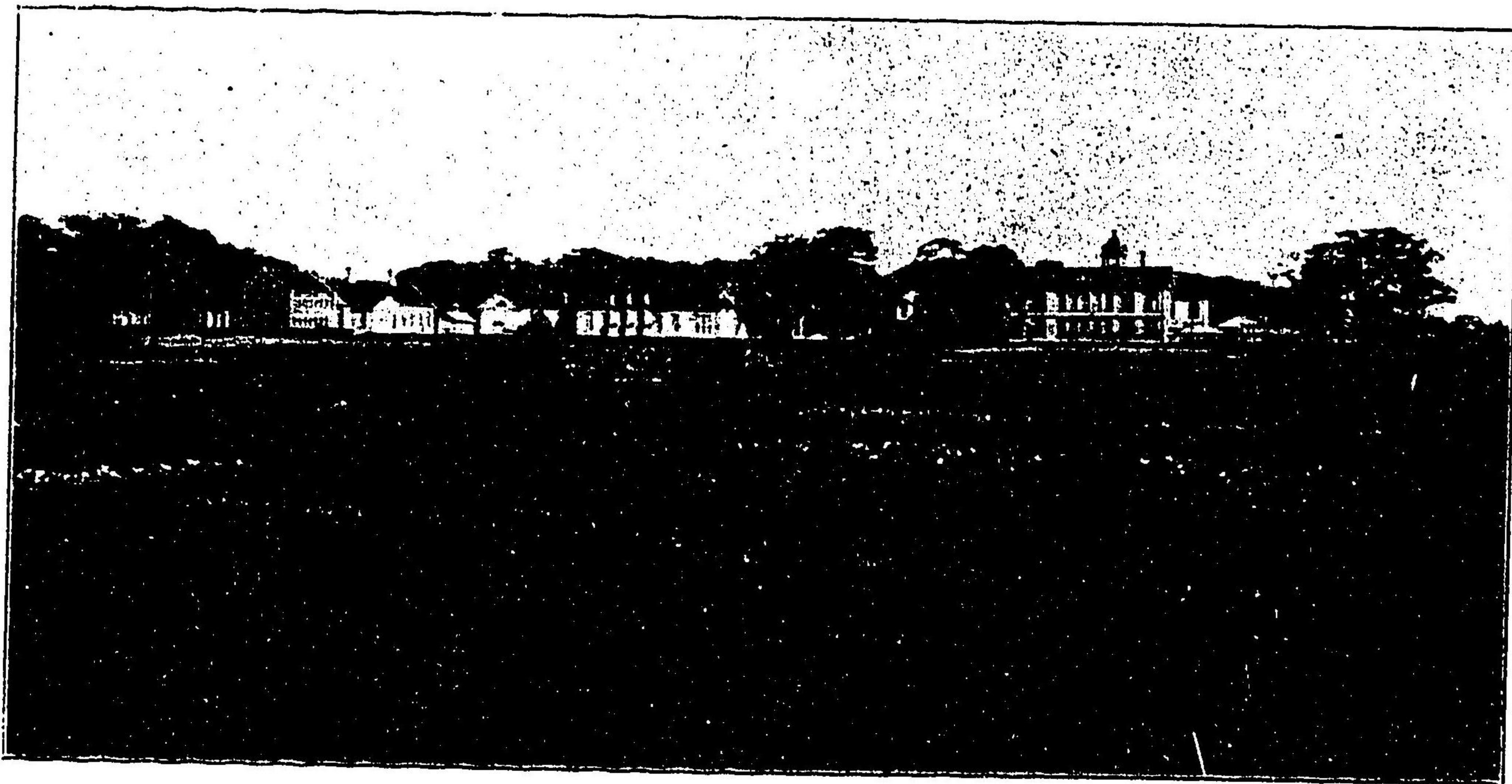


あいに熊祭之圖

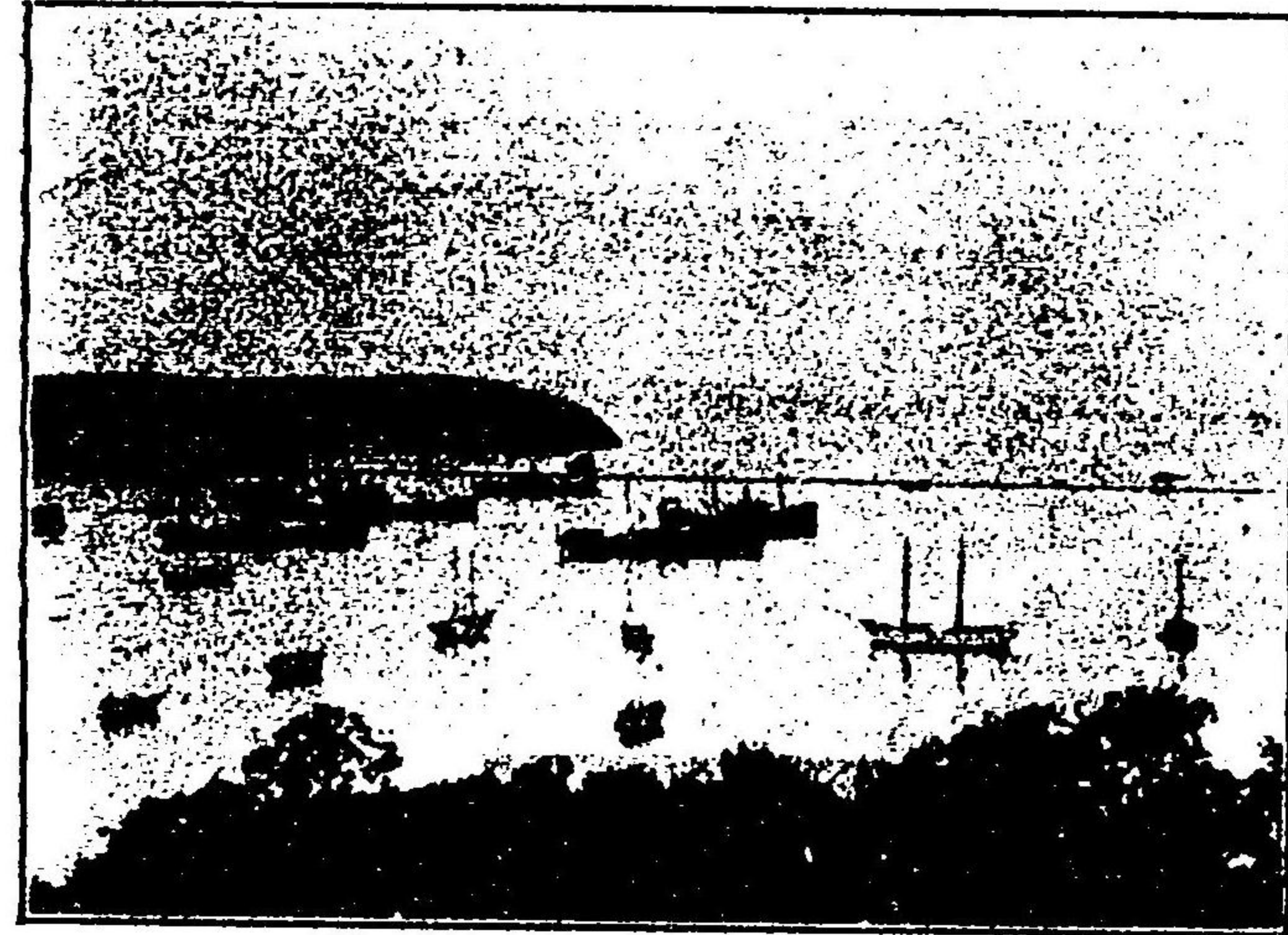


廣島村之水田

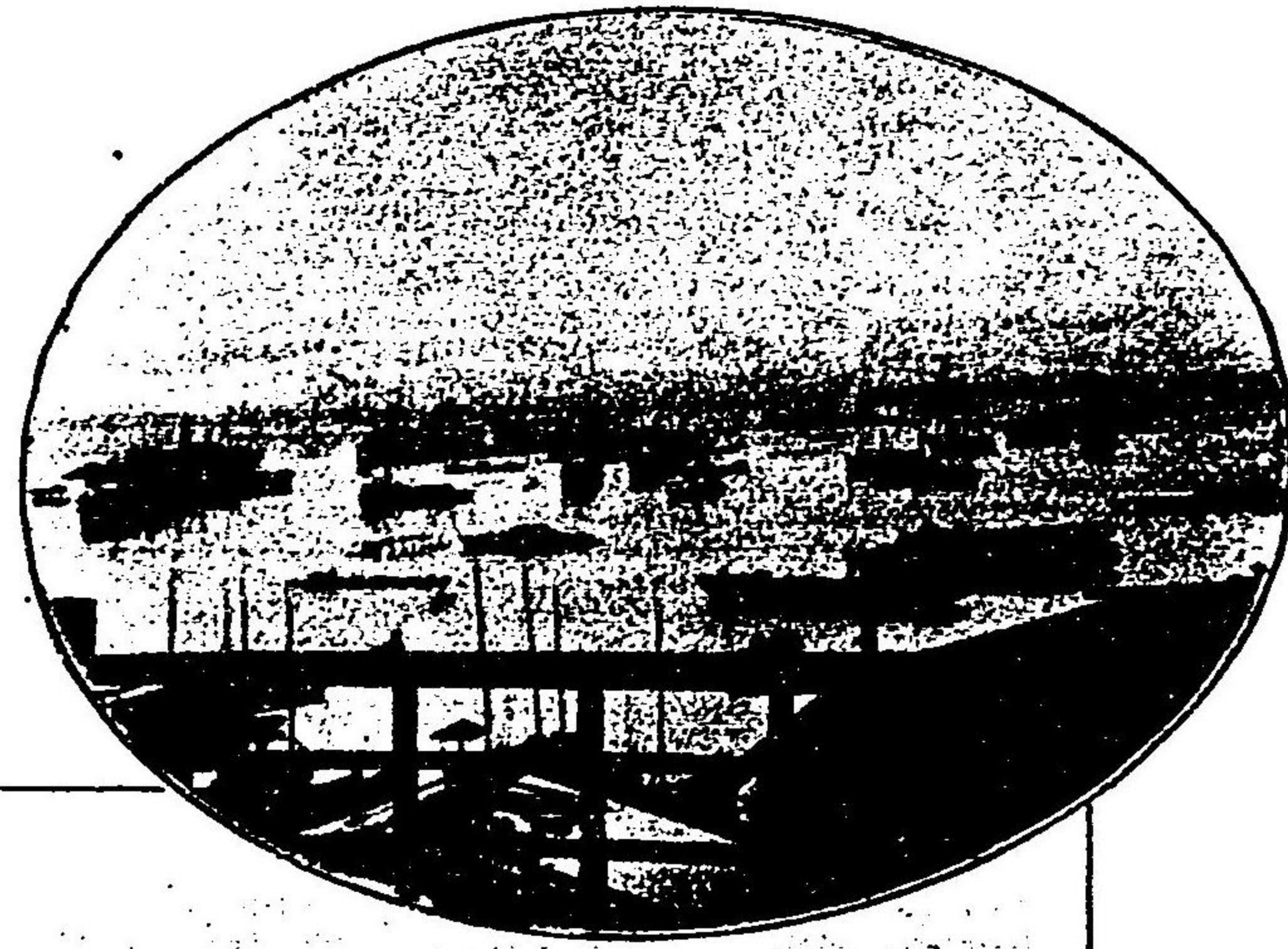




札 幌 農 學 校



小  
樽  
港

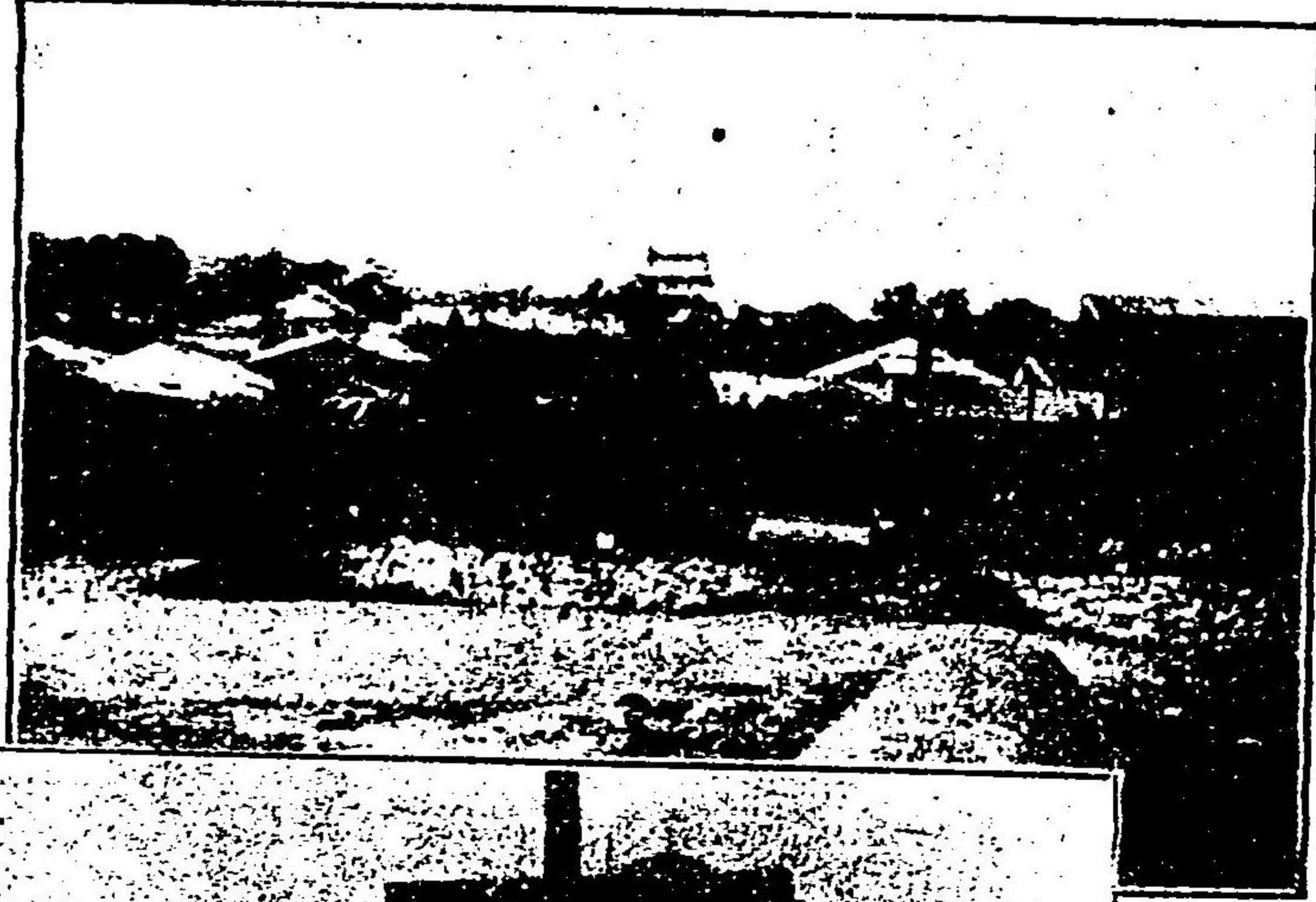


函  
館  
港



街 市 崩 留

海岸より松前城を望む



改良練摺箱製造之圖

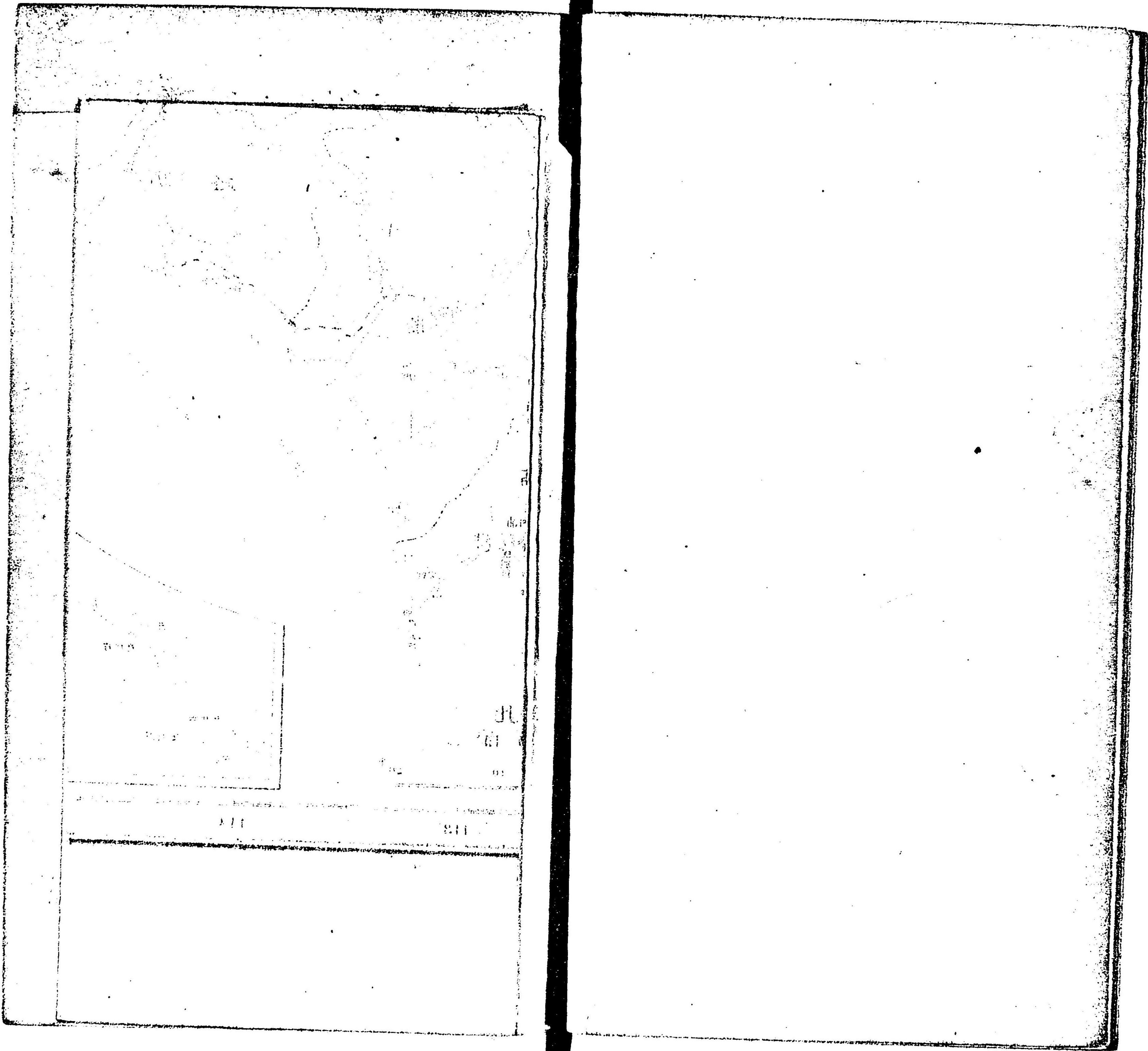


鮎川漬之圖

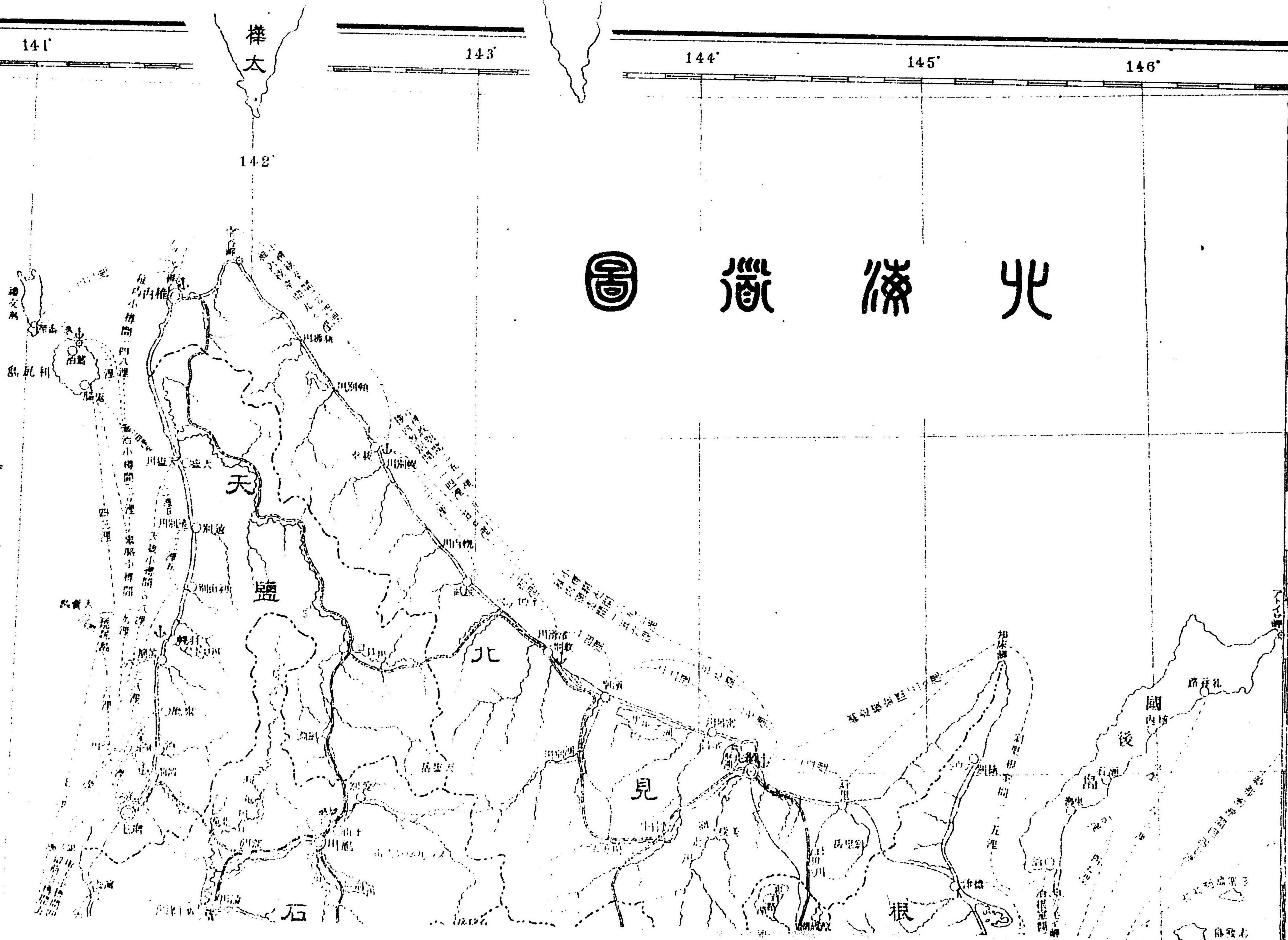




む望を岩掛釣りよ村掛釣り



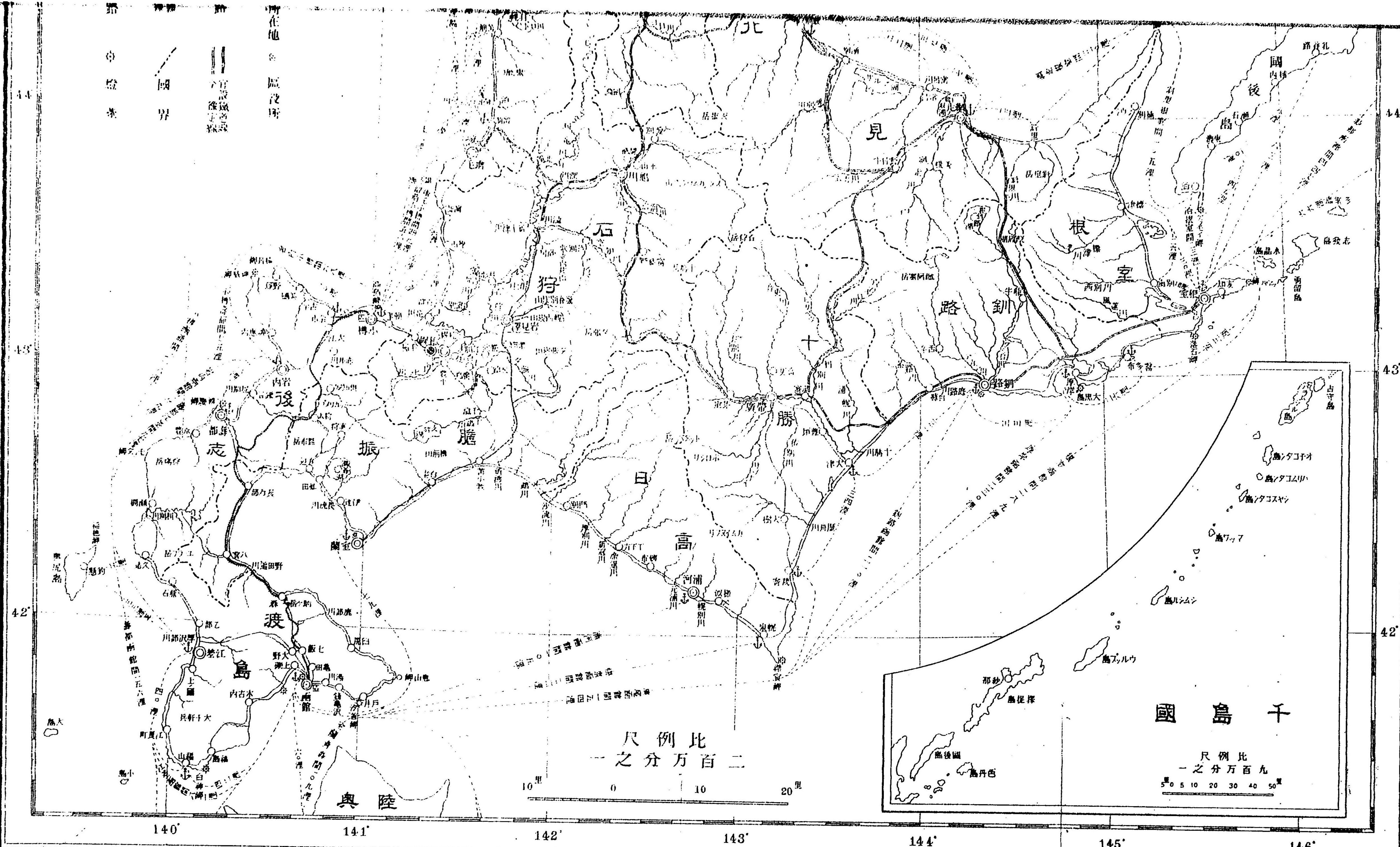
# 火 漆 鐵 圖



記 號

- ◎ 北海道廳
- ◎ 支庁事務所所在地
- ◎ 區役所
- 重要町事務所所在地
- 重要村事務所所在地
- 炭礦會社線
- 北海道鐵道線
- 全線定線
- 官設鐵道線
- 全線定線
- 國界
- 重要港灣
- 航路
- 砂礫堆

所在地 區 設 局  
官 設 鐵 道 線  
國 界

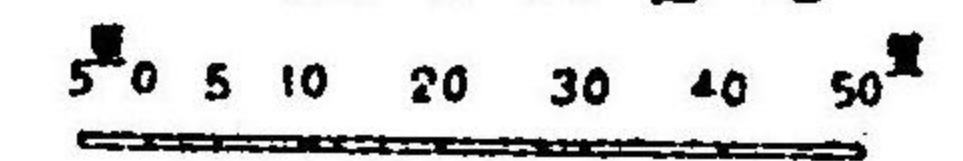


尺 例 比  
一 之 分 万 百 二



國 島 千

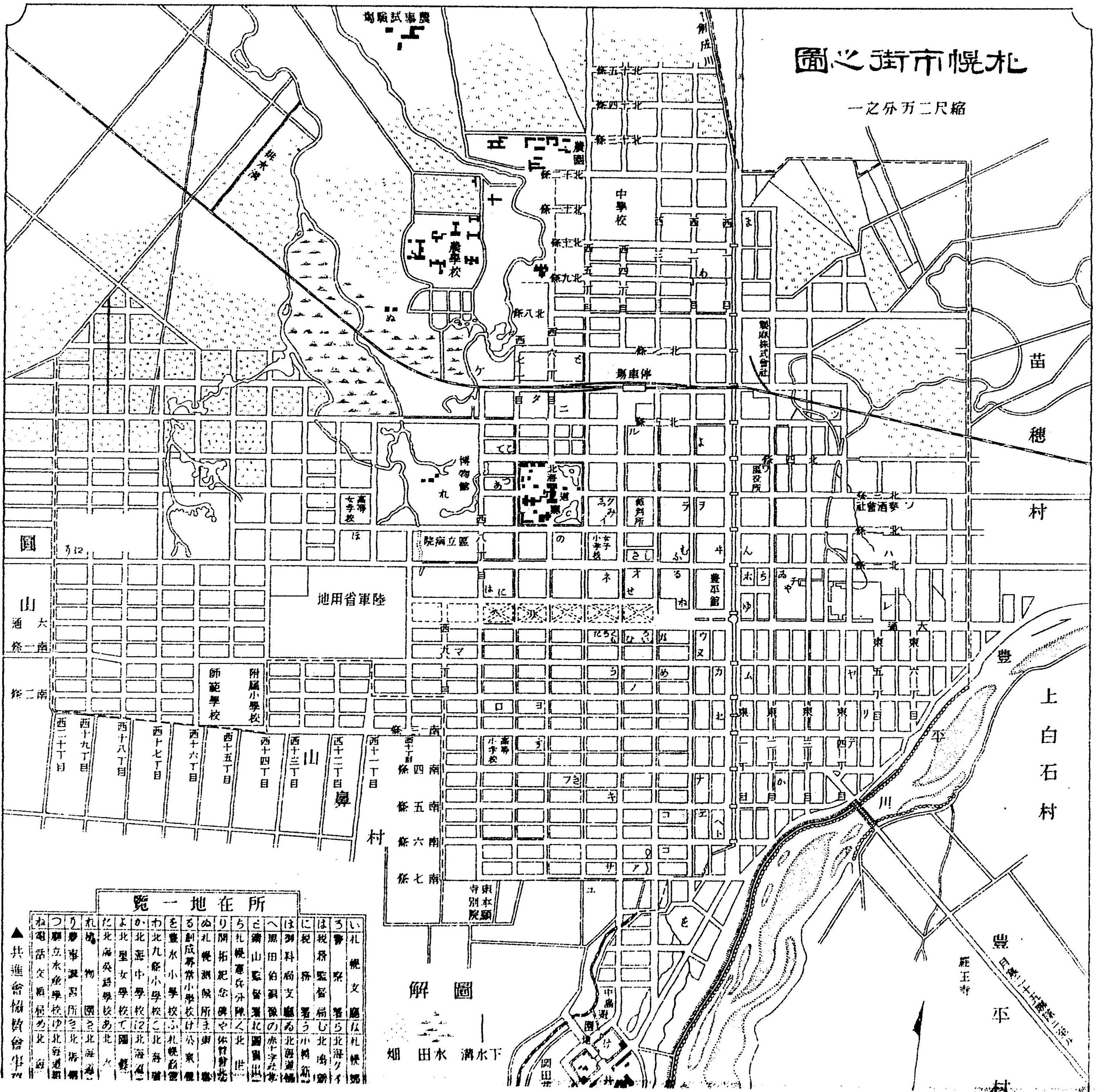
尺 例 比  
一 之 分 万 百 九





# 北幌市街之圖

縮尺二万分之一



## 所在地一覽

▲共進會協賛會事

札幌市立水産學校	札幌市立北區立水産學校	札幌市立南區立水産學校	札幌市立東區立水産學校	札幌市立西區立水産學校	札幌市立北區立水産學校	札幌市立南區立水産學校	札幌市立東區立水産學校	札幌市立西區立水産學校	札幌市立北區立水産學校	札幌市立南區立水産學校	札幌市立東區立水産學校	札幌市立西區立水産學校
----------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

## 解圖

畑田水溝水下



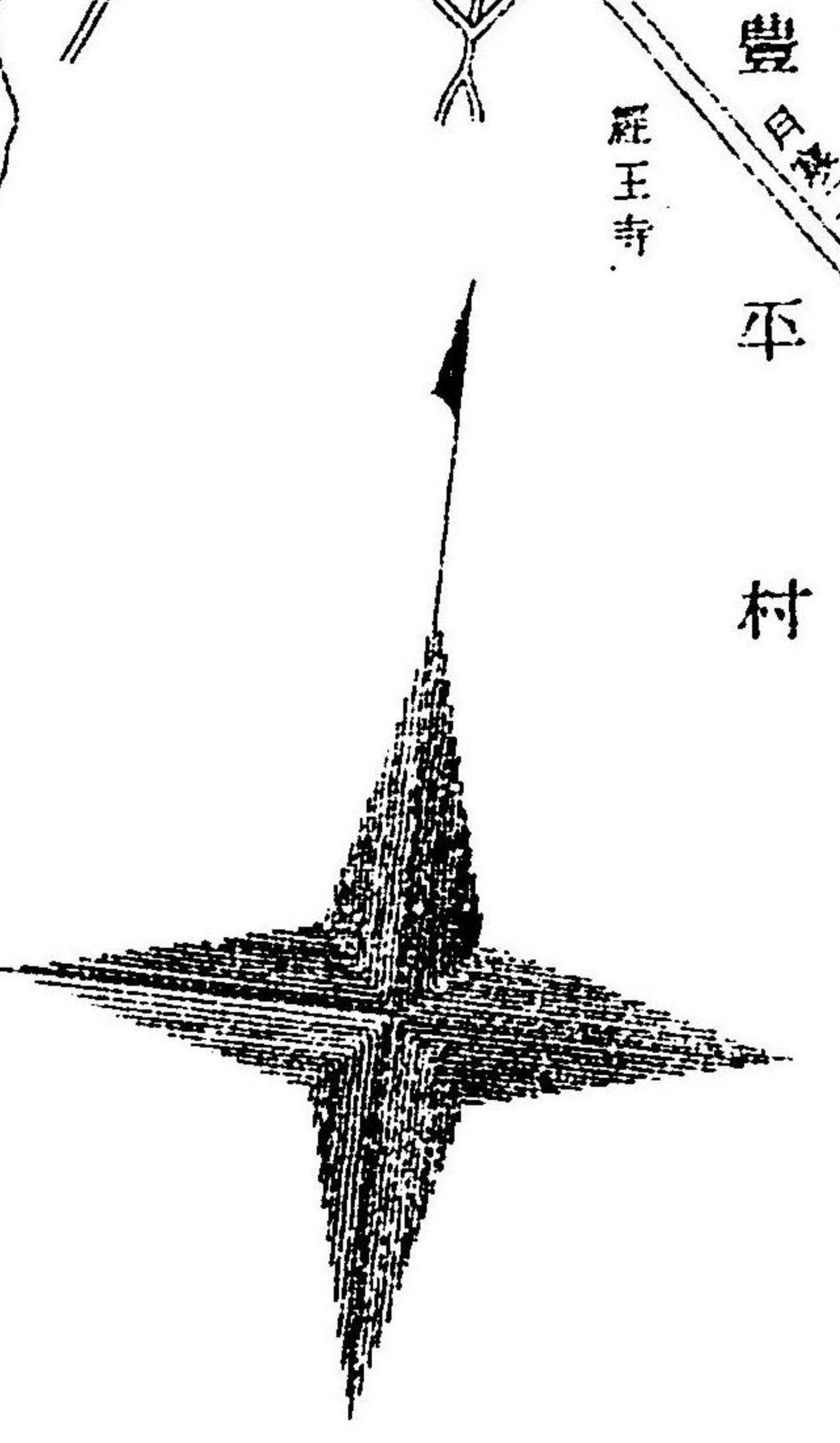
所在地一覧

▲共進會協賛會事務所

1	北海道銀行	札幌支店	11	豊平町立図書館	豊平町立図書館
2	北海道銀行	豊平支店	12	豊平町立公民館	豊平町立公民館
3	北海道銀行	豊平支店	13	豊平町立体育館	豊平町立体育館
4	北海道銀行	豊平支店	14	豊平町立音楽堂	豊平町立音楽堂
5	北海道銀行	豊平支店	15	豊平町立博物館	豊平町立博物館
6	北海道銀行	豊平支店	16	豊平町立資料館	豊平町立資料館
7	北海道銀行	豊平支店	17	豊平町立美術館	豊平町立美術館
8	北海道銀行	豊平支店	18	豊平町立動物園	豊平町立動物園
9	北海道銀行	豊平支店	19	豊平町立植物園	豊平町立植物園
10	北海道銀行	豊平支店	20	豊平町立公園	豊平町立公園
11	北海道銀行	豊平支店	21	豊平町立児童遊園	豊平町立児童遊園
12	北海道銀行	豊平支店	22	豊平町立老人福祉センター	豊平町立老人福祉センター
13	北海道銀行	豊平支店	23	豊平町立障害者福祉センター	豊平町立障害者福祉センター
14	北海道銀行	豊平支店	24	豊平町立障害児福祉センター	豊平町立障害児福祉センター
15	北海道銀行	豊平支店	25	豊平町立障害者職業訓練センター	豊平町立障害者職業訓練センター
16	北海道銀行	豊平支店	26	豊平町立障害者就業支援センター	豊平町立障害者就業支援センター
17	北海道銀行	豊平支店	27	豊平町立障害者生活支援センター	豊平町立障害者生活支援センター
18	北海道銀行	豊平支店	28	豊平町立障害者相談センター	豊平町立障害者相談センター
19	北海道銀行	豊平支店	29	豊平町立障害者支援センター	豊平町立障害者支援センター
20	北海道銀行	豊平支店	30	豊平町立障害者自立支援センター	豊平町立障害者自立支援センター
21	北海道銀行	豊平支店	31	豊平町立障害者更生センター	豊平町立障害者更生センター
22	北海道銀行	豊平支店	32	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
23	北海道銀行	豊平支店	33	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
24	北海道銀行	豊平支店	34	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
25	北海道銀行	豊平支店	35	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
26	北海道銀行	豊平支店	36	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
27	北海道銀行	豊平支店	37	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
28	北海道銀行	豊平支店	38	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
29	北海道銀行	豊平支店	39	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設
30	北海道銀行	豊平支店	40	豊平町立障害者更生施設	豊平町立障害者更生施設

解 圖

畑 田水 溝水下



# 北海の利源

農學士 安東義喬校閱

小新聞記者 坂牛祐直著述

## 緒言

三十七、八年戰役全勝の効果を以て國威を海外に宣揚し先進列國を凌駕するを得たるに拘はらず富國強兵の根源たる實業界の萎靡振はざる十年前の其れに比して比較的遅々逡巡たる如きの觀あるは何ぞや、願ふに先年戰勝の餘榮を以てして人心浮華に流れ從て薄弱なる事業頻々として簇生し忽ちにして倒産敗滅したるの結果に鑑み慎重に調査を重ね基礎を鞏固にするに非れば容易に企業に着

手せざるの自重警戒を爲すに職由するものにして決して永く現状維持に終るべきに非るは斯業者の皆期待する所なり、試みに本年上半期間に於ける各新聞雜誌を閲讀せば悉く此等各般事業其物の躑足して時機の到來を望みつゝ満を持して放たざる底の狀況を報せざる莫きに非ずや、

蓋し戦時中國家の要求は軍需品の一途に向け國民の精力を傾注せしめたるを以て一旦戦局の平和に歸し經濟關係の順境に復したる以上は時局の爲め一時緊縮控目にしたる各實業の俄然頭を擡げ反撥性を逞うせんとするは自然の理勢たらずんばあらず、是れ朝野人士の戦後經營策に腐心する所にして亦舉國汲々富國強兵の根本を培養するの道を論ずる所以ならん歟、此故に吾人は本道の事物を府縣人士に紹介し實業上の内容を説明するに方り最近の統計に加ふるに道廳の立案に係る北海利源の梗概を語るを以て極めて適切の事と信ず、并は他なし本道の自然が包含する無盡藏の事實の反響なればなり、

其れ然り戦後經濟界の樂觀と共に各種の事業翕然勃興の氣運に際會せり、今五月中旬の調査に據れば新事業經營の資金は全國を通じて一億九千九百四十七萬九千二百四十八圓、擴張事業資金は一億二千八萬三千七百八十圓合計三億一千九百五十六萬三千〇二十八圓にして而して全國中投資の最も多きは東京の一億一千二百八十三萬圓、大坂の四千七百廿九萬圓にして之に次くものは我北海道なり即ち其投資額實に三千百九十五萬五千圓を註せらる(石狩炭礦會社の探炭及鐵道を通算したるもの)願ふに鐵道國有實行の曉は經濟界に多大の遊金を生じ來るべきを以て斯の如く其固定したる資本を他に轉用せんとしたるもの事業勃興の動機となりしによるならん、

抑も北海道は沃野千里四面環海蓄積饒多地勢形便所謂天府の地にして面積六千三百三十五方里帝國本州の五分の二よりも廣く四國九州臺灣を併せたるものよりも大なり、千島群島を除くも其面積尙ほ五千百二方里にして之を奥州の人口配

在に照準せば優に四百萬人を容るゝに足る、海は則ち沿岸線一千三百五十五里を有し到る處魚族蕃殖し陸は則ち石炭木材等の天産に富ひの外地味豊沃概ね耕牧に適せり、北海道を知らざるものは單に冬季積雪互寒棲息に堪へざるものゝ如く思惟すと雖も防寒方法の周到なる反て其寒さを憂へず農産物の能く豊熟し水田の漸次開發せらるゝもの年々其町歩を増加し、且つ空氣高燥水質清冽加ふるに震災の虞れなき等數へ來れば北海道に於ける天資の氣候風物は人間の生活に適合するの事項を多々發見すべく北海道を以て天然の樂土と稱するも決して溢美に非るを信ずるなり、然り而して本道農耕適地面積百十九萬餘町歩の内既墾地僅かに三十四萬町歩にして猶其三分の一を成墾したるに過ぎず、牧場適地面積百三十萬餘町歩に對しては民有既成牧場及官有牧場貸付地を加算するも約四十萬町歩にして是亦其三分の一に足らず、更に人口の割合より之れを吟味せんか明治二年開拓置廳の當時僅々五萬人に充たざりし人口は明治三十八年末に

は百十九萬二千三百九十四人戸數廿二萬七百八十八戸を算するに至りたるも一方里平均百八十三人に過ぎずして奥羽六縣の一方里平均歩合最低度に位する岩手縣の八百十八人に比するも猶四分の一に充たず、右は殖民事業の初歩なる過渡時代を平均したるものなれば其進歩甚だ遅々たるものありしも交通機關の設備普及し未知の産物俄然價格を生じ各種の事業勃興するに至らば今後十年間の發達歩合を一年五分の増率と視做すも明治四十九年には百七十三萬人強となるべく尙當局の調査せし本道の容るべき四百十七萬人の豫想人口に對比する時は非常なる懸隔を存するを知るなり、本道の前途多望なりと謂ふ可し、請ふ是より項を逐ふて本道の實業界事項に就き發達の現状と將來の豫想を述べて來道者諸君の參考に供すべし、

## 移民

時局中召集にある者の除隊に繼ひて旅行禁止の解除となり或は東北地方饑饉等の事情により春來移住民劇増の傾向ありしが戦後本道起業熱の勃興と共に俄に移住者の希望を繋ぎ本年上半期即ち六月末日迄に來着せし總數は戸數一萬七千二百〇七戸人口四萬一千〇〇九人の多數に上り殆んど三十六年一ヶ年中の全數に達せんとし之を昨年と同期間移住者七千八百八十四戸一萬八千六百五十人に比せば戸數に於て一萬〇二百三戸、人口に於て二萬二千三百五十九人の増加せしを見るなり今一月以來各月の移住者を示せば左の如し

月次	戸數	人口
一月	一、二三二	二、二七九
二月	二、六二九	五、七五六
三月	六、一五七	一五、七三二
四月	五、三七一	一三、二九四
五月	一、二二三	二、〇七〇

六月 戸數 八〇八 人口 一、八七七  
計 一七、四一〇 四一、〇〇八

更に府縣別に就て見るに戸數及人員とも宮城縣最も多く之に次くは福島富山岐早等なり今其中千人以上の分を擧ぐれば左の如し

縣別	戸數	人員	縣別	戸數	人員
宮城	三、五二八	七、四四五	福島	二、〇〇七	四、三三五
富山	一、八九二	五、六五二	岐早	一、六五四	三、五八五
岩手	一、〇九二	二、七四四	徳島	一、一七四	二、四五五
山形	八〇六	一、七四〇	石川	五一七	一、四三一
香川	五九五	一、三二一	新潟	五四二	一、二五一
福井	三七七	一、〇六一	愛知	三三七	一、〇一七

又上陸地別に示す時は

函館	一四、六二二	室蘭	一三、四六五
----	--------	----	--------

移民

北海の利源

小楳 九、三八九  
其他 三三七

釧路 三、一九五  
計 四一、〇〇八

而して之を移住地別に示せば左の如くにして石狩國最も多く之に次ぐを天鹽、  
膽振、十勝等と爲す。

國別	戸數	人員	國別	戸數	人員
渡島	二〇一	四四一	後志	一、五一八	三、三一六
石狩	七、九六九	一八、九六六	天鹽	二、一二六	五、五一六
北見	一、四一九	二、七七四	膽振	一、九四七	四、五八〇
日高	一二九	三二二	十勝	一、九五二	四、七一六
釧路	一三六	三六五	根室	一三	二二
計	一七、四一〇	四一、〇〇八			

右六月迄の分に加ふるに七月一日より同二十日迄の分即ち六百九十二戸一千二百六十七人を以てすれば合計一萬八千百〇二戸、四萬二千二百七十五人にして

之を前五ヶ年の

三十四年	三、四五三	一〇、五四七
三十五年	三、四三〇	九、八九四
三十六年	三、九二〇	一〇、九三七
三十七年	七、一五六	一八、四五二
三十八年	一〇、六七一	二六、四〇六

に比すれば最も多かりし三十八年の總數よりも七千四百三十一戸、一萬五千八百六十五人の増加を來せるなり、移民の趨勢斯の如し若し道廳に於て先住の成  
功者を模範的標準とし内地に派遣して保護獎勵の方法を周知せしむるの策を取  
らば則恒心を持せざる水呑百姓の類に非ずして所謂前途に幾多の希望を懷抱す  
る有力者の續々踵を接して渡來せんこと疑を容れざる所なり  
移住民に關する保護獎勵の特典に就ては道廳出版の手引草等に詳かなるを以て  
略す、

農業

本道の農業は近來非常なる發達を爲し來れるが昨三十八年中に於ける全道各種農産物の作付反別は二十六萬九千四百十六町八反歩にして其の收穫に對する價格は實に二千〇〇五萬九千六百五十七圓なり之を前年に比すれば作付七千八百十六町九反歩即ち三分弱を増し價格に於て百三十二萬〇七百四十九圓即七分強の増加をなせり、更に之を五ヶ年前に比すれば作付四萬六千九百七十四町七反歩即ち二割一分二厘價格六百八十一萬八千八百六十四圓即五割一分五厘の増加を示す、又昨三十八年度に於ける一反歩平均收穫價格は七圓四十四錢六厘に相當し最近五ヶ年中最豐なる三十六年の七圓四十五錢を除く外は何れも昨年に及ぶものなきの好結果を見るに至れり左に五ヶ年間の比較を示さん(道廳の調査に據る)

年次	作付反別	價格	一反歩收量格
三十四年	三三三、四四二、一 <sup>反</sup>	一三、二四〇、七九三 <sup>円</sup>	四、九五三
三十五年	三三〇、四〇七、〇	一〇、六一〇、一七八	四、六〇五
三十六年	二四〇、三〇四、七	一七、九〇五、六一一	七、四五〇
三十七年	二六一、五九九、九	一八、七三八、九〇八	七、一六八
三十八年	二六九、四一六、八	二〇、〇五九、〇五七	七、四四六

更に作付一反歩の收穫價格金十圓以上の種類を擧ぐれば其最多なるは藺の三十四圓七錢四厘を首とし之に亞ぐは、甘藍の二十一圓五十二錢、次は玉葱十九圓四十四錢一厘、次は薄荷の十四圓九十一錢六厘、次は杞柳十二圓四十錢六厘、葉藍十一圓四十六錢三厘、亞麻十圓七十錢八厘、米十圓七十九錢、大麻十圓四十五錢四厘、玉蜀黍十圓十八錢八厘等の順位にて其の最少なるは稗の四圓三十錢九厘燕麥五圓九錢六厘、次は蕎麥、豌豆、荳胡麻にして何れも五圓臺なりとす而して食用穀菽類十八種の平均は七圓七錢二厘、又特用作物十一種平均は八圓七十五錢六厘なり尙同年中五十萬圓以上の産出なりし重要農産物を擧ぐれば左



の如し、

種別	作付反別	收穫高	同上價格
米	一九、四三二、三 <sub>反</sub>	一五九、九三九 <sub>石</sub>	二、〇七五、三八五 <sub>円</sub>
麥	三五、四五五、六	三七三、四九七	二、六〇二、〇九五
燕麥	二四、六六四、七	五四八、四五四	一、二五六、七七三
黍	一三、三九二、三	一七〇、二一八	八二七、二九九
玉蜀黍	一四、一九八、六	二四二、五六四	一、〇〇五、八四四
蕎麥	一一、五六九、八	一一九、二四〇	六一九、六一六
大豆	四三、〇九四、〇	三五九、四九二	二、六七八、九四六
小豆	三四、五一九、五	三〇一、八〇〇	二、七五七、四八七
菜豆	八、〇八三、八	八二、七一五	七七二、七八九
菜種	二〇、四一三、三	一七七、〇八四	一、七〇一、八六三
馬鈴薯	二三、一一〇、六	五九、三六四、五七一	二、一二〇、五九〇
蘿蔔	三、四四七、一	二〇、九四五、三九一	七三八、九一四

其他(十八種) 二三、三五七、三、 二、〇三三、八九一  
 合計 二七四、七三八、七 二一、一九一、三九〇

而して農耕適地作付反別及收穫高等に就き之を田畑の二類に大別して將來を考案する時は左の如し

蓋し本道十一州中確實に水田の耕作に適するは渡島、後志、石狩、膽振、日高の五ヶ國にして此五國を米作區域とし其他勢を區別する時は耕作適地六十四萬〇三百十八町、牧場適地二十二萬七千〇十町、原野二十五萬八千六百六十五町其他二百三十八萬六千二百二十一町計三百五十一萬二千百十四町(天鹽、十勝にも現算せ)なり、尙右五國を東北六縣と同一地勢を爲すものと假定せんに東北六縣の總面積六百八十二萬一千八百九町歩田面積四十七萬一百九十七町にして其割合は一千と六十八奇零九三の比なれば之に據り本道將來の田面積を推測する時は少くとも田豫想面積二十四萬町歩を得るに難からず、而して本道田面積は三十

七年末現在二萬五百八十四町歩なれば田の豫想面積の一小部分を成功したるに過ぎず、既往十年の統計に依り本道田反別増加歩合を見る時は毎年平均一割九分六厘に當り尙將來に於て一年一割の増率を以て水田面積の増加するものと認め明治六十三年に至り即ち水田面積二十四萬町歩に達するを得べし、又本道耕地豫想面積は百十九萬町歩にして全部之を畑地となし一反歩平均六圓の收穫あるものとせば總收穫金額七千百萬圓に達すべく其内二十四萬町歩を水田となすも尙畑作年收穫高五千七百萬圓に上るべし此の如きは他の産物の企て及ばざる所にして畑作の普及は實に本道開拓の主要たる所以なりとす、今畑反別既住の増加歩合を三十年間の平均にすれば一ヶ年一割五分四厘、十年間の平均にすれば一割二分、五年間の平均五分五厘の増加に當れるを以て假りに五歩の増率とすれば今より十年後に於て五十七萬三千九百九十二町を成墾し得て即ち畑作收穫の年額五千七百萬圓の價格を見るを得んなり、

尙前記重要農作物の最も産額多くして製品の原料たるべき種類を擧ぐれば大麥の麥酒醸造に於ける、小麥の製粉に於ける馬鈴薯の酒精及び澱粉に於ける、其他亞麻大麻蕁等々は本道の特有産物として需要の廣き皆人の知る所なり

吾人は本道農業制度及び農家の農業組織に就き茲に卑見を述べて世の所謂大農場主及び農業經營者の参考に資せんとす、

○ 一、本道農業は混同農業を以て立つを要す、

(イ) 本道農業は其耕作の面積廣く之に要する勞力は自家勞働を以て供給し難きにより自然之れを動物の力に仰がざる可からず、爲めに農家は壹頭乃至數頭の馬匹又は其他の役畜を飼養し初めて農業經營上勞力の缺乏を防ぐ事を得べし、殊に本道は僻遠の地にありては勞働者を得る能はざること間々あるを以て牛馬を飼養して勞力の獨立を計ることは極めて必要なり況んや其飼畜より生ずる犢牛仔馬は又一種の生産として價格を有するに於てをや、

(ロ) 本道は如何に沃野千里土地豊饒なりとするも年々無肥料耕作の結果地力減耗して殆んど利用し得べからざるの地と化し去るもの少からず現に有珠、紋別の如き此の状態に陥れるものなり、開墾の初年においては土地肥沃の爲め肥料を要せざるも、年を重ねるに従ひ地力減耗するは賭易き所なり、本道は到る所野草に富むを以て厩肥を造ること最も容易の事なれば牛馬を飼養すると共に厩肥を製し肥料供給の途を講ずること一舉兩得に非ずや、

〇二、灌漑溝と排水溝の普及

水利の疏通を圖りて水田を開發せん爲めに全道を劃して灌漑溝施設の調査に着手し爾來各地の水利土功組合に於て着々灌漑溝を築設し年々水田の町歩を増加しつつあるは誠に喜ぶべきの現象たり、然れども本道は到る處水利の便を得易きと同時に卑濕にして一朝降雨あれば忽ちにして洪水氾濫を來し若くは陰濕の爲め地温冷却して作物の發生を妨ぐる所往々にして之れあり灌漑溝と共に排水

溝の築設必要なる所以なるべし

〇三、自作大農經營は敢て難事にあらず

現今本道大農場にして自作經營あるを見ず、表面は何々農場と稱するも土地は皆小作者に貸付け監督者を置きて小作料を徴收するに過ぎず多くは小作者に一任して全く監督者なきものあり故に土地及農具の改良等種々施設を要する者あるも單に小作料の収入を目的とする外何等の顧慮を費さざるが如し、蓋し此如き地主にあつては徒らに農場たる名稱の下に自己の尊大を衒ふに過ぎずして土地を愛護するの念甚だ薄し、若し小作料の収入にして資金に對する利子と租税とを支出して缺損を見るが如き事あらん乎忽ち其の土地を抛賣して小作人を犠牲にするもの少しとせず、然り本道農業の眞面目に有利的に經營さるゝは自作大農者に於て始めて見るを得べくして決して之を小作大農者に望む可からず、夫れ農業の發達は資本注入の多寡により決定さるゝものとせば資金を投ずるこ

と多きものは從て經營上發達を見るを得べく即ち其投資を吝まざる點に於ては小農者の大農者に及ばざるや同日の論に非ず、然らば則ち世の小作大農主義者は速に自作經營の方針を取るべく尙資本家の本道農業界に對する亦須らく自作大農組織の經營を爲し模範を示すと共に農業革新の率先者たらんこと希望に堪へざるなり

要するに本道農業は穀菽農業にして家畜の飼養未だ普からずと雖も混同農業の行はるゝ曉には到底現今の状態に在るものに非ず必ずや五町歩組織の農業は十町歩乃至十五町歩の組織と變更せらるゝに至るべく、而して農家の生産物は農産製造の原料と肉用動物の供給に重きを置き穀菽は次第に減少するの趨勢を示すべし、例へば大小豆の耕作は工業用に供給する特用作物と使用牛馬の飼料を耕作し各戸飼養の牝牛より得る牛乳により製酪事業は漸次盛大に赴くに至るべし

### 養蠶

養蠶の本道に於ける氣候の適合と野桑豊富の點より有望なる事業の一として確認せられたるは輓近の事に屬し殊に去三十六年北海道蠶絲協會の成立を告げ園田長官の熱心之を唱道せられて以來頓に較著なる發達を爲したり今三十八年中の斯業に關する成績を擧ぐれば左の如し

#### ▲養蠶

類 別	春 蠶	夏 蠶	計
飼育戸數	八、二五一戸	二、三二七戸	一〇、五六八戸
樹立枚數	八、四八九枚	二、六三九枚	一一、一二八枚
收 繭 量	六、二〇六、八三三 <small>分</small>	一、三九〇、三四九 <small>分</small>	七、五九七、一八二 <small>分</small>
似 格	一九四、九一五 <small>分</small>	三七、三一六 <small>分</small>	二三二、二三一 <small>分</small>

#### ▲蠶種

養蠶

北海の利源

類別	春	夏	計
製造家數	一一三戸	七六戸	一八九戸
製造高	一二、六五四 <small>枚</small>	一二、二四九 <small>枚</small>	二四、九〇三 <small>枚</small>
普通製	五五〇、一四一 <small>枚</small>	八四、五四五 <small>枚</small>	六三四、六八六 <small>枚</small>
此格ノ普通製			三四、八六四 <small>枚</small>
價格ノ普通製			一一、六九四 <small>枚</small>
價格ノ普通製			

(備考) 框製百蛾子以テ普通製一枚ニ換算スルモノトス

▲製絲

製絲家數	座繰	蠶絲	風絲	總價格金
器械座繰	四六六 <small>戸</small>	二、一三七 <small>戸</small>	三〇五 <small>戸</small>	九八、九八一 <small>円</small>
計	計四六九 <small>戸</small>			

而して養蠶業に在りては本道中空知支廳部内を最も産額多き所とし、蠶種は黒松内の北海道秋蠶改良社、札幌の末松格平、瀧川村の石澤泉太郎、伊達村の赤

眞社、永山村の宍戸儀助等を以て製造家の有數なるものと爲し而も本道蠶種の蠶蛆の害なき故に漸く聲價を高め府縣當業者の需用を増し供給殆んど繼かざるの製況に至れり、製絲は札幌製絲場(七十五人取)瀧川村の藤川兄弟商會(五十人取)を其冠たる者と爲し江別町の北海製絲傳習所、深川村の佐藤榊太郎、瀧川村の北海道瀧川製絲組合之れに次ぐものと爲せり

道廳當局の考案に據れば本道産繭石數既往十年の統計により一層獎勵保護の方法を加ふる時は今後十年間に春蠶は毎年平均一割五分の増加を以て來る明治四十九年には八十九萬五千二百十八圓に、夏蠶には二割七分を以て同年迄には五十萬一千二十圓に蠶種の製造は一割の増加を以て七萬七千五百六十七圓に累進せしめん計劃なりと云ふ

本道の機業は甚だ幼稚にして悲い哉製麻會社の亞麻織場と札幌區内松崎龍平名取好勝兩氏の絹織物の外注目し價ひするものなし、今三十六、七兩年の統計に

據るに絹織物は三十六年に十戸二百八十二反、價格二千五百五十三圓、三十七年は十戸、五百七十六反、三千九百八圓にして絹綿交織物は四十九反、百〇四圓、綿織物は一千七百九反、千七百七十二圓、麻及亞麻の織物は二萬九千〇四反、七千三百三十九碼、三十四萬三千三百二十六圓合計三十四萬九千百十圓なるが同年に於て製麻會社の好況なりしは戰時の軍需に因るものにして特殊の事情なるも同社は更に普通日用品の製造をも努めつゝあれば夏服地の如き追々聲價を得るに至るべし、由來本道の如き貧富の懸隔甚たしき地に於て絹織物業者ありて綿織物業者の絶無なる寧ろ怪訝に堪へざるなり、道廳此に見る所あり本年度より地方費を以て工業巡回教師を置き染織講習所を開設して機業及び染色の傳習を開始したるが假令其目的は冬季農家の婦女をして副業を授くるに在りとするも年次卒業生を出し巡回教師の各地方を一巡して其授業を普及するに至らば各自家用の購買力を轉ずるを得て漸く機業發達の端緒を開くに至らん

歟

牧畜

本道は曠漠たる平野青草遠く連り且河川に富むを以て到る所牧場適地を發見せざるは莫し故に本道牧畜のことたる農耕の事に先んじて改良の緒に就きたるは事實の證明する所にして府縣の如く農業の單位を耕作に置く者の夢想し能はざるものあり、而かも米國の飼育法に據り同國に於て經驗し選定したる良種を移し來りて着々土産の家畜を改良したるを以て其進歩の度に於て迅速なりしは自然の理勢と云ふべく、斯の如くにして將來の斯業の發展を圖らば愈々驥北の稱を專らにすると同時に畜産物の如き全國の供給地と爲すを得べし

今三十八年末本道家畜の現在調に牛は一萬四百五十八頭にして前年に比し二千六百四十九頭馬は九萬九千六百十六頭にして五千百九十九頭を増加せり、又羊

及山羊の總數は五百五十八頭にして二百三頭を加へ豚は七千九十五頭に  
して二千四百三十一頭を増せり、然るに本道牧場豫想面積約百三十萬五千町歩に  
して牧場内飼育牛馬を假りに一萬坪に付一頭の牛馬を飼育するものとすれば此  
の總頭數三十九萬千頭に上り、農用牛馬は本道豫想耕地百十九萬町歩にして、  
五町歩に一頭の馬若しくは牛を使用するものと假定すれば十三萬九千頭を要  
し、乗用運搬用、雜用に要する頭數は之を豫測するに難しとするも三十六年に  
於て(二十七年は時局の爲め數數の徵發ありしにより標準となし難し)乗用馬五  
千三百七十頭、運搬用及雜用に供せらるゝ駄馬四萬三千八百九十九頭計四萬九  
千二百六十九頭ありしを以て將來は之より増加するも減少することなしとせば  
其の需要頭は約五萬頭を見るを得、即ち右三者を通計し本道に於て將來六十八  
萬頭の牛馬を要するものと見做し而して牛馬とも斷然内國種を種畜に用ゐざる  
の方針を取り着々改良蕃殖せしむべしとは道廳當局者の計畫なりと、今牛と馬

に就て其改良の度を比較せんに本道の畜牛は其數に於ては馬數に比し約十分の  
一に過ぎざるも種類は年々海外より輸入の種牛多く隨て改良種に近きもの多數  
に上り内國種一に對し外國種二、雜種九の割合なり故に種牝牛又は乳用牛とし  
て年々内地府縣に輸出するもの數百頭に及ぶ誠に近年北海道廳の獎勵に依り畜  
牛の改良増殖著しく進歩し現に前年に比し貳千六百餘頭を増加せる如き未だ嘗  
て其比を見ざる所、此時に方り農商務省は本道月寒に於て三百五十萬坪の大地  
積を以て種牛場を新設せらる其の畜牛改良上に與ふる裨益の大なる基より論を  
俟たざるなり、(瀧川種牛場地は月寒種牛場ツキヤツツの一部にして事務所は月寒にあり)  
又馬匹も年々其數を増し現に十年以前に比し約倍數となり近々十萬頭に達せん  
とす、種類は内國種最も多く其比例は外國種一に對し雜種三十七、内國種百七  
十の割合なり、但全道中頭數の最も多きは石狩國にして良馬を産する地方は日  
高國なりしが、同地産の馬は種畜として内地府縣に輸出するもの或は軍馬とし

て購買せらるゝもの年々尠しとせず、蓋し本道産馬は躰尺に於ては多少低き嫌ひあるも肢蹄質強壯にして悍威に富み且つ性質温良行歩輕快なる特長を有するは日露戰役に於ても好評を博せし處なり、加ふるに本年政府より道廳に對し濠州産牡馬の多數と鹵獲牝馬の若干を配布せられ本道産馬の改良上一新動機に際會したるを以て専門家の研究を積み益々駿逸の産出を見るに至るべし、況んや政府馬政局を置き更に種馬牧場を日高國に新設し本道の畜産指導機關を擴張せらるゝ計畫あるに於てをや

家畜の蕃殖以上の如し隨て畜産物及其製造品も多からざるを得ず、今其一二を擧げんに牛乳の需要は三十七年には三千九百九十三石、其價格十萬六千五百五十九圓、三十八年には四千六百七十二石、價格十一萬六千九百三十七圓にして牛酪として府縣に輸出さるゝは三十七年には七千二百四十六英斤、此價四千八百二十四圓、三十八年には九千〇三十七英斤、價四千六百三十六圓、生肉の需要も

近年大に増加したるも未だ肉製品としての産出は殆んど之れあるなし誠に道内需要なる牛、馬、豚、三種の屠肉數量を擧ぐれば如左

	三十七年		三十八年	
	肉量	價格	肉量	價格
屠牛	八〇八、一八二	一九〇、七七六	一〇〇四、二三一	二五〇、四四八
屠馬	二五六、六六〇	二五、三二六	三七七、二七五	四〇、九五七
屠豚	四八九、六七一	七七、三六六	四六〇、二七三	七九、六四五

尙前記三種の屠數を擧ぐる時は三十七年には合計八千五百三十六頭、三十八年には八千七百三十頭なり

聞く道廳にては生肉及肉製品の供給を講ずる爲め着々調査中に屬し又一般畜産事業の發達を圖る目的を以て町村に共同牧場用地を給與して其町村内の飼養牛馬放牧の方法を取らしめん計畫なりと亦良策と云ふべし

茲に本道牧場の重なるものを紹介せんに官有牧場としては宮内省所管の新冠御



料牧場あり本場は日高國新冠、静内、二郡に跨り其地積一億一千萬餘坪を有し木柵延長六十三里餘に及ぶ明治五年創設に係り十六年今の御料となる現今駿逸の馬四千五百頭を畜養す、又農商務省所管の種牛牧場は石狩國札幌郡月寒村にあり目下創業中に屬せり、又釧路國白糠村には陸軍省所管の軍馬補充部支部あり三十三年の創設にして地積一萬五千餘町歩を有し軍馬千餘頭を育成す、其他地方費の經營に成る種畜場は札幌郡豐平村大字平岸字眞駒内にあり、舊開拓使の創設に係り三十四年北海道應種畜場と改め三十六年度に於て新に米國より種馬三頭種牡牛及牝牛數頭、豕、鶏の類を購入し尙農商務省無償貸付の濠洲産、有償貸付の全洲産牝馬、陸軍省より貸與の鹵獲露國産牝馬等を合し本年六月末現在畜養する家畜頭數は馬四百五十二頭、牛二百四頭、羊二百六十一頭、豕三十六頭、鶏百九十一羽あり本道畜産の今日あるを致せしもの實に本場の賜ものと稱するも溢言に非るなり民有牧場は全道至る處又多く大小總數二百六十七ヶ所其

總地積七萬三千九百二十九町餘にして最も大地積を有するものは三千三百餘町歩に及び一千町歩以上のもの十五乃至二十ヶ所あり而して飼養家畜の種類により牧場を區分すれば牛の専用十五、馬の専用百五十二、牛馬兼用八十四、牛馬羊豕を併せ有するもの十六なり左に重なる牧場を紹介せん

(1)前田農場 石狩國札幌郡篠路花川の二村に亘り札幌區を距る約三里半とす、明治二十一年三月掘基氏の創業に係り二十七年八月前田侯の所有に屬せり、地積三百十餘町歩専ら乳牛の改良蕃殖を主とし年々種畜として内地府縣に販賣するもの十數頭に上り現在牛八十三頭を有し小樽區に乳牛場を設置し牛乳を搾取し販賣すること日々壹石内外なり外に札幌郡輕川（ひかるがわ）に支場を設けり

(2)園田牧場、渡島國龜田郡桔梗村にあり舊七重牧羊場の跡にして園田實徳氏の經營に係る地積八百餘町歩現在牛八十三頭馬六十三頭其他綿羊二十三、豕十三頭を飼育せり種畜として府縣に輸出するもの年々十數頭に及び乳牛より

搾取する生乳は日々一石内外函館區内に輸送して販賣し其剩餘は牛酪の製造に供すと

- (3) 岩根牧場、日高國沙流郡波惠村に在り室蘭線沼ノ端より東方十二里の所にあり岩根靜一氏の經營に係る面積千二百四十九町歩、飼育する馬匹二百八十七頭牛は約三十五頭にして本道の乗馬産地たる屈指の牧場たり
- (4) 赤心社牧場、日高國浦河郡姉茶、野深二村に跨り浦河市街を距る二里餘地積九百二十三町歩現に馬二百七十六、牛五十六頭を飼ふ有數の牧場なり
- (5) 幌泉産馬改良組合、日高國幌泉村に於て明治二十七年の創設に係る地積四百九十町歩馬匹雜種百五十九頭を有せり
- (6) 山縣根室牧場、根室國根室郡根室町にあり舊開拓使の創設にして現今山縣勇三郎氏の經營に屬す總地積三千二百餘町歩之を六大區に分ち牧草を耕作せり牛三百十餘頭、馬百五十餘頭を畜養し畜牛及び種馬として年々府縣の需要

頗る多し

- (7) 柳田牧場、根室國根室郡厚前村字古丹更梅に在り根室町を距る五里餘地積六百六十餘町歩最近三十六年の創設に係る牛は現在百餘頭其搾取せる牛乳は悉く牛酪製造に供す馬は七十餘頭あり、牝馬數頭を買入れ専ら蕃殖を計り新に貸付を得たる濠洲産牝馬をも有せりと
- (8) 嘉多山牧場、北見國網走郡能取村に在り地積二千二百餘町歩現在馬百八十頭牛二十餘頭を飼養す北見國中著名の牧場なり
- (9) 藤野牧場、北見國網走郡網走村を距る里餘藤野四郎兵衛氏の經營にして其箇所實に十八、地積七千九百九十町歩、肉牛及乳牛の蕃殖を主とし現在牛四百五十餘頭馬五百九十九頭を飼ふ、又根室標津郡智知野村にも同氏の大地積牧場ありて現在牛馬各五六十頭を畜養し、尙上川郡美瑛牧場に於ても盛んに乳牛の蕃殖を圖りつゝあり

- (10) 白老牧場、膽振國白老郡社臺村にありて地積一千五百七十餘町歩を有す、馬三百餘頭を畜養し同國中有名な牧場にして駿良の馬匹を産す
- (11) 晩成合資會社牧場、全會社は當縁郡當縁村字生花苗に在りて明治二十一年の創立に係り牧場に農場を併置し地積七百町歩、牛馬約四百頭を有し成績良好にして前途益々發展の傾向を呈し稀に見る所の大規模たり現社長を長澤茂吉氏とす
- (12) 十勝牧畜株式會社、十勝國中川郡幕別村大字別奴村にありて明治三十四年二月創立せられ資本金三萬五千圓(内拂込金九千八百圓)を有し株主四十名より成る、創立の當時有澤三郎氏社長たりしが三十七年改撰の結果黒島九平氏當撰し現に社長たり、二箇所に牧場を有し盛に牛馬を放牧し益々進運に向ひつゝありと
- (13) 澁田牧場、中川郡本別村字上利別にありて明治卅三年十二月澁田榮次郎氏

の土地貸與を受けて經營せし所にして坪數四十四萬五千三百二十坪あり、熱心馬匹の改良に勤め目下百四十餘頭を有し一ヶ年の収益一千圓以上に及ぶといふ、

- (14) 鹽野谷牧場、河西郡芽室村大字羽帶村にある大牧場にして地積百四十萬坪、上川郡旭川町近方鹽野谷辰藏氏の經營に係り三十三年土地の貸付を受け初め馬匹の改良を目的として起業せしむ、三十六年頃より畜牛に變更し經營怠ることなく今や八十餘頭の牛を放牧せりと、
- (15) 中丸牧場、宗谷郡稚内町字ウエンナイにありて中丸貞吉氏の經營に係る地積五十九萬八千六百四坪を有し馬三十六頭牛三十八頭計七十四頭を飼養せり、宗谷支廳管内有數のものたり、
- (16) 竹内牧場、枝幸郡枝幸村にあり其地積二十七萬一千七十坪を有し牛七十頭馬十五頭計八十五頭を飼養す場主は竹内徳助氏なり、

## 鑛業

本道海陸物産の豊富なる夙に帝國の寶庫と稱し北海の無盡藏といふ、然れども近年漁業漸く衰退の傾を呈し農業の進歩亦遅々たるに反し獨り駸々乎として旺盛に起さ旭日昇天の勢を示す者は蓋し鑛業を措て他に之を見る能はざるなり、夫然り石炭の如き硫黄の如き滿俺の如き其他金銀銅鐵等の如き其産額年を逐ふて巨額に上り本道の主要産物として重要視せらるゝに至れり、今石炭に就て見ても三十八年末現在に於て一ケ年千噸以上七十八萬噸の間に於て採掘を爲すもの後志國二ヶ所石狩國十四ヶ所天鹽國二ヶ所釧路國六ヶ所總計二十四ヶ所の多きに上り、又三十八年度産額百十七萬七千五百一十一噸を以て二十九年度産額に比せば二倍半以上の増加を示し、本年度に於ける事務の擴張と未開炭田の開發は其産額を増加するは必然の理にして本年度産額豫想は百三十五萬八千四百四

噸に上るべしと云ふ、

戦後内外資本家の本道事業に對して注目を惹き從來の會社に増資するもの、外資を輸入するもの、又は新たに會社を興すもの十數の夥さに上り本道新事業に投ぜらるべき資金は實に三千百九十五萬五千圓餘の巨額に達し、而して其資金の多くは採炭事業に投ぜらるゝを見れば本年以後本道に於ける鑛業界は蓋し目覺ましき活動を見るに至るべし、昨年十二月末に於ける札幌鑛山監督署の未處分鑛區件數は四百六十七通なりしに本年一月より七月に至る間に於て同署取扱に係る試掘採掘の出願件數は總計八百六十六件に上り本年度上半期に於ける登録稅手数料を合して五萬七千三百餘圓を算するに至れり、就中六月一ヶ月間にして二百二十三件の如き多數の出願者は監督署創設以來未曾有の事に屬すと云へば鑛業界の前途益々多望なるを證すべく、而して本年中新たに着手せんとする重なるものは石狩炭鑛(資本額千五百萬圓)釧路炭鑛(二百萬圓)留萌炭鑛(百萬圓)其他にして炭鑛

會社(四千萬)亦近く其事業を擴張せんとす、本道鑛産物の著しき増加を見るは期して俟つべきなり、今當局者の去る二十四年に於て調査したる本道煤田炭量を示せば左の如し

石狩煤田	五三七、八二〇、〇〇〇
釧路炭田	九、二九五、〇〇〇
留萌煤田	二一、七八〇、〇〇〇
羽幌煤田	一一、四九〇、〇〇〇
宗谷煤田	一〇、二〇〇、〇〇〇
茅沼煤田	一、八〇〇、〇〇〇
幕別煤田	四、二〇〇、〇〇〇

總計五億九千七百五十八萬五千噸にして二十五年以後に至り天鹽煤田を發見せり、今一ヶ年間百萬噸を採掘するものとせば今後六百年を支ふべく又五百萬噸を採掘するものとせば百二十年を支ふるを得べし、當局者の豫想する所に據れ

ば十年後に於ける本道石炭の産額は年々二百萬噸以上に達すべき見込にして之に亞ぎ有望なるは硫黄砂鐵の二種なりと云ふ、尙ほ左に石炭以外の鑛物に付て其概況を述べべし、

金剛鑛山、石狩凹地帯以西余市郡方面即ち北海道鑛山株式會社の經營に係る然別鑛山森鑛山に於て年々産出するものは三十八年度に於ける産額金銀銅鉛を通じて千二百七十六貫匁價額約二十七萬圓を出すに過ぎず且將來に於て増加の見込少なしと云ふ、

砂金、本道到る處多少之を産せざるはなし、往昔盛んに採集せる知内利別染退しりうちとしべしちやりの如きは今多く産出せず、近時最も盛んなるは北見國枝幸郡頓別川幌別川の流域石狩國樺戸郡ソブチ川にして三十八年度に於ける産額は廿九貫匁餘にして價格十一萬八千餘圓なり、

滿俺、本道南西部に於て産出す、後志國瀬棚郡美利河鑛山最も著名にして明治

二十六年以來採掘に従事す、昨三十八年度に於ける産額は四千二百三十六噸、餘此價額三萬三千八百八十八圓餘にして販賣先きは北米合衆國香港東京等なり。

硫黄、千島群島の諸嶺山最も多く之を有するも交通不便の爲め現今僅に國後擇捉に於て採收を爲すに過ぎず本島に於て硫黄嶺の多きは知床岬より石狩國土川地方に至る火山帯にして將來有望なるはオプタテシケ硫黄山、雄阿寒硫黄山等及渡島國の南東部膽振後志の火山地方とす、昨三十八年度に於ける産額は約三千萬此價額三十九萬圓に達せり。

石油、本道西部の各所に於て湧出す、其油田區域は日高國西部、膽振國の東部より石狩天鹽國を経て北見國の西部に至る一帯の地及び渡島國東部地方にして根室國目梨郡方面に亘れり、然れども從來の採掘法は不完全なるを以て好結果を得ず其業甚だ振はざりしが三十三年中インターナショナル會社が本道

の石油鑛に着目せし以來俄かに試掘を出願するもの多く採掘特許に係る油田三千百八十七萬坪の多きに達し尙發見の見込あり、但石油の容量及び其區域に就ては目下尙斯業者の試験中に屬し未だ容易に判定すべからずと云ふ昨卅八年度に於ける産額は五千五百九十八石餘なり。

鐵鑛、虻田郡虻田村に在る虻田鑛山は本道唯一の鐵鑛にして、鑛區五十二萬七百餘坪を有し東京市中平治三郎氏の經營する所にして昨三十八年九月より試験的採掘に着手し全年度に於ては九十三萬八千四百貫を採掘し本年に至り鑛石約二千噸は既に若松製鐵所に納付し尙本年度に於て二萬噸の採掘をなすの見込なりと云ふ。

砂鐵、本道産砂鐵は室蘭より幌内に至る附近一帯に産し十中八九分は悉く純鐵を含有し居るを以て此砂鐵を熔解して塊鐵となすの方法だに確定せば將來極めて有望なる事業にして且夕張産炭の如き尤も製鐵に適合すべき性質あるを

以て此等採炭を燃料として製鐵業を開始せば相當の收益あるべしとて北海道炭鑛會社に於ては既に重役會議に附し目下専門技師に依りて調査研究中なるを以て其結果にして良好なるに於ては本道鑛業界に一大生面を開くに至るべし、斯業は着手日淺きを以て昨卅八年度に於ける採取高は三百十貫目に過ぎず、

本道鑛業界の現況は以上述べが如くにして戦後事業勃興の機運に乘じ經營者に對し可成便宜獎勵を興へ且大に本道鑛業の面目を發揮せしめんとするの主旨を以て札幌鑛山監督署に於ては地質調査を行ふこととし全道を約二十事業區に分ち本年度より三ヶ年を期し第一着に炭田調査を行ひ漸次鑛區の整理に着手するの方針にして第一期を夕張方面第二期を空知方面とし擔當技師即學士大井上義近氏は既に之が調査に着手しつゝありと云ふ、從來當局者の斯業者に對する司法警察的態度に出て、當局者の不便少からざりしが新法令實施後力めて行政

警察的措置に出づると共に益々其改善と發達とを企圖せんとするが如き、斯業に對し官民漸く重きを置くに至りしは甚だ喜ぶべき現象にして本道將來に於ける鑛業界の活動は頗る注目を値ひするに足るものあるは信じて疑はざる所なり、

### 林業

本道森林の區域は頗る廣大にして全道總地積の過半を占め自然の狀態に於て豊富なる木材の産地たるは實に天恵とや云はん歟、之れを林種に區別する時は、

- 一、四百八十七萬九百七十五町歩 現在國有林
- 一、五十九萬〇六百五十四町歩 御料林
- 一、三萬八千五百六町歩 私 有 林
- 一、十八萬四千九百七十二町歩 模 範 林

林業

計 五百六十八萬五千七百七町歩

にして本道面積に對比すれば七割一分強に當る、然るに従來本道は耕地開拓に急にして往々多大の立木を伐採し或は一時投機的思想に驅られ濫伐を敢行して造林の法を講せず動もすれば森林經營を放漫に附するの傾きあるは慨すべきの至りなりとす、若夫れ林種と施業との調査其宜きを得て施設圖に中り保續を完備し産額を擴充せんか其收益に於て殆んど無限と謂ふべし、是れ道廳長官の戰後經濟策を講ずるに方り森林經營に依り年々一定の收入を獲得し以て本道の獨立經營をなさんと劃策したる所以なるべし、試みに當局者の調査せる木材海外輸出豫想に據れば枕木の未成鐵道に要する數量は京元鐵道百十哩を明治四十年乃至同四十三年に竣工するものとし蘆漢鐵道外七線三千九百三十七哩を明治三十八年乃至四十九年に竣工するものとし三十八年末に於て枕木及其他の木材總輸出額七十六萬一千三百六十八尺メなるを明治四十九年末に二百〇九萬七千六

百七十四尺メの輸出となさんとするに在り、而かも此産額を本道現在の林産力に對比するに本道森林には尙六百萬尺メの年伐餘力を存し、其木材の生産額を計上する時は（既往五年間の平均により枕木一尺メ九十七錢角材同上四十四錢丸太材同上二十八錢薪炭材同上三十三錢と見積）枕木、角材、丸太材、薪炭材の四種を合して三十八年末に三百六十六萬四千七百二十二圓を得るものは四十九年には六百四十六萬九千二百四十一圓を得べき割合なりと云ふ本道林産物の力も亦偉大なる哉、

本道樹種の効用を解せざるの人は木質粗笨にして建築若くは工業用の材料に適せざるを云ふも恐らくは深く調査を遂げざるの結果に外ならざるなり、今各種の利用材種に就き説明するの煩を避け茲には其最も需要の廣き二三の樹種を特別して紹介する所あるべし、

(一) 製紙原料、檜松とまつたけ、榎松とまつたけは其乾燥法完全なるに於ては建築材として幾んど内



地に於ける杉檜に比すべく、且つ造林法は人工造林より天然造林の優れるは該樹の特色なるをもて其成長も隨て速かなり、近來此兩樹は製紙の原料として歓迎せられ富士製紙會社の如き既に其事業を開始し昨三十八年度の如き九百二十萬封度價額約六十七萬圓を製出し尙各所に工場を起さんとし又王子製紙會社の如き近く水力電氣に依つて二大工場を起し大に事業を計劃せんとするを見る此樹種の用途益々有望なるを知るべし、

(二) 軸木原料、白楊樹の燐寸軸木の原料なるのみならず經木真田の原料として缺くべからざるものなるは既に人の知る所、戰後清韓地方に於て我が燐寸軸木の聲價も高めのつゝあるは喜ぶべきの現象にして北見國地方より産出する軸木の市場に於て一段の高價を以て取引さるゝに徴するも如何に其質の優秀なるを知るべし、昨三十八年度に於ける本道軸木産額は三千七百七十一萬三千三百八十斤此價額百三萬八千三百五圓之を五ヶ年以前に比せば二倍以上に及べ

るも該原料たる白楊樹は逐年缺乏の傾向を生じ今日に於て植樹の法を講せざれば遂に供給を杜絶するの恐れあるを以て當事者に於ては道廳當局者に對し官林無立木地に自費を以て白楊樹を植栽官私分收の出願をなし目下調査中なりと云ふ、

(三) 薪炭材、薪炭材として將來有望なるは樺にして彼の樺に優るとも劣ることなし、殊に該樹は陽樹なれば山火跡地若くは皆伐跡地の裸地に於て發生し手入を要せずして天然造林を行ふを得べく其純林を造ること亦容易の業なり、樺は鞣皮用單寧の原料として製革業者の必要とする所世の進歩に従ひ製革事業の益々盛んなるは各國の先例に見るも明かなれば該樹種の有望なること論を俟たず、況んや樺は樹の生育し能はざる火山灰土の如き乾燥せし處に生長するは其特徴にして而かも其皮は單寧を製すると共に材は薪炭材として適當なるをや、木炭は近來滿韓地方へ輸出するもの多く且東京地方に於ても之が

需用の途開け將來大に有望なるを以て當局者に於ても専門囑託員を各地に派遣して木炭製造法を實習せしめ大に之が改良を促かし且各農村に對し木炭輸出組合を設けしめんと目下獎勵中なりと云ふ、

(四)枕木材、本道産の鐵道枕木用材は重におほなら(まなら)やちだもの種類を應用せるが戰後清韓地方に輸出するの數量俄かに増進し將來十四五年間は減退すべき趨勢に非るを以て今日の如く素木の儘使用する時は忽にして材料の缺乏を告ぐるを以て獨逸國の如きは近年山毛樺<sup>マツノ</sup>を以て枕木に製材し理化學上の作用に依り藥液を注入して能く三十ヶ年餘を保たしむると云ふ、我國に於ても枕木の保續方法を講じ其交換期限を延長すると同時に一面には山毛樺を用ひて檜の主用材を補足せば豫期の如く遂に本道の林産物を擧げて無盡藏とするを得べし、本道幸に渡島國一圓後志、膽振の一部に於て鬱蒼たるぶなの林相を形成せるを以て人意を強ふするに足るものあるは慶すべし、昨三十八

年度に於て清韓へ向け輸出したる總額は四十八萬三千四百七十二尺にして之を五ヶ牛以前に比較すれば二倍餘に上り而して前途輸出の有望なるは前述べたるが如し、

其他建築主用材のとまつ、えぞまつに於けるかつら、おほならの建築材船艦材に於けるはりぎり(せんのみ)、やちだもの建具材船材汽車材をにくるみの銃臺、汽車窓戶、下駄材に於ける等有用の樹種枚舉に遑あらず、

之を要するに本道林産物の前途は頗る有望にして殊に清國に於て從來需用せし木材は多く鴨綠江沿岸産を以て獨占せしが日露戰爭の爲め此方面に於ける輸出一時杜絶せし爲め本道産松材の需用増加し且其價格比較的低廉にして能く用途に適合するの故を以て其需要遽かに劇増し其販路の地盤漸く鞏固にして再び鴨綠江沿岸産の木材市場に現るゝに至るも其價格に於て其實質に於て匹敵し難く爲めに壓倒せらるゝに至るべし、尙全地に於て需用する建築材橋梁材棺材木椗

等販路を擴張するの途多々あるに於て此際全方面に向て盛んに之が輸出の方法を講ずるは尤も急務に屬するを信ずるなり、

當局者の計劃する所に依れば從來林産業の施設は甚だ幼稚にして徒らに利益を放散するの恐あるを以て新たに林産試験場を設けて木炭の改良、醋酸石灰の採取、精製並製紙原料の製造、木材の耐久法其他必要なる研究を爲し、普く林産の智識を啓發し大に斯業の進歩を謀らんとすと實に時宜を得たるの所置と云ふべし、

### 漁業

本道海陸物産中從來二千萬圓以上の年額に上ほるものは農産物にして壹千萬圓の前後と上下しつゝあるものを海産物と爲す、本道を目して帝國の寶庫となし北海の富源と稱するもの蓋し之れが故なり、

然るに海産物の首位にある鱈の收穫數量は近年薄漁相踵ぎ漁業家春季收穫の豫

想は年々實收に伴はずして常に其豫期に反し爲めに失望に次ぐに落膽を以てし資産を盪盡するに非ずんば他に轉業せんとする者多きに至る、蓋し鱈收穫高の年々減少する所以のもの其原因種々あるべしと雖も魚族保護の方法を講ぜず之が濫獲を恣まゝにしたるもの其近因に非ざるなき乎、夫然り今にして鱈漁業の增收を圖り而して其價格を増加するの道を講ずるは刻下の急務にして漁港の築設を普及すると共に漁具の改良を圖り又鱈其物を食用として製造するの範圍を擴充せざるべからず、從來鱈は主として肥料に製造して之を府縣に輸出し食用として販賣するもの極めて少數なる身欠鱈に過ぎず是れ收穫數量の多大なるに比し價額甚だ僅少なる所以なりとす、近年北海道水産試験場に於て試験的製造を爲しつゝある鹽漬鱈燻製鱈の如き大に其販路を海外に擴張せば其價額を増收するを得べく、而かも其燻製鱈の如きは既に業に濠洲に於て好評を博したるものにして且將來浦鹽方面に對し大に輸入の見込あり鹽漬鱈の如きも日露戰役滿

洲各地に於て大に歓迎せられ將來需要の見込あるのみならず延いて西比利亞方面に向つても輸入の見込ありと云へば本道生産者の力を此等有利の新方面に傾注するの方針を執ること最も緊切の事なり、

漁港築設の事たる一昨年来北海道會の建議に基き當局者其必要を認め爾後地方費事業として灌漑溝と共に設計調査中に在るを以て着々築設の實現を見るべく斯の如くにして始めて收穫物を海中に委するの損失を減少し又風浪危険の虞れなきを得ん、

鮭、鱒、の類は自然の生殖に放任すれば漸次數量を減少するを以て人工孵化により其收穫を持續すべく、鯿は收穫甚だしからずと雖も大日本水産會社の事業に則り油漬を獎勵せば其價格を増すべく、鮫、鰻、鮪、鮒、鮠、鰈、比目魚、大鯿、柔魚等は沖漁業獎勵の結果漸く發達の趨勢に向はんとす、若し夫れ漁港築設の曉に至らば各沿岸出漁の便を得ると共に魚族の増獲に隨ひ各種の製造事

業を誘致するに至るや期して待つべきなり、

道應當局者の調査に據れば本年の水産收穫價額豫想は一千二百四十二萬三千九百十二圓（内鱒八百四十三萬三千九百九十一圓、鮭七十三萬三千五百八十圓、鯿五十一萬一千三百九十圓其他略す）にして十年後の明治四十九年には一割一分五厘強の増額にして一千四百三十三萬六千四百五十七圓を得るの割合なるが右は單に既往現在の趨勢を以て將來を推測したるに止まり現状維持の最少限度を算出したるに過ぎず、而して更に當局者の製法の改良販路の擴張に依り單價の昇騰したる場合の計算に據れば明治四十年の收穫總額は一千三百四十一萬〇二百二十一圓にして明治四十九年には二千〇〇六萬一千九百七十六圓を得べくして十年間に於て約一割五分に相當する割合なり、以上の増加率は今後廣く海外に向て販路を擴張せんとするに大計劃に對し寧ろ甚だ低度に失したるの感なきに非らず、況んや樺太の新領土及沿海州に對する漁業の益々發展せられんには

假令我北海道沿海の不漁に終ることなきに非ざるも樺太及沿海州の一帯に於ける漁業區域に於て豊漁なるを得ば以て本道の薄漁を填充して尙餘りあるべし、然りと雖も本道海産物の首位たる鯨にして一年の收穫六七十萬石の間を越ゆる能はずとせん乎是本道の一大打撃にして所謂漁業界の改革すべき時機にして更に新機軸を案出して漁業發展の法を講ぜざる可からざるの時なりとす、是れ當局の銳意苦慮する所以にして諸威國の例に倣ひ物理學的並に生物學的研究を爲さんが爲めに鯨棲息所探檢調査事業を開始すると共に鯨撈製造試験に従事し之が改善發達を圖り延て其分場を各地に普及するの計劃ある所以ならん歟、之を要するに我日本帝國は海岸線延長一萬八千五百四十一哩に亘り世界各國中第一位を占むるに拘はらず其漁獲高に就て之を見れば海岸線一哩當漁獲高二千四百四十四圓にして之を英國の海岸線一哩當に比せば僅かに十二分の一弱を示し漁業者一人當にすれば五十分の一に當り最末位に在る奧太利に比するも猶四分

の一に過ぎず、是れ明かに我水産業の幼稚なるを證明するものなり今單に我北海道の現況に顧み一ヶ年鯨漁獲高平均千二百萬圓と見積り之を鯨漁獲地方沿岸線延長百三十九萬七千六百四十間を哩數に換算し一哩當に計算すれば漁獲高四千七百十三圓にして猶英國に比し六分の一に過ぎず、由來我北海道は世界三大漁場として世界に知られ歐米人の齊しく好漁場として垂涎するに拘はらず反て其漁獲の小額なる所以のものは固より資金の乏しきに依ると雖も亦大に水産智識の缺乏漁具の不完全に基因するもの多し、凡そ人口の蕃殖するに従ひ食料品の需要増加し随つて近海魚族の減少するは數の賭易き所にして勢ひ進んで遠洋漁業を企劃し生産無限の魚族を捕獲するの策に出でざるべからず本道の如き比較的其漁獲の少きは坐ながら近海の漁業に従事する者多くして絶て遠洋漁業を經營するもの少きに因るなり、此に於てか漁業上の設備を大にし漁船漁具の改良を施し常に魚類を冷蔵して船内に貯藏するの設備をなし積極的之が漁獲に力

めなば徒らに不漁を啣ちて嘆聲を洩らすの要なく大に其實益を收むるを得べし、誠に目下室蘭に於て試験中なる巾着網或はトロールの如き精巧の漁具を普及し舊慣を廢し漁民をして文明の利益を使用せしむること極めて策の得たるものと云ふべし、本道濱益郡漁業組合の如きは沿岸十一里に二十餘個の電話を裝置し鯨の群集を迅速に知らしめ一面交通の不便と天候の險惡とに伴ふ漁業上の損失を減少せんとしたるが成績頗る良好にして嘗に其危險を避くるとを得るのみならず漁夫の配置勞力の需給漁船漁具の活用宜しきを得て爲めに其收穫を増加せしと共に大に費用を削減し得たりと云ふ是れ單に一電話を用ゐて科學應用の一端を施せしに過ぎざるも尙且多大の利益を得るに至れり況んや漁船漁具の改良を施し大に水産智識の缺乏を補給するを得ば其漁業上大なる發展を爲し得るは毫も疑を存せざる所なり、尙其製造に就て之を見るも本道鯨漁獲の如き僅かに其十分の一を粗製して食料

品となし其小部分を海外に輸出するの外肥料として塵芥と擇ぶ所なく殆んど天物を暴殄するに至る、吾人は此至廉なる肥料を轉じて之を食料品に精製し進んで海外に向つて販路を開くは尤も有利なる事業にして亦戦後經營に對し我利源を開發すべき唯一手段なるを信するなり水産の事業豈等閑に附すべけんや、且夫れ漁業收穫の比年不況を呈し漁業家の流離困憊する前述の如しとせば漁業經營の根本たる漁業資金を比較的低利に融通するの道を立て毎年高利に泣くの漁業者をして收穫の豊凶に因りて自家百年の業務を抛擲するの不安に陥る莫らしめんことを期せざる可からず、吾人は營業者に對し草創時代に立戻りて漁業資金を政府より貸與せよと慫慂する者に非ずと雖も二分五厘乃至三分の高利なる漁業資本に充て而かも會々豊漁に遭遇せる時は益々資本主より酷待を受くるの不幸を目撃するに於ては到底薄資漁業者の時運に伴ふ漁船漁具等の改良を企圖する時機なかるべきを見て此等救濟の策を講ずるの急務なるを絶叫せんと

欲す、彼の商業者に對しては幾多の機關銀行あり農業に對しては勸業及び拓殖銀行の在る如く漁業家に對する水産銀行設立の必要を感ずるなり、今三十七年中漁業の爲め要したる資本額を見るに約七百萬圓以上にして三十六年の海産總價額は千三百四十萬七千圓、三十七年には千二百九十一萬五千圓に及びたり、夫れ然り普通資本に對する所得の上より打算するも斯る巨額の資本を要する大事業にして而かも本道唯一の財源たる漁業に對して金融機關を缺如するは寧ろ國家の爲めに甚しき不利益と云はずして何ぞや、吾人は道廳當局が諸般斯業の改善を加へ販路を擴め刷新を施さんとするの計劃あるに於て低利の資本を漁業經營に注入せしむるの機關を開設するは最も緊急の要務なるを信せんと欲す、將來海産物の發展を企圖せんとするの切なるより一言茲に論及して大方の注意を惹かんとするものなり、

今參考として大日本水産會社の調査に係る各國の海岸線及漁獲高價額等の對比

表を左に掲ぐ

各國海岸線延長

日本	一八、五四一哩	佛國	二、〇四三哩
米國	一四、八五〇哩	那威	一、八三三哩
加奈太	一二、七八〇哩	澳太利	一、七三五哩
英國	三、一一〇哩	獨逸	一、〇九八哩
伊國	二、一六〇哩	和蘭	一、〇一八哩

各國漁獲高比較

國名	漁獲高	海岸一哩當漁獲高	漁業者一人當漁獲高
英國	九四、九二三、七九〇 <sup>四</sup>	三〇、五二二 <sup>四</sup>	八九七 <sup>四</sup>
佛國	四九、五三〇、九一八	二四、二四四	三二四
獨逸	一二、五四四、二六九	一一、四二五	三八九
那威	一八、二四九、七四四	七、六三八	一九七
漁業			五七

北海の利源

米國	九二、三九〇、三九四	六、二二四 <sup>円</sup>	五八
和蘭	五、九一二、二七六	五、八〇七	四三四 <sup>円</sup>
加奈太	五一、四七四、三〇六	三、五六六	三一六
伊太利	五、二九二、三〇九	二、四五〇	六五七
日本	四四、二四五、二五四	二、四四四	五九
奧國	二、二四八、三九二	一、二九六	一八
			七八

各國漁類價格對照一般

類別	每一貫目我國平均相場	同上歐米製造品平均相場	我が一ヶ年漁獲高
鰻	一三九 <sup>円</sup>	五、六九二	六六、七三〇、〇〇〇
鯉	六九	一、五五八	四五、六九〇、〇〇〇
鱈	二二五	八八四	二、四八〇、〇〇〇
鯖	一〇四	二、二四七	六、一五〇、〇〇〇

工業

本道の工業は逐年進歩の趨勢を示すと雖も其種類に於て産額に於て未だ寡少を免かれざるは甚だ遺憾と云ふべし、然れども工業原料の豊富なる他に比類なき本道に於て此等工業の興らざる理なく、開拓の進運に連れ人口の増殖するに従ひ各種生産物の増加すると共に工業の發達を促進するは固より論を俟たざる所にして又一面工業の勃興は生産業の發達を助長するに至るべし、開拓使時代に在ては主として衣食住に必要缺く可からざる醸造、製糖、製油、製紙、製粉、製絲、紡績、製革、鐵工、木工、挽材、罐詰製造等の諸工場三十餘を各地に創開して其模範を示し啓發誘導に努めたる結果始めて工業其の端緒を開くを得たり、次て此等官營の事業を漸次民間に拂ひ下げ且工場の新設を獎勵する爲め明治十九年以來六ヶ年を期して資本金額に對し年五朱の利子を補給することゝな



りしを以て民間有志の手に依り北海道製麻會社、札幌製糖會社、紋龍製糖會社、興産會社等の經營を見るに至れり、爾來世の風潮に伴ひ一盛一衰の觀ありしと雖も年所を經るに従ひ諸工業の隆興せるもの多く昨三十八年度の如き製造家五千九百五十五戸職工人員一萬六千三百四十六人工産物製品價額九百八十六萬四千九百餘圓に上り更に増加の割合を示せば毎年約八分の増率に上れり、試に本道工産物の種類を擧げんに清酒、麥酒、燐寸軸木、亞麻織物、亞麻製絲、セメント、諸雜詰は其の最たるものにして今主なる製品に付き其産出額増加の割合を見るに清酒造石高は既往十年間に於て平均一ヶ年三分二厘の増加をなし又麥粉は一割三分、軸木は一割の増加に當る其他は之に準じ年々何れも其産額の増加を示せり、今當局者の考案に據れば本道工産物の産額は明治四十九年度に於て實に一千二百六十一萬〇六百八十二圓に達し之を昨卅八年度の産額に比し三割以上の増加を爲さしめんとするに在るが如し吾人は之を既往の實蹟に徴し其豫

期に違はざるを信ぜんとす、由來本道の工業品たる唯天産物に多少の人工を加へたるに過ぎずして甚だ工藝品に乏しと云はざる可からず、今や本道文物の狀態は亦昔日の比にあらず之を府縣の現況に照すも生活の程度復かに上位に在るのみならず其富力も年々に増殖し住民亦漸く華美を好むの傾向を生ぜり、夫れ生活裕かなれば自ら華美を裝ふの念生じ人文盛なれば従つて美的觀念を煥發するは人情の自然にして本道將來に於ける工業界は此種方面に對し其希望を充たすの覺悟と抱負とを以て大に其製品の改善振作を圖ること最も肝要なり、今將來に對し奮勵すべき工藝品多々ありと雖も就中絹織物等の如き其原料豊富なるに於て大に其産出を促進すべく、又陶磁器の如きも之が原料に適合すべき恰好の土質あるに於て亦有望なるべく、家具什器の類に至つては本道の特産たる木材を充用し盛んに之が製作を試むるに於て最も有利の事業たるを信ずるなり、顧ふに本道の木材は從來乾燥不充分の爲め間々製品の聲價を失墜したることあ

りと雖も若し其材料を精撰し乾燥を充分ならしめば決して府縣の其れと比較して遜色あるものに非ざるなり、今や本道の事業は戦後經營の進運に驅られ總ての方面に向つて發展雄飛すべく而して此等製造業に對し必要なる原動力は水力電氣の設備完成を待ちて近く一大生面を開かんとするの機運に際會す、況んや農産物の發達に伴ひ加工して製品となすべく又水産物製造業の益々擴張すべきもの多々あるに於ては本道工業界の前途洋々春海の如しと云ふべし、

之を要するに本道工業界は原料の豊富なるに於て永く自然の發達に委するを容す可からず若し之を放任して顧みずんば遂に有利の事業をして空しく山間谿谷に埋没するに至らんのみ故に吾人は地方費を以て模範的一大工業試験所を開設すると同時に木工、冶金及び其他の實業學校を新設し各種の工藝品に對して審査研究を加へ、理化學的學理を應用して分析試験より模型標本を作り、小は手巧的細工より大は造船建築の設計に至る等試験所と實業學校と相待ちて本道前

途の工業に對し光輝ある運命を啓くの機關を設備せんことを希望して止まざるものなり、

## 商業

本道の商業は海外貿易、府縣取引、其重なるものにして函館、小樽の二港之れが關鍵を占め船舶常に輻湊し商取引頻繁にして百貨聚散の二大市場たり、而して函館港は本道南東部の咽喉に位し其商業區域は渡島、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島の諸國及北見の一部に亘り、小樽港は本道西部の關門にして其商業區域は後志、石狩、天鹽の諸國及北見、膽振、十勝諸國の各一部に亘り近來新たに樺太半島の加はるあり且戦後露領に對する貿易俄かに膨脹し尙將來發展の機運に向ひつゝあり、之に反し函館港は十數年來薩哈噠島漁業の獨占者たりしが該半島の我版圖に入りしより全島に對する商業關係は多く小樽港に移轉

し商況又昔日の如くならずと雖も依然本道の要港たるを失はず、今後拓殖の發達に伴ひ新に港灣の修築に着手せられんとするもの二三に下らざるを以て此等竣功の上は本道商業上更らに一段の進歩を爲すは照々乎として炳かなり、本道對府縣の輸出入は逐年増加の趨勢を示し既往十年中日清戰役當該の二年を除き八ヶ年の平均に依れば毎年六分九厘の増加を示し三十七年度輸出三千七百九十萬二千四百六十五圓輸入四千百五十六萬三千七百九十四圓合計七千九百四十六萬六千二百五十九圓にして之れを前年度に比すれば金三百〇五萬八千八百七圓を減少せり、是れ日露開戰に際し内は生産及消費力を減殺し外は露艦の出没と船舶の缺乏とに依り運賃の暴騰を來し貨物の輸送を沮害したるに因る、然れども之れを十年前に於ける日清戰役當時に比較すれば共に一倍以上の増加を示すを以て本道拓殖事業の劇進せるを推知するに足るべし、而して輸出品中重なるものは水産物にして其過半數を占め之れに次ぐを農産物、鑛産物、工産物、

林産物等と爲す、輸入品は米穀を主とし呉服、太物、酒、煙草、砂糖、繩、苳、魚網等之に亞げり、最近五ヶ年間に於ける輸出入を比較するに明治三十三年度に於て千二百四十萬圓の輸入超過は三十七年に至り三百六十萬圓に減少し逐年超過額を減ずるは輸出に於て増加し輸入に於て減少せるの結果にして本道生産業進歩の健全を證すべく而して外國貿易又年々に膨脹するを以て府縣貿易の輸入超過は敢て悲觀すべき者に非ずと雖も道民たるもの益々拓殖生産の業に精勵し銳意輸出の増進を圖らざるべからず、

本道對海外貿易は秩序的進歩を爲しつゝ、あり既往十年中日清戰役及日露戰役の當該年を除き八ヶ年の平均に依れば輸出入總額に於て毎年二割七分の増加を爲せり、明治三十八年中本道諸開港場を經由せし輸出入總額は六百三十八萬一千六百八十六圓餘にして内譯輸出額五百二十五萬五千九百三圓輸入額百十二萬五千七百八十二圓餘なり之を前年に於ける貿易額に比すれば輸出額に於て二割二

分以上輸出額に於て約三割を増加せり、是れ三十七年は日露國交斷絶の爲め本道に於ける外國貿易は多大の影響を蒙るに至りたるも三十八年に至り我國連戦連捷の餘響は海外貿易の發展を促し來りしに因る、尙戦争以前三十六年度の輸出入總額九百八十六萬圓に比較すれば輸出額は二萬五千五百圓を増加せしも輸入額は之に反して三百五十萬五千八百八十九圓を減少せり、是れ戦時に際し本道鐵道其他の大工事殆んど休止せられし爲め外國品に屬する鐵材器械等の購入少なきに因り、而して三十八年の貿易は前年に比し支那輸出最も増加せるは主として海産物輸出の増加及日露時局の爲め鴨綠江沿岸産木材の輸出中絶を機とし鐵道枕木其他木材類の輸出多かりしに因るなり、其他北米合衆國に對しては石炭硫黄の輸出、香港及蘭領印度に對しては石炭の輸出、濠太刺亞に對しては硫黄の輸出を増加せしも、韓國に對しては京義、京釜の兩鐵道總て竣工せし爲め鐵道枕木の需用大に減殺したり、輸入に在つては北米合衆國より輸入する

石油年々に増加し而して露領方面は從來漁業貿易にして輸出品は出漁の爲めに必要なる材料を携帶するものにして、輸入品は多く其漁獲品なりしが戦後普通貿易の途開け雜貨の該方面に輸入せらるゝもの頗る増加せり、尙將來西比利亞鐵道の完成と共に同地方一般の開發に伴ひ露領に對する貿易は長足の進歩を爲すに至るべく、對清貿易に付ては海産物及木材の輸出大に増加し將來重要輸出品となるは疑を容れざる所なり、

室蘭港又本道貿易港の一として石炭木材等の輸出發展の氣運に向ひつゝあり他日炭鐵會社の本社を此の地に移轉し且鐵道支線の聯絡完成を告ぐるに至らば獨り木材石炭の輸出に止まらず、農産物其他の輸出を見るに至るや必せり、

尙釧路港灣の修築は當局者の設計にして實行せらるゝに至らば東海岸一帯の一大要港として飛躍を爲すに至るべきは明かなり、

要するに本道對海外貿易は之を既往十年間の事跡に覈へ明治三十六年度の輸出

入總額九百八十六萬圓を以て明治二十七年の輸出入總額九十五萬圓に對照すれば實に十倍以上に上る既往を以て將來を推すに本道對海外貿易は戰後事業の勃興と共に拓殖の進運を促かし近く一大進歩を爲すに至るべきを信するなり、金融、本道金融機關として拓殖の進歩を圖るに利便を與ふるは資本金三百萬圓を有する北海道拓殖銀行の外商工業者に對する金融機關として本道に本店を有するもの十一行其資本金三百貳拾七萬圓にして府縣より有力なる銀行の本道各地に支店を設くるもの九行十四ヶ所あり、其運轉資本も亦多額にして本道實業界に利便を與へ商工業の發達を圓滑ならしむ、今最近五ヶ年間に於ける本道各銀行の預金及貸付金の比較を示せば左の如し、

銀行預金貸付金最近五ヶ年比較

年次	預金	貸付金
全三十四年	八、七二三、八九九	八、四六一、九八八

全三十五年	一〇、七〇六、〇一三	一〇、一二七、五二九
全三十六年	一三、九九九、四六六	一〇、〇九一、五一三
全三十七年	一四、四九八、九四四	一一、四〇五、八九〇
全三十八年	一六、〇三一、九一八	一五、二一八、四八五

明治卅七年末現在を以て三十二年に比せば預金貸付金何れも八割以上の増加を示し之を五ヶ年平均にすれば毎年一割三分餘の割合を以て増進せり、況んや戰後我北海道に對し外資續々輸入せられ諸事業に投資するもの日に増加するの時に於て金融界の一大膨脹を爲す蓋し遠きに非ざるを知るべし、

今本道内外商業の發展に隨ひ必要喫緊なり施設事項を概括すれば左の如し

- (イ) 從來の應立物産陳列所を擴張して商品陳列所の性質を加へ商品の標本を示すと同時に需要者と生産者との間に立ち取引の紹介を爲すべきこと
- (ロ) 函館、小樽兩區には商品陳列館の設備を要す
- (ハ) 滿韓及清國露領の樞要地に向け商業實習生を派遣すること

- (ニ) 本道の物産共同販賣店を前記の各方面に設置すること
- (ホ) 海外輸出品の今後見込ある物産に限り地方費若くは國費を以て補助若くは特別の便宜を與ふべきこと
- (ヘ) 本道産物の海上展覽會を開始すること

以上の項目は事新らしく必要の理由並施設の方法を絮説することを爲さず蓋し北海道の運命を慮る者にして何人も其異議なきを信ずればなり、但し抽象的に其二三の事項を擧げんに抑も本道の産物は府縣人士に諒解せられざるものあり尙販路を擴張すべきもの一にして足らざるも而も販路の無限なる比較的有利の地を求めて供給を圖るは實業者の當さに努むべき要務にして此の點に於て滿韓地方及び清國浦鹽等は將來永遠の大得意なるを忘るべからず、故に此等事業に志し此方面に向つて大に其驥足を伸ばさんと欲する者は速かに之が輸出販賣組合を組織するの急務なるを勸告せんとす而して之が重要品輸出組合に對しては、

道廳に於て汽車汽船の輸送上農産物運搬の例に據り特別割引を適用し特殊便利と保護とを與へて大に之が輸出を奨励せんことを要す、北海道の産物を廣く内外人に紹介し商品取引の端緒を開くの便法は海上展覽船を廻航せしむるの一事より善きはなし、道廳當局者曾て昨年戰爭當時戦利船の下付を得て東洋諸港に新し物産展覽船を派遣するの計劃ありしも政府の不許可と同時に其議沙汰止みとなりしは吾人の記憶に新なる處目下計劃中なる大阪海陸運輸時報社の海上博覽會及報知新聞主催のロセッタ丸巡航船の擧を想見する時は彼等をして先鞭を著けたる明に誇らしむるの遺憾なき能はざるなり、亦も此の物産展覽船の如きは實業の發展を圖る上に於て義勇艦隊を平時利用すると同一の組織を以て商業巡航に充て戦時には直ちに武器を艤装して假裝巡洋艦の任務に服せしむるも亦可ならむや商業の振興策にて就て卑見の一斑を述ぶること爾り、

## 交通

本道草莽の時代に在つては森林鬱茂し荆棘叢生し田野開けず人煙稀薄にして海陸共に交通の便なく久しく皇化に浴せざりしが下つて松前藩管轄の頃に至り北陸道及奥羽地方との交通稍頻繁となりしも請負人の所有船又は雇船を航行せしむる外妄りに他船舶の往來を許さざりし、渡島地方は當時既に道路を設け傳馬の制を施さたりしも奥地に在つては僅かに土人の往來する徑路ありしのみ、明治二年開拓使を置きて以來官諸製造の業を興し拓地殖民を奨励せし結果、逐年開發の域に進み次て道路の開鑿となり航海業の奨励となり明治六年には船舶數隻を民間有志に貸下げて航海の業を開かしめ、翌七年には三菱會社及運漕會社共に支店を函館に置き、函館東京間の航海を爲し尋て小樽根室等へ其航路を延長せり、而して函館札幌間の道路は明治四年より開鑿し、郵便は明治五年電信

は明治七年に創始し鐵道は明治十二年始めて幌内鐵道(手宮幌内間五十六哩)を敷設せり、明治十八年官船の航海を廢し代ふるに郵船會社に命じて函館横濱間、函館根室間、函館小樽間、函館青森間、小樽宗谷間、及千島北見地方に航海をなさしむるに至れり、明治十九年北海道廳となりてより拓殖の事業益々進歩すると共に航海の發達之に伴ひ官費保護の下に開始せし航路數線に及び、明治二十二年炭礦會社に於て鐵道を拂下げしより益々延長して二百哩に達せり、其後政府は拓殖の進運に促かされて港灣の修築と鐵道の布設を感じ二十八年議會に詢りて空知太旭川間三十六哩の敷設決定し翌年六月工事に着手し三十一年七月竣工せり、之れより先き明治二十九年二月北海道鐵道敷設法發布せられて鐵道布設の方針確定し其幾部既に開通し三十四年に至りては更らに本道土木の十年計劃成り全年度より以降十年間を期して國道三十五里餘、縣道八十五里餘、里道五百七十三里餘、市街道路六十四里餘、橋渠四十八ヶ所、排水道路千五百里

餘總計二千餘里の新道路開鑿を設計し爾來着々之が實行中に屬し戰時豫算繰延の外は皆之を進捗せり、又郵便電信の線路を擴張し河川航行に保護を與へて定期の發着を爲さしむるあり、三十二年以來札幌、小樽、函館の三市街及札幌小樽間の電話を開設し三十七年十月函館鐵道の開通を見るに至れり、之を要するに本道の交通機關は未だ全く具備するに至らずと雖も道廳當局者の設計せるが如く海陸の設備完成を告ぐるに至らば十年以後の本道は蓋し今日に幾倍するの盛況を見るに至らん、

今參考の爲め本道官私鐵道既成線及豫定線の總理數並に本道既設及未設の國道並に縣道を左に掲ぐ、

(但北海道鐵道は明治三十八年七月末現在其他官私鐵道は廿七年十二月末現在なり)

種別	既成	未成	計
官設線	上川線 三六、二	—	三六、二
第一期線	一八一、三	—	一八一、三
第二期線	—	—	—
小計	—	—	—
炭鐵鐵道	—	—	—
私設線	—	—	—
北海鐵道	—	—	—
小計	—	—	—
合計	—	—	—

種別	國道	縣道	計
既設	—	—	—
未設	—	—	—
合計	—	—	—

蓋し本道航海の發達は初め漁業の發達に伴ひしが其後拓地殖民の進運に従ひ府縣諸港に對する交通の頻繁を見るに至り海外貿易の發達に連れ對外的航路を擴張する必要を生ずるに至れり、今本道重要航路として政府より特に補助金を與へて定期の航海をなさしめつゝある現在補助航路の概況を述べて將に起らんとする新航路に對し所見を述べんとす、



遞信省命令航路

- 一、日本海航路 本航路には甲線と乙線とあり、甲線は宮島丸(鋼製總噸數一、六〇九)乙線は交通丸(鋼製總噸數一、六〇四)を用ゐ、甲線は門司を起點とし、乙線は小樽を起點とし、何れも一箇年八回つゝ日本海の各港を定期に週航せり、受命者は大家商船合資會社にして其各線發着寄港順序は左の如し  
 (甲線)門司、濱田、境、宮津、敦賀、浦鹽、敦賀、七尾、伏木、夷、新潟、函館、小樽、九春古丹、小樽、浦鹽、城津、元山、釜山、門司、  
 (乙線)小樽、函館、夷、新潟、伏木、七尾、敦賀、浦鹽、敦賀、宮津、境、濱田、門司、釜山、元山、城津、浦鹽、小樽、九春古丹、小樽、  
 二、九春古丹線 本線は日本郵船會社の受命航路にして總噸數七百噸以上の汽船を用ゐ、北海道廳命令航路函館小樽線と連結し、同一船舶を以て定期の航海をなす、其航海度數及寄港地は左の如し  
 航海度數 四月一回、五月より十一月迄毎月五回、十二月二回  
 寄港地 稚内 毎月二回  
 三、本州北海道連絡線 本線も亦日本郵船會社の受命航路にして總噸數七百噸以上の汽船を用ゐる左の區別により航海をなす

- 一は三港定期にして往航青森を發し函館に寄港し室蘭に着し復航室蘭を發し函館に寄港して青森に着すものにて毎日一回青森及室蘭に發船す
- 二は青森函館間の往復定期にして毎日一回兩地を發船す
- 三は青森室蘭間直航々路にして毎日一回互地發船

此外神戸小樽間東西廻線は本年九月限り政府の補助廢止され日本郵船會社の自由航路となるが故に十月以後は航海回數及寄港地等多少の變改を保證ざるを以て省く、

北海道廳命令航路

本道命令航路の航海度數及寄港地等を列記すれば左の如し

- 一函館根室線 總噸數一千噸以上の汽船を用ゐ、釧路、厚岸、霧多布に寄港して毎月六回往復航海をなす外六月より九月迄毎月二回函館根室間を直航往復す
- 二根室紗那線 同じく一千噸以上の汽船を用ゐ、乳吞路、斜古丹、内保、留別、藥取、床丹に寄港し五月より十一月迄毎月三回十二月二回の航海をなす但し十二月の最終航海は、瀬石、乳吞路、斜古

丹に寄港して單冠に至り根室に歸航するものとす、  
三根室網走線 同じく一千噸以上の漁船を使用し、泊、羅白、斜里に寄港し、四月一回五月より十一月迄毎月三回十二月一回の航海をなす

以上の三線は函館、根室、紗那間、函館、根室、網走間に區別し各間同一船舶を以て連結航海をなす、

四函館小樽線 總噸數七百噸以上の漁船を用ゐ、江差、釣掛、壽都、岩内に寄港し、四月より十月迄毎月五回、十一月より三月迄毎月三回航海をなす

而して本線は逓信省命令航路九春古丹線と小樽に於て連絡し同一船舶を以て航海をなす

五小樽稚内線 同じく七百噸以上の漁船を用ゐ、増毛、留萌、鹽尻、天賀、鬼脇、釧洞、香深に寄港し四月より十一月迄毎月五回十月、二月より三月迄毎月三回の航海をなす

六稚内網走線 同じく總噸數七百噸以上の漁船を用ゐ、枝幸、雄武、紋別、湧別、常呂に寄港し四月より十月迄毎月五回十一月三回、十二月一回の航海をなす本線は三十九年四月より其起點を小樽に延長し稚内は寄港地に變更せり

七小樽斜里線 同じく七百噸以上の漁船を用ゐ、稚内、枝幸、雄武、紋別、湧別、常呂、網走に寄港

し四月より十月迄毎月二回十一月三回十二月一回の航海をなす

八函館單冠間冬期線 總噸數一千噸以上の漁船を使用し一月一回函館を發船し根室、瀬石、乳呑路、斜古丹に寄港し單冠に至り根室に寄港して函館に歸航す

以上八線 受命者 日本郵船株式會社

九函館大津線 受命者は函館區渡邊熊四郎氏にして總噸數三百噸の漁船を用ゐ、四月より六月迄毎月四回七月より十二月迄毎月六回一月より三月迄毎月四回發船し浦河及廣尾に寄港す

十小樽天鹽線 小樽區藤山要吉氏の受命にして總噸數三百噸以上の漁船を用ゐ、増毛、留萌、初山別、遠別に寄港し四月より十月迄毎月四回十一月十二月は二ヶ月に三回、一月より三月迄毎月二回の航海をなす外九月より三月迄毎月一回利尻島鬼脇又は釧洞に寄港す

十一石狩川線 札幌區阿部久四郎氏の受命にして總噸數三十噸以上の漁船二艘を曳船とし、外に淀川船十艘小廻船三艘を使用し左の區別に依り航行をなす

一江別石狩間 四月二回五月より十一月迄毎月四回航行し往復共 茨戸、ビドイ、當別太に寄航す  
二江別月形間 四月八回五月より十一月迄毎月十三回航行し往復共 砂濱、幌向、下達布、上達布、美唄達布、美唄、狐森、枯木に寄航す

交通

北海の利源

八〇

三月形札の内閣 四月二回五月より十一月迄毎月四回航行し往復共札比内、晩生内に寄航す  
尙本道交通上近く新生面を開かんとするものは日本鐵道會社の資本金百五十萬圓を以て函館青森間に於ける定期航海を開始せんとするの計劃にして最新のタービン式に依れる速力十八ノットを有する千五百噸以上の汽船二隻を以て當らしむるものなりと、同會社買収の時期三ヶ月内に切迫し居るに拘はず會社は之を設計して政府に引継ぎ政府亦之れを經營するに決せりと此計劃實行の曉に至らば青森函館間航程三時間を以て相互に達するを得て本道交通上未曾有の大至便を開くべしと云ふ、  
尙戦後に於ける本道經濟上の發展を圖り且其生産品の販路を海外に求むべき必要を感じ、我が北海道廳當局者は外國航路に對し左の計劃をなすべしと云ふ、

一 北清線(小樽營口間)

寄港地

(往航)函館、釜山、仁川、大連、旅順、

(復航)大沽、芝罘、釜山、門司、若くは下の關、神戸、横濱、函館、

航海度數 一年十五回以上(冬期休航)

使用船舶 總噸數一千五百噸以上最快速力一時間十一海里以上にして鐵製又は鋼製の汽船二隻

補助金 年額十萬二千六百五十圓

二 上海線(小樽上海間)

寄港地

(往航)函館

(復航)長崎、門司若くは下の關、神戸、横濱、函館

航海度數 一年十四回以上

使用船舶 總噸數一千五百噸以上最快速力一時間十一海里以上にして鐵製又は鋼製の汽船一隻

補助金 年額六萬六千圓

今や科學の進歩は時間に於て短縮し距離に於て接近す、戦後に於ける我國は其

交通

八一

陸上に於て其海面に於て發展するのみならず、世界各國に對する交通頻繁を來し經濟關係は益々密接を加へんとす、而して我小樽函館の二港は東洋貿易の市場として一大飛躍を試みんとし又室蘭港の如きは米國對北清航路の要衝に當り石炭供給地として恰好の地位を占め且本道木材の輸出地として益々發展の氣運に向ひつゝあり、若夫れ東岸釧路港灣修築の曉に至らば東洋航路に於ける石炭の供給地として發展するに至るべく本道將來に於ける交通の盛況今より豫想す可からざるものあるなり、

### 水電事業

社會の進歩は獨り人力に代ふるに蒸汽力を以てするに止まらず今や天然の水力を利用して電氣を興し以て各種事業に應用するの計劃甚だ多きに至れり、由來我邦の地勢たる傾斜急にして且つ河川に富むを以て動力を遠距離に配送し得る

の便あるは他に多く其比を見ざる所にして此等事業の續々として發生する最大理由なりとす、近時本道に於て水力電氣事業の計劃を爲す者頻々踵を接するを見るは亦此れが爲めの故なりとす若し夫れ水の落差充分にして發電地と需要地との間多大の工費を要せず僅少の費用を以て動力を興すことを得ば、其工業上一大發展を爲す實に測るべからざるものあり、今本道に於て計劃せられつゝあるもの及び既に允許せられて着手しつゝある各種水電事業を左に紹介せん、

#### 北海電氣株式會社

發電所 札幌郡豊平村大字平岸村定山溪豊平川

落差 一二八尺 馬力 一、五八五

一秒時ノ使用水量 一〇〇立方呎

近藤修孝氏等の發起に係り三十八年四月十四日を以て水利權の認可を経たる者にして本年七月より工事に着手しつゝあるを以て遅くも本年中には竣工を見る

に至るべし其目的は主として札幌區に於ける點燈用に供し尙其餘力を應用して他の工場用に供し及び豊平月寒間に於ける電車を開始せんとするの計劃なりと傳ふ現社長山本久右衛門氏なり、

## 岩内水力電氣會社

明治三十八年五月五日を以て水利權の認可を経たる者にして岩内郡敷島内村字幌内川より百六十尺の落差による電力二百二十馬力を利用し主として岩内市街の點燈に供する筈にして既に竣工の期に近きしを以て不日開業するに至るべし、社長は京都才賀商會技師三井助作氏なり、

## 渡島水力電氣株式會社

明治三十六年中園田實徳、阿部興人、岡本忠藏氏等によりて發起出願の處、本年認許せられたるものにして其設計に據るに水源地は函館を距る二十九哩大沼銚子口に在りて電力三千五百馬力の内二千五百馬力を需用地に送ることとし百

萬圓の資本金を二期に分ち第一期には八十萬圓、第二期二十萬圓を支出するものにして電動力の供給地は函館區内及龜田下湯の川外數ヶ村とし點燈又工場原動力となすものなるが同地の水量は豊富にして頗る有望確實なるものとす、主なる需用者は函館電燈所、函館船渠會社、上磯セメント會社、及精米場、造船所にして將來益々發達の見込あり、

## 王子製紙會社第一工場

支笏湖の水利による水電發動計劃は三百萬圓の資本を以て昨三十八年東京博文館主大橋新太郎外七名の許可を得しものにして今回王子製紙會社にては發起人と協商の上水電事業一切を引き受くることとなし更らに施設の擴張を出願せり、其設計によれば支笏湖流出口より五百間の千歳郡千歳川右岸烏柵舞字「カマソウ」に於て水路引入口を設け延長二千五百間の灌水路を施し落差四百二十尺一萬五千馬力を得て其中七千五百馬力を以て製紙事業を經營し餘力を以て畜

小牧を起點として千歳を経て札幌に通ずる電鐵を布設するか又は苫小牧より浦河口に至るものを布設せんとし目下調査中なりと云ふ、

王子製紙會社第二工場

千歳川右岸宇島柵舞村字エカイユウシに於て落差百五十尺により生ずる五千馬力の電力を應用して製紙事業を經營せんとするに在り資本金六十萬圓にして既に其筋の認可を得たり、

北海道炭礦株式會社

同會社の事業は夕張郡登川村夕張川筋の千鳥ヶ瀧を利用し夕張及び其他に於て新設すべき炭山に供給する水力電氣を起す目的にて過般該水利權の許可を得たるものなり不日工事に着手すべく而して一秒時間百八十立方尺の水量を利用し約二千馬力の原動電力を得んとするの計劃なりと云ふ、

釧路水電事業

釧路町白石義郎氏の發起する所にして釧路郡飽別村字ツユシペ阿寒湖と白鳥沼を連絡したる個所に於て落差二百尺、一秒時六、六〇〇立方尺の水量を利用し千七百四十三馬力の電動力を起して釧路町に於ける諸種の原動力及點燈用に供給するの目的にて既に其筋の許可を経たり、

右の外尙計劃出願中のもの少なからず、即ち北海炭礦會社の出願に係る洞爺湖の水利により、電動力を室蘭に送り、運炭其他室蘭に於ける各種の施設に供給せんとするもの、留萌村五十嵐億太郎氏が増毛及留萌市街の點燈其他工場に供給し且つ採炭に用ひんと目的を以て増毛郡阿分村界ヌブシヤ川筋及全部舎熊村界バシユベツ川筋並同郡暑寒澤村別荘村界シヨカンベツ川筋の三ヶ所に發電所を設けんとするが如き、東京近藤修孝氏が札幌郡山鼻村字白川の落差四十四尺四寸、一秒時の使用水量二百立方尺によつて得る所の馬力を札幌に傳送して、定山溪に於ける電力の不足を補給せんとするが如き、以て本道水電事業勃興の

一般を見る可く、殊に本道の如き森林、沼澤に富み、製紙業其他工業用に供する原料豊富にして、將來電力を應用すべき事業多々あるを以て本道工業界及交通上に於ける前途益々好望なりと謂ふべし。

本道の産物

- ▲米 逐年灌漑溝の増設に随ひ産額を増しつゝあり昨三十八年度の産額十五萬六千石此價格二百一萬三千餘圓に上れり、
- ▲裸麥 三十八年度の産額十七萬三千石餘に上り價格百二十六萬五千餘圓に達す、
- ▲豌豆 品質府縣に比し夏かに優等にして需用年々増加し年額三萬一千石價格二十六萬八千圓を算す、
- ▲大麥 本道到る所に産し三十八年産額十二萬石餘多く麥酒醸造の原料として

需用せらる、

- ▲小麥 毎年七萬五千石餘を産出し製粉原料として本道内に需用せらる、
- ▲燕麥 戰時中價格暴騰の爲め俄に作付反別を増し昨三十八年度の産額五十五萬石に達したるが時局終結と共に大に頓挫せしが如し、
- ▲薯蕷 昨年度産額十八萬石本道に於て製油原料と爲すの外悉く府縣に輸出す
- ▲牧草 米國種最も多く年額二萬噸以上に達し本道の牛馬食糧として需要せらるゝ近時府縣に向け輸出する少なからずと札幌小川興農園の壓搾牧草頗る著名なり、
- ▲玉葱 石狩國札幌村に於て産するもの最も多く且つ聲價あり昨三十八年度本道産額四十六萬貫此價格四萬九千圓にして露領其他海外に輸出するもの多し、
- ▲馬鈴薯 年々の産額著しく増加し三十八年度の如き實に六千萬貫に達す澱粉として府縣に輸出する外副食物として需用頗る多し、

▲甘藍 生産年額二百萬貫此價額十二萬圓に達し鹹菜煮菜として最も人口に適し府縣に輸出せらるゝもの少なからず、

▲蘿蔔 卅八年度産額二千萬貫此價額九十萬圓に及び逐年其産額を増加しつゝあり、

▲亞麻 莖の年額三百四十萬貫種子産額一萬三千石餘にして此價額合計三十六萬七千圓餘に上り莖は亞麻系の原料、種子は亞麻仁油の原料として需要せらる

▲柱胡麻 製油原料として需要せらる年産額九千石八萬圓に達す、

▲林檎 三十八年度産額二千五百萬八千四百餘斤此價格三十五萬三千餘圓にして露領其他府縣に輸出するもの多く果物産額中第一位に在り、

▲櫻桃 獨逸種の櫻樹に産する果實にして人口に適するの良果なり産地は札幌附近を第一とし小樽之に亞ぐ三十八年度産額二十一萬八千三百餘斤此價額一萬一千五百餘圓なり、

▲梨 札幌附近多く之を産し三十八年度産額十三萬貫此價格十七萬圓に達す洋種にして風味頗る佳良なり、

▲莓 舶來種にして其味良好食後の好適果たり又ジャムとして其販路極めて廣く淺羽農園製其名最も高し、

▲薄荷 昨年度の産額三十八萬三千六百餘貫此價格七萬七千五百五圓にして紋別郡湧別村の産及び上川郡永山村の産出優品を以て輸出せらる就中湧別村昨年中の收穫高六萬圓に達したり、

▲礦物 砂金は明治三十一年來北見國枝幸地方に於て豊富なる金鑛發見せられ一時は本邦の「コロンダイク」と稱せられ今や産額を減少せしも三十八年度全地方に於ける産額二十九貫目價額拾壹萬八千餘圓に達せり、石炭の無限にして優等なる其他硫黃滿俺等産出皆巨額にして本道礦業界の盛名夙に世間に知らるゝを以て贅せず、



▲木材 本道森林の豊富なるは普く人の知る所にして殊に枕木、軸木、建築材として海外及府縣に輸出するもの多く年産額八萬尺メに及ぶ尙年々長足の進歩を爲すの氣運に向ひつゝあり、

▲馬 本道東海岸に於て最も牧畜業の發展を見る是れ同地方は南方開豁して海に面し西北は連山重疊して冬期西北風を遮斷するに因る、就中日高國の産北海の驥北なる名聲を占む、三十八年末に於ける頭數は洋種雜種内國産を合して九萬九千六百四十餘頭に上り軍馬として需用せらるゝもの多く土産馬亦柔順堅忍の性に富むを以て需用亦少なからず、

▲牛 牛の改良は本道到處に遺憾なく發揮せらるゝを見るは喜ぶべし三十八年度に於ける現在數は一萬四百五十餘頭にして乳牛として用ゆるの外肉用に供せらるゝもの亦尠ならず、當局者本道産の肉牛を以て將來府縣の需要を充たさる計劃ありと云ふ、

▲豚 本道に於ける養豚の業は未だ幼稚なるも三十八年度に於ける飼育數七千百九十餘頭に上り年々發達の運に向へり、

▲石材 札幌郡石山村に産し軟質にして能く建築材に適す年額……………に及ぶ、

▲セメント 渡島國上磯郡上磯村に於ける北海道セメント株式會社に於て製出す三十八年度に於ける産額七萬五千餘樽にして價額約二十六萬圓なり、

▲煉瓦 製造所は札幌郡江別村野幌を主とし鈴木、久保、館脇等の經營に係るもの二十餘ヶ所あり又屋根瓦、土管、甕等を製出す一ヶ所の産出額一年平均約三千百圓なりと、

▲麥粉 本道産小麥を原料として製造するものにして札幌製粉株式會社の産額最も多し年産額十六萬圓以上に達すと、

▲澱粉 昨年度に於ける本道の産額は二十一萬二千餘圓に上り山越郡八雲村及

ひ夕張郡由仁角由兩村最も産額に富む、

▲製紙 本道木皮の纖維を以て製造する途開けしより俄に製紙業勃興の氣運を誘へり昨年度に於ける富士製紙株式会社釧路第四工場の如き其産額九百二十萬磅此價額六十六萬八千五百餘圓に上れり、

▲柳行李 余市郡大江村に於ける山川行李合資會社の製造に係る昨年度の産額は一萬三千七百餘個にして此價額一萬五千二百餘圓なり札幌區内に於て一二製造所あり、

▲蠶絲 本道産收購高は春夏を合し八千石にして價額三十萬圓以上に達す、生絲は札幌製絲場及び瀧川藤川兄弟商會に於て製出するもの年分産額一千八百五十七貫此價格七萬八千圓に及び、蠶種の産額は三萬五千圓に上る、蠶種は札幌の農桑館末松格平氏、黒松氏の秋蠶改良社及び岩見澤信濃茂助氏の製造最も廣く行はる、

▲亞麻糸 北海道製麻會社に於て製出する亞麻糸は帷子蚊帳漁網等の原料に使用せられ又亞麻布は重に海陸軍用品として需用せらる其産額一ヶ年四十萬以上に達す、

▲經木 椴松、菩提樹等の薄皮は從來食料品包装用として使用せられしが近年夏帽子、簪及びビョクタイ等の原料として大に需用の途開けたり現時札幌に北海經木商會等の製造所あるも寧ろ原料として府縣に輸出するは望みあるものゝ如し、

▲澁液 澁液即ち單寧エキスは勇拂郡安平村字早來株式會社櫻組製澁所の櫨皮を原料として製造するものにて昨三十八年中の製造高七千九百二十樽（一樽約八斗）價額十萬二千九百六十圓なり、

▲鮭 産地は石狩國根室國日高國及び北見國宗谷郡より網走郡に至る間は其主なるものなるが三十八年度産額三萬三千石にして之を二十年以前に比し大に其

産額を減ぜり然れども近年人造孵化に依りて蕃殖の方法進歩すると共に樺太の好漁場を得たるは人意を強ふするに足るべし、

▲鯨 本道西海岸後志、石狩、天鹽、北見の四國は其主産地なるが近年漁獲高漸く減じて往時の如き盛況なしと雖も又年に七十萬石内外を下らず古來鯨の群來を以て黄金花咲くものとせるは故なきに非ず、樺太西海岸好漁場の我版圖に歸したるは大に慶す可し、

▲筋子粕漬 産額多からずと雖も風味佳良にして一般人士の嗜好に適す製造者は石狩町高橋儀兵衛氏其先鞭者にして札幌の南部源藏氏亦之を製造せり、

▲昆布 日高沿海の昆布は往時三場所昆布(幌泉、浦河、三石)の聲價高く三石昆布特殊の風味あり利尻根室天鹽等亦良品を産し現今昆布は重要輸出品なるを以て各水産組合に於ける製品検査極めて嚴なり、全道三十八年中の産額十三萬五千三百十二石價額六十七萬四千四十七圓に及ぶ、

▲薰製鯨 高島水産試験場薰製鯨の一度び大阪博覽會に於て好評を博してより石狩の高橋儀兵衛、古平の廣谷源治、室蘭の渡邊某、小樽の松吉商會等近年大に其製造を競ふに至る昨年の製品十六萬一千五百尾三千六百八十五圓に達せり其他試験場製造の薰製及鹽藏鯨は重もに輸出品として濠洲、北清地方に試賣中なり、

▲肝油 鱈肝油は産額未だ多からずと雖も昨年中の製品藥用三萬一千百十二斤、四千二百九十七圓、並八百三十一石七千八百八十七圓を出せり利尻島脊形村石田某等の製造に係るものにて藥用向品質佳良なりと、

▲鯨節 本道に於ける鯨節の製造は日高國を以て鼻祖とす、明治三十一年同國浦河村沿海に於て鯨魚の鮭建網に入りしを始めとし爾後道廳補助を與へて獎勵せし結果收獲の増加と共に日高節の名次第に高まり昨三十八年の如きは製造業者二十餘名製品高一萬五千六百四貫目にして其價額四萬五千七百二十八圓を

算するに至れり、

▲鱈節 鱈節に次て日高國の特産たり明治三十四年八月鱈節製造教師静岡縣焼津の人村松善八の鱈魚不漁に際し鱈魚を以て代用として製造したるに起因せり昨三十八年日高國內鱈の收穫高は十三萬五千九百三十九貫目にして其價額は二萬四千六百四十八圓に達せりと、

▲獸皮 熊皮、狐皮、貂皮、牛皮、臘肭獸は其産出の重なるものにして三十八年度に於ける産額は一萬三千餘圓なり、

▲水族製革原料 浦河町日高水産傳習所は製革原料として鱈海豚の魚皮を東京に送り製皮せるに堅韌にして鞆袋物又は雨雪用靴革に適し頗ぶる好評あり今回日高實業協會は東京三河島海獸製革所にて製革せしめたる同上鞆皮並に其皮にて造りたる靴の見本を北海道物産共進會に出陳せり日高沿海に於ける鱈の漁獲は漁具の改良に隨ひ年々増加し海豚は尙ほ試験中に屬するも將來共に同地の特

種の新規生産物たるを得るに至るべし、

▲雲丹 室蘭壽都等に於て之を製造し府縣に輸出するもの少なからず室蘭渡邊某近藤某の製造尤も聲價あり、

▲牡蠣 根室厚岸湖に産する牡蠣は同地の特産なりしが濫獲の結果一時收穫を減ぜしも道廳其採取區域と時期とを規定しあるを以て追々産出の量を増すに至るべし、昨年中の産額二萬八千八十斤、一萬二千六百三十餘圓に及ぶ、

▲積丹竹 斑竹の一種にして雲文あり積丹郡に産す方言「シリキトツフ」と云ひ譯して文竹又は鳳眼竹ともいふ煙管又は洋杖として需用頗る多し、

福山竹詞に曰く

斑竹爲煙管。吹虛入片雲。片雲風送去。遙至戌樓邊。

▲愛奴細工 マキリ一挺を用ゐて雲形を刻し巴文を描く處風韻雅致眞に掬すべし、元アイヌ等の製作に係れるも今や普通の人にして其製法を摸し販賣するを

本道の産物

常とす奇好人士の愛翫措かざる所なり、

▲製氷 函館の外小樽札幌等に多く之を製出す府縣に輸出するものは函館五稜廓産なる製氷名聲最も高し本年産額豫想高約三萬噸見積價額三萬八千四百餘圓なりと、

▲炭酸水 本道に於て産出するは單純炭酸水にして其産地は定山溪山中及び虻田郡俱知安村字峠下の兩處なり、定山溪産は札幌炭酸水合名會社に於て販賣し本年の採酌二百萬本を製出すべき見込にて販路は遠く上海香港に及び俱知安産は小樽手宮町北海炭酸水商會に於て本年より販賣すべしと云ふ、

▲札幌麥酒 本道産大麥を原料として製造し風味頗る佳良なるのみならず能く保存に耐へ海外の需用も少なからず今尙札幌麥酒の名の下に廣く世上に賞味せらる製造所は大日本麥酒株式會社札幌分工場なり、

▲苗穂葡萄酒 谷醸造場の製出に係り純良なる西洋種の果實を原料とせるもの

にして色合風味共に世の嗜好に適し名聲頗る高し生果の儘需用せらるゝもの亦少からず、

▲武蘭埴 全醸造場の製出する所にして其種類數種あり販路頗る廣し、

▲酒精 本道産馬鈴薯及玉蜀黍を以て製造するものにして旭川神谷酒精合名會社の醸造に係る昨三十八年度産額三十萬二千八百餘圓に上れり、

▲林檎酒 札幌區南部源藏野田作助兩氏の醸造最も芳醇にして甘味に少許の酒精分を含み酒類の嗜好なきもの及夏季の飲料として極めて良好なり、

▲乳酪 札幌區及其附近に供給せらるゝ餘裕の牛乳を以て各畜産家に於て製造するものにして乳質純良なる上比較的低廉なるを以て管外へ輸出するもの又多し、

▲罐詰 根室の藤野工場札幌區南部工場小樽區松吉工場鬼脇及枝幸等に於て製造す其種類の重なるものは鮭、鱈、鱒、蟹、櫻桃、梨、杏、福神漬、奈良漬、其

本道の産物

他二十餘種にして三十八年産額百三十九萬五千餘個此價額二十八萬圓に達す、

▲農具 札幌器械製造所に於て米國式に則り製作する農具にして本道に使用するもの、外各府縣の需用逐年増加し一ヶ年産額三萬六千餘圓なり其他浦河支廳部内及び一二の箇所製造所あり、

▲絹織物 札幌區松崎工場の風通織羽二重織夙に精巧熟練の名を博し名取工場  
の甲斐絹織亦世上に需要せらる、

▲蝦夷陶器 札幌陶器合資會社の製品にして色澤品性共に古樸にして風流人士  
の嗜好に適す、

### 樺太概況

位置及地形、本島は北緯四十五度五十七分より起り北緯五十度を以て境界とな  
す面積約二千二百万方里長さ約百十里幅最狭少の處七里に過ぎずして沿岸線約一

千哩に達す、地形屈曲少なく能取岬知床岬と相對峙して東伏見(アニワ)灣を形  
成し唯コルサコフ港のみ大船巨舶を碇泊するに足る東海岸テルペニー岬斗出し  
て一大灣形をなすも灣内廣濶にして風波を凌ぐに足らず、西海岸に至つては唯  
僅かに漁舟を繋留するに過ぎざるのみ、

山脈及河湖、島の形と併行して北より南に走れる二山脈あり高さ二千尺乃至四  
千尺に過ぎず故に氣候の激變を來すことなし山脈何れも海岸に沿ふて崛起する  
を以て海産乾場に供すべき適地少なきも西海岸稍々平低なる所あり、河湖の重  
なるものは「ポロナイ」川「ナイブチ」川「ス、ヤ」川「ルウタカ」川「トンナイチャ」  
湖「タライカ」湖「トーブツ」(一名ブツセ)湖「ワイト」湖「ライチシカ」湖等にして  
「ポロナイ」川はブレスキーの平原を南流して七郎(忍耐)灣に注ぐ長さ五十四里  
河口は小帆船碇泊するに足る本島に於て平野と稱すべきは以上諸川の流域にし  
て鮭鱒等の魚族は此等河水の流域に集中する者にして七郎(テルペニー)灣及東

伏見(アニツ)灣内に於ける鮭鱒等の好漁場あるは之れが爲めなり、  
 氣候及潮流、西伯利亞大陸及「オコック」海寒流の影響を受けて非常に冷氣なる  
 も決して凌ぎ難き程に非らず過去數年間平均最低温度は零下三十三度二分なる  
 を以て之れを上川に比すれば反て六度以上高きを見る然れども全島は本道の如  
 く高低の變少なくして二六時中低温に在るを以て家屋の設備を完全し室内温度  
 を保たしめ防寒の法を講ずること必要なり又本島は天候險惡にして濃霧深く烈  
 風多きを傳ふるものあるも之は寒暖潮流の交叉衝突點たる近藤(能取)岬の一部  
 のみ比較的多きを示すも其他南部樺太は寧ろ暖流の恩澤に因り溫和の氣象を受  
 けて生活し易きの地と云ふを得べし又潮流に就て之れを見れば黒潮支流の日本  
 海に入るもの對島海峡より東北に直進して北海道の西海岸を洗ひ樺太の最南端  
 たる近藤岬に於て兩分され一は西岸に沿ふて「マウカ」地方に向つて北上し遂に  
 寒流に合す他は宗谷岬を通過して東伏見灣を洗ひ「オコック」海に入る又寒流は

「オコック」海の北部より來り全島の最北端なる「エリサウエータ」岬に至りて兩  
 分され其一は西海岸に沿ひ間宮海峡を經由して日本海に入り他の一は東海岸を  
 流下して一は千島に達し一は南下して宗谷海峡を経て日本海に入るなり要する  
 に鍊其他の魚族を西海岸及び(アニツ)灣に齎らし延いて東海岸に及ぼすは此暖  
 流の恩惠にして又「オコック」海より來る寒流は鱈其他の寒流に棲息する魚族を  
 誘致する者にして全島の魚族饒多なる所以なり、

沿革、本島が日本の領土たりしことは夙に世人の熟知する所なるも樺太「アイ  
 ヌ」が本邦の史上に見へたるは今より四百二十年前文明七年其會長上の國に來  
 りて松前の始祖武田信廣に銅雀臺の瓦硯を獻じたるを嚆矢とし露人が樺太の地  
 を知りしは今より二百五十餘年前正保元年ホルヤコフなるもの遠征隊を率ゐて  
 黒龍江を下り韃靼海峡に出でたる時にして爾來東察加を征服し千島の諸島を南  
 侵して得撫島に及べり而して漁場を開始したるは寶曆元年(今を距る百五十年

前) 松前藩の藩士加藤嘉兵衛に命じて藩主直轄の下に經營したるを始とす而して同島の歐洲人に知られしは十七世紀の頃即ち千六百四十三年和蘭の航海者マ<sub>ル</sub>チンゲリツ、ドウ、フリースが樺太の一部を測量せしを始とし其後天明七年佛國の大航海家ライペルーズの早く既に樺太を探檢せしことあり當時佛蘭西和蘭露國等に於て刊行せし地圖は明かに同島の離島たるを認めり然れども我邦人は久しく同島を以て大陸に接続したる半島なりと信じ居たりしが文化五年間宮林藏同島を探檢し翌六年更に黒龍江を溯りて滿洲に入るに當り此海峽を踏査して同島の離島なることを確め始めて日本人に對し樺太の離島たるを實驗的に解釋せられたるなり之より先き文化三年レザノフ等樺太に上陸し亂暴狼藉を極めたる以來屢々來寇せしを以て幕府益々北海の警備を嚴にせり嘉永六年露國海軍大佐チウエリスコー陸戰隊を率ゐて楠溪に上陸し砲臺を築造し大に邦人を威喝す此一行の來るに先ち露使ブーチャン軍艦四隻を率ゐて長崎に來り國書を呈

して同島に於ける兩國の境界を定め且通商をなさんことを請ひしも時偶將軍家慶の薨去に逢ひ空しく其意を果さずして去る安政六年七月ムラヴィヨフ露國の使節として軍艦七隻を率ゐて品川灣に來り樺太境界の談判を開きしが議調はずして去る文久二年竹内下野守を正使とし松平石見守京極能登守を副使として露都に遣はし樺太境界確定の談判を開きたるも議纏まらずして分れ更らに兩國より全權委員を派して同島の實地に就き協議確定する旨を約して歸國せしが翌文久三年在函館露國領事より樺太境界を議定すべき委員の派遣を請求せしも幕府委員を派遣せずして其議遂に休み依然舊時の状態に委せり降て明治政府に至り北邊の防禦等閑に附すべからざりしを看破し岡本監輔を遣はし樺太全島に於ける一切の事を舉げて之に委任することとなりしも此時露人の勢力侮るべからずして到底之が横暴を抑壓する能はざりしが其後露國は益々千島諸島の侵略を恣にし明治八年五月聖彼得堡に於て彼我委員會見の上千島樺太交換の名義の下



に樺太全島を擧げて我國の掌中より掠奪せり然れども天久しく彼れが暴威を恣にせしめず三十年の後日露國交の斷絶するに當り我國民の公憤は一時に勃發し明治卅八年七月我精銳なる海陸軍は容易に此地を占領し九月ポーツマウスに於て日露全權委員の締結せる條約に依り北緯五十度以南は再び我版圖に入れり嗚呼三十餘年の間他人の毒手に在りし可憐の愛兒は茲に再び慈母の懷に歸るに至れり、

行政、南部樺太に於ける首府はコルサツコフにして同地は嘗て露國の官廳並に日本領事館等ありし地なり目下我樺太民政本署あり更らにコルサツコフ、ウラジミロフカ、マウカの三ヶ所に支署其他に二ヶ所の出張所を設け熊谷喜一郎氏之が長官として南部樺太に於ける百般の行政を司る、

殖民地、本島に於て選定せる殖民地はススヤ原野ルウタカ原野の各一部にしてススヤ原野に於ては八ヶ村に亘り地積三萬一千三十四町歩内農耕適地一萬九千

四百十九町歩、牧畜適地一萬一千六百十五町歩とす、ルウタカ原野は其北西部の一帶を選定して六ヶ村に亘り地積八千二百五十六町歩内農耕適地千五百四十一町歩牧畜適地六千七百十五町歩とす、以上二原野は東西に山脈あるが故に海岸に接近せる外は海上氣象の影響を受くること少きを以て冬期寒き割合には夏期溫暖にして植物の生育佳良なりと云ふ、此の外本年度に於て調査に着手せらるべき殖民地はノオアレクサンドロフスコエより幹線道路に沿ふてガルキノウラスコエに至り一面はナイブチ方面にして又東伏見灣内なる東海岸トーフツツ（一名ブツセ）湖を中心として附近の農業調査に着手するに決定せりと云ふ、  
牧畜農業、本島農業は牧畜を兼ねて經營するに非ざれば到底好果を得る能はず民政當局者に於ても夙に此方針を以て志望者に對し家畜を貸附し來れり昨年來貸付をなせし分は牛馬豚を合して現在四百頭に上り尙ソロイヨフカの種畜場に放牧しある現在數は牛豚馬を合して四百餘頭あり而して民有に屬するものは未

だ精確なる調査を経ざるも牛約一千二百頭馬六百五十頭を超過せざるべしと又  
ボロナイ川沿岸に住するオロツコ人種は牛馬を飼養するの外馴鹿を飼養し多き  
は一戸に付百頭内外より少きも二三十頭を有し貨物の運搬に使役するの外旅行  
の際は到る處に密生せる藓苔類を食用するを以て飼料を携帯するの要なし故に  
最も重寶にして其肉は食用に供し毛皮は帽子靴等に製造するを以て用途極めて  
廣し又到る處犬は重要なる家畜として飼養せられ冬は橇を引き夏は舟を曳くを  
以て一疋三十圓以上の價値を有するものあり樺太民政署の調に依れば從來露國  
人は戸毎に牛馬數頭より數十頭を飼育せり又豚、綿羊、山羊を飼ひしものあり馬  
は北海道の土産馬に類似し性質柔順にして能く勞役に服す牛は概ね雜種にして  
體格倭小乳量多からされども漸次改良せば良牛を産するに至らん飼育の法は五  
月下旬より十一月中旬に至る半年間は山野に放牧し他の半年間は舍飼するを普  
通とせり良好なる野草多きを以て決して飼料に缺乏を告ぐるることなしと云ふ本

島は冬期即ち半歲の間は恰も凍天水地の觀を呈するのみならず農耕に適すべき  
五月より八月の間と雖も概ね多濕多陰にして一ヶ年を平均すれば六十餘日の半  
晴と四十餘日の晴天あるに過ぎざるを以て收穫期に際し雨量多きを爲め間々農家  
一歳の辛勞を皆無に歸せしむる事少なからず本邦人にして全島未開原野を開拓し  
て良田沃圃と爲さんと欲せば官民相一致して須らく荆棘を開き醜草を刈り道路  
を通じ排水を施し多大の費用と勞力とを惜まざるの覺悟ながらざるべからず而  
も全島の氣候は施業の期間を短縮し六ヶ月を利用するに過ぎずして敏速なる作  
業を要するを以て斯業に従事するものは非凡の氣力と周到の注意を以て經營す  
るに非ざれば決して美果を收むること能はざるべし、全島に於ける農作物種類  
の重なるものを擧ぐれば大小麥、裸麥、燕麥、馬鈴薯、甘藍、胡瓜、南瓜、燕青、  
蘿蔔、胡蘿蔔、牛蒡、蠶豆、豌豆、玉葱、トマト、菜、牧草等にして特作物  
物としては大麻、亞麻、蕁、果樹はグースベリー、カーラント等あり、

植物、南部樺太は到る處樹木鬱蒼として密林天日を蔽ひ魍魅人を襲ふの觀あり殊にスズヤ川、ルウタカ川其他河川の沿岸は一帶の潤葉樹林にして「アカタモ」密生し赤楊、「ハシドイ」、槭等あり土性は上層腐植質壤土下層は砂質壤土若くは埴質壤土なるを以て地味の肥沃なる本道の沃土に譲らず又此潤葉樹林の外は多く針葉樹林にして其地積最も廣く落葉松、蝦夷松、椴松は鬱蒼として繁茂し地味は潤葉樹林に比し稍劣るも農牧に適するの地少からず、樹下は皆蘚苔又は雜草茂生せり其他樹林濕地ありと雖も伐木開墾の後能く排水の法を講ずるに至らば耕地と爲すを得べし、

漁業、幕府時代より明治七八年に於ける本島漁業は逐年發達の狀況を示せしが明治八年五月本島と千島交換條約締結せられてより政府は將來事端の生ずるを恐れ漁業者に懇諭して漁業斷念書なるものを徴し出稼を禁止せしも漁利の豊富なる到底漁民の企業心を抑壓するを得ず明治九年三月政府は再び樺太島に於て

從來漁業をなし居る者は引續き營業不苦旨を布達せしを以て一時杜絶せんとせし出稼漁業は再び之を繼續し明治卅六年に至る迄露國政府の許可を経て漁業に従事せり卅七年日露開戦となるや本島に於ける漁業は一時廢絶せられ卅八年七月我軍の占領に歸し再び我領土に入るや我陸軍省は樺太漁業假規則を發布して卅八年九月漁場優先權の出願を許可し全年十月殘餘の漁場を競争入札に附して百十二ヶ所に對し特許を與へり而して其税額は初め民政署の豫算六萬圓に對し入札の結果遂に四十八萬千八百六十五圓の巨額に上れり尙來年度に於ける漁業權特許は本年八月に於て三割乃至六割の税額を減じ之が繼續を許可するに至れり本島從來の漁業は鱈鮭に重きを置き鱚は第三位にありしが近年反對の現象を呈し鱚は反て首位を占むるに至れり尙鱈昆布の收穫も少なからず明治卅六年領事館の報告に依れば南部樺太の鱚收穫高は十八萬八千四百五十八石にして本年度鱚收穫高は十三萬六千石なり而して既往卅四、卅五、卅六の三ヶ年平均鱚收穫

高は十三萬九千石なるを以て敢て大差なきも之を單に卅六年度の收穫高に比せば五萬二千石餘の減少を見る今其鯨漁場に就て見るに西海岸最も重なる漁場にして全島總收穫の三分の二を占め一漁場に於て一期の收穫二千石より三千石に至る處あり從來全島の漁網距離は規則上十三町以上を隔つるを以て一漁場に於て建網を使用するの傍ら曳網を使用するとあり一漁場收穫の本道漁場の收穫に比し多額なるは之が爲めなり西海岸に次ぐは東伏見(アニワ)灣にしてコルサッコフ附近は交通の便宜あるを以て最も良好の漁場とす此附近一里に付き二千石の割合に當り又一漁場一千石以上の收穫を爲す箇所も少なからず、東海岸に至りては暖潮末流の注ぐ所なるを以て最好の漁場なし唯ツローの如きは一漁場に於て二千石に達するの好漁場なるも北進するに従ひ遂に皆無となる要するに全島の鯨漁業は之を今日に徴すれば更に新漁場を開設するに至るも將來三十萬石以上の收穫を得んことは頗る至難の事と云ふべし、鮭は北部黒龍江對岸のタ

ムラオ附近及東海岸トイム川流域を以て主産地となすも何れも我領土に歸せず去る三十六年度の南部樺太に於ける收穫高は僅かに四千六百石なり鱒は南部樺太を以て主要の産地と稱すべく三十六年度に於て二萬七千石を收穫せり是れ南部樺太の最大河たるポロナイ川の在るに因るなり、ナイブチ川又流域長大にして收穫の豊かなる漁場多く其他オチヨボカ河トンナイチャ湖、ス、ヤ、ルウタカ、タナナイの諸川等皆豊饒なる漁場なり要するに南部樺太は流域の大小に依り收穫の多寡あるも河川の在る處悉く鱒の棲息せざる所なし此他鱒漁業は最も有望にして殊に其漁場近距離に在るを以て便宜少なからず本年四月中旬より五月中旬までトコンボよりノタサンに至る間に於て鱒釣漁業行はれ之に着手せる漁船は三百二十四艘にして漁獲高總計二十七萬束(一束は二十尾)に達し多きものは二千束少きも四五百束を下らず平均千束内外なり専門家の談に依れば鱒の沿岸漁業は久しく現状を保つものに非らずして遠からず沖合漁業を爲すに至

るべきも犬に之が漁獲を盛にし肝油製造等の業を興さば尤も有利なるべし、昆布の收穫も亦少なからず三十六年度に於ては六千四百石を採取し其採取地多く西海岸マウカ地方なりしが爾後各沿岸の昆布を採取して大に沃度製造の料に供せば確かに一の利源たるを失はざるべし此他オコック海に於ける捕鯨業韃靼海峡に於ける鯨漁の如きは他日大に之が發展を見るに至るべきを信ず、

海豹島(ロツベン島)、七郎灣より南方十二海里の沖合に在る叢爾たる一小島にして長さ二百二間幅六十間高さ約五六十呎に過ぎず該島は世界に於て重要海獸の棲息場たる三島の一に數へらるゝ鹽鹵獸の棲息地にして全獸の群集するは六月頃より十月乃至十一月迄にして其群集する時は全島全獸を以て蔽はるゝの盛觀を呈す元來露國政府は我北海道の結果に鑑み大に之が保護の策を講じ去る三十四年より向ふ十ヶ年間を期して東察加商工業會社に全島及コンマンドルスキ島の獵權を許すに當り條件を附して一切雌獸及び老獸幼獸の獵獲を許さず専ら

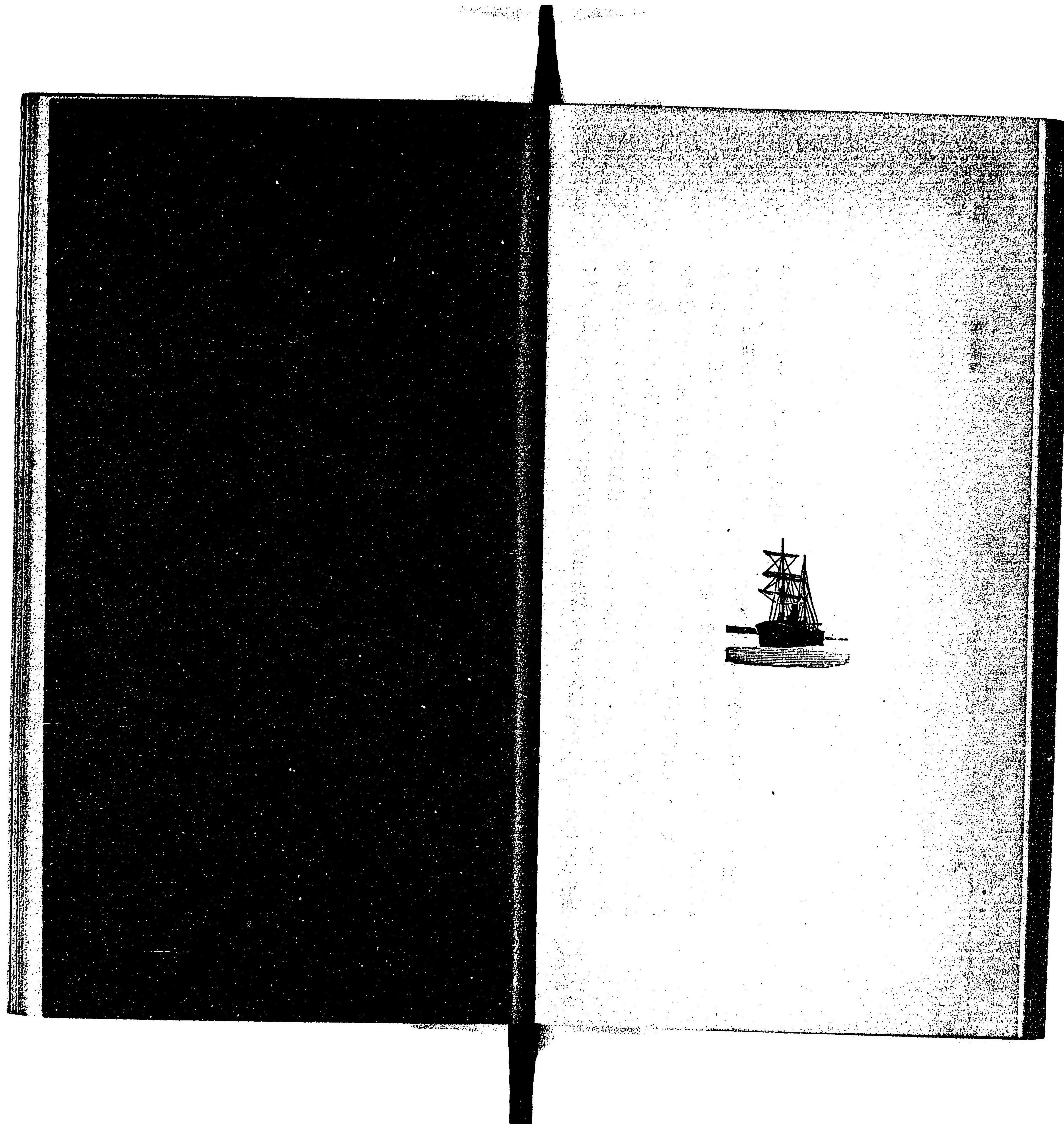
三五年の雄獸を獵する事を許可し且其數に制限を附せり然るに日露開戦は餘儀なく全島の取締を放任せし爲め我獵船は盛んに全島に航し老幼雌雄に頓着なく併せて之を獵獲せし爲め大に該獸の減少を來せり斯くして之が保護を講ぜずんば數年ならずして其の跡を絶つに至るべきを以て速かに之が取締を嚴にして我國の富源を永遠に保護するは實に焦眉の急に屬するを信ずるなり、

海馬島、舊名をモノロン又はトモシリ島と云ふ樺太の西利尻島の北十數里の日本海に兀立する孤島にして周圍五里餘に過ぎず其高さ處は海拔千四百尺海濱より崛起して全島灰黑色の岩礁多く平地最も少なし樹木は矮小にして僅かに谿間に存在し植物は本道若くは樺太島と同種類に屬す處々に谿流ありて飲料に適し氣候は南部樺太と異らず全島は嘗て海馬の棲息地として名あり日露開戦以來甲辰義會と殖民同志會の間に於て久しく漁業權の獲得に争ひを生じ互に相反目軋轉して事容易に決せざりしが本年八月政府は該島の漁區を六ヶ所に分ち四ヶ

所を甲辰義會に二ヶ所を殖民同志會に許可し且つ一漁區に對し借區料金三百圓を徵收することに決し久しく決せざりし全島の問題は遂に一段落を告ぐるに至れり、

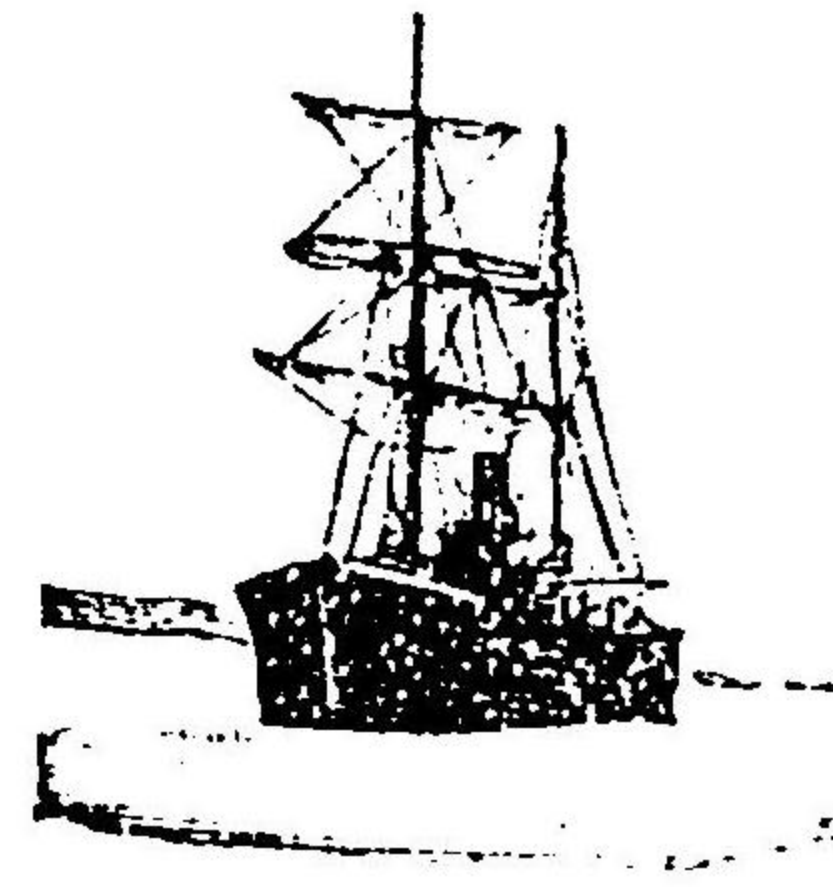
南部樺太に於ける概況は以上記述するが如くにして移民を誘致して拓地開墾を奨励し漁業を擴張して國利民福を増進するは固より論を俟たずと雖も又内部交通の機關を完備するは尤も急務なるを信するなり、由來全島と本道の航通に付ては冬期結氷間を除き甚しき不便なしと雖も内部交通の状態に至つては完全なる道路のあるなく故に生産物又は需用品を輸送するに當り非常多額の運賃を支拂はざるべからざるを以て生産力と消費力とに於て甚しき不權衡を來し拓地殖民上不利少なからず聞く我政府はコルサツコフ、ウラヂミロフカ約九里半の間  
に於ける鐵道敷設の計劃を立て本年六月中陸軍鐵道隊を以て實測せしめ陸軍の直營工事として本年中に敷設開通せしむるの見込なりと、余輩は此計劃を擴張

して一面マウカに延長し東伏見灣冬期氷結中此不凍港たるマウカをして冬期間全島に對する交通不便の缺點を補ひ又一方面ウラヂミロフカよりポロナイ川附近に縦貫鐵道を敷設して東西南三海岸の連絡を通じ更らに國幣の許す限り露國と交渉して露領北部に於けるアレキサンドルスキーに殖民鐵道を延長し以て全島の交通機關を完備し更に黒龍江の汽船と聯絡を通ずるに至らば常に日露貿易に至大の利便を與ふのみならず大に拓地殖民の實を擧ぐるに至らんこと期して待つべきなり一言卑見を附記すと云爾、



附

錄





### 開拓功勞受賞者

本道開拓農業者の成績顯著なるものに對し開拓使及三縣時代に亞ぎ北海道廳に於て明治廿四年全道各功勞者を甲乙丙丁戊の五等に分ち夫々農具を賞與されたる者七十名を出したるが爾來明治十四年十二月の勅定褒章條例に據り賞勳局より賞賜されたる本道開拓功勞者は明治十五年以來本年二月に至る間に於て實に左記十有六名(外に人命救助の件により紅綬褒章受領者十名あり)を得たり本道人口の稀少なるに拘はらず駸々として本道富力の發展を示す者詢に此等人々の効與りて力あるに因らん歟

渡島國函館區西川町

金子利吉

多年志を公益に注ぎ明治十五年中渡島國龜田郡より函館に至る一里餘の道路を修築し其他橋梁を改造する等公衆の利益を興し成績著名なりとす依て明治

開拓功勞受賞者

十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す（明治十六年十二月十日）

渡島國函館區末廣町

藤野喜兵衛

夙に根室に移住し専ら漁業を勉め公益を書し遂に荒寥の地をして繁盛に至らしむ其成績著明なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す（明治十六年十一月二十一日）

根室國根室郡根室本町

柳田藤吉

夙に根室に移住し専ら漁業を勉め公益を書し遂に荒寥の地をして繁盛に至らしむ其成績著明なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す（明治十六年十一月二十一日）

膽振國幌別郡登別村

瀧本金藏

夙に意を墾荒殖民に注ぎ安政五年本村に移住し單身榛莽を伐り曠野を墾き人

口を蕃殖し現に一聚落を成すに至り又曾て山中に浴泉場を開きたるも險路崎嶇往來に便ならざるを憂ひ茲に五ヶ年の星霜と二千餘圓の資財とを費し該工事中屢々洪水暴風等の災害に遭遇するも百折撓まらず刻苦勩勵遂に延長三千八百餘間の車馬道開鑿の工を竣へ大に浴客に便益を與ふ其成績著明なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す（明治二十四年十二月十五日）

渡島國龜田郡大野村

高田萬次郎

夙に志を農事に勵まし弘化元年始めて開墾事業を企て幾多の試験を経て稻作の收穫を發見し竟に水田六十餘町歩を得るに至れり其灌溉水路及び排水溝一萬二千餘間を鑿ち小作農家二十餘戸を移し一村を成し其他共有地及學校附近屬地等の開墾事業も皆能く其効を奏す洵に實業に精勵し衆民の模範とす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す（明治十五年

十二月十四日)

渡島國上磯郡上磯村

熊谷 宇兵衛

夙に志を農事に勵まし居を本村に移し嘉永四年始めて開墾を企て荒蕪を鋤削し水田を開き粃種を陸奥に求め之を試作し其收穫の利あるを發見し更に地を添山に相し二三の同志と謀り百方計畫遠く用水を戸切地川の上流より疏通し遂に良田數十町歩を得るに至る其他松杉苗木數萬株を移植する等洵に實業に精勵し衆民の模範とす乃て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す(明治二十五年十一月十四日)

日高國靜内郡碧蕊木村

渡邊 伊平

資性篤實志を農事に勵まし曾て兵庫縣三原郡廣田村民の困頓漂落せるを愛ひ貧民三十三戸を率ひて北海道に移住し地を本村に相し榛莽を刈り道路を通じ溝洫を開き専ら耕耘に従事し爾來凶荒交々臻るも奮て其災厄を救濟し以て移

住を獎勵し産業を増殖し現時五十餘戸の一村落を爲すに至る其他獨力を以て學校を設け教師を聘して村童を教育する等洵に公衆の利益を興し成績著明なりしとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す(明治二十五年十一月十五日)

十勝國當縁郡當縁村

依田 勉三

夙に意を稼穡に注ぎ晚成社を設立し自ら副社長となり伊豆國より族類數十人を率ひて北海道に移住し地を十勝國河西郡帶廣村に卜し又別に試験場を本村に設け荆棘を刈り溝洫を開き通路を通じ橋梁を架し専ら耕耘牧畜に従事し資財を消耗し艱苦を備嘗し竟に耕地四十五町牧草地十五町牧場七十五萬坪牛馬二百餘頭豚羊八十頭を有するに至れり洵に實業に精勵し衆民の模範たりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す(明治二十五年十一月十一日)

開拓功勞受賞者

石狩國札幌郡月寒村

三等郵便局長 和田郁次郎

夙に志を北海道の拓殖に勵まし明治十五年躬自ら跋渉探検し地を石狩國札幌郡月寒村に相し同志百餘名を本貫廣島縣より移住せしめ榛莽を翦り田疇を開き督勵甚だ努む偶々隕霜禾を傷ひ餓荒荐に臻るも毫も屈撓せず益々衆心を振策し郷人を招徠し道路を修め橋梁を架し堤防を築き溝洫を通じ遂に田四百餘町畑二百餘町を得民を移すこと前後三百八十餘戸一千二百餘口の多きに至り新に廣島村なる一聚落を創め次て其堵に安ぜしむ其他學校祠宇寺院を建設する等洵に公衆の利益を興し成績顯著なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章及銀盃一組を賜ひ其善行を表彰す(明治二十七年九月二十七日)

石狩國札幌區北四條西十四丁目

瀧本五郎

夙に志を北海の拓殖に注ぎ同志を糾合して徳島興産社を組し明治十五年族類數十人を率ひて本道に移住し石狩國札幌郡篠路村の地二百八十萬坪の拂下を

受け經營嶮岨荒蕪を開き群議を排して専ら力を葉藍の栽培に畢し益々奮て製造場を設け始めて藍玉藍靛を製す品質精良にして販路歲に擴まる今日本道産藍の名聲四方に發揚するに至りたるは即ち發道啓迪の効多きに居る洵に實業に精勵し衆民の摸範とす仍て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒賞を賜ひ其善行を表彰す(明治二十九年五月十二日)

渡島國函館區東川町

新妻甚八

本區大森町及東川町の地明治十八年風浪溢溢廬舍を浸漸し居民困苦するを慨き百方計畫乃ち彌久漸成の法を案じ塵介を民戸に取り搬運聚積辛苦經營八年を経て遂に一大堤防を築成し沿岸の居民をして其堵に安ぜしむ爲めに費す所三千七百餘圓に及ぶ洵に公衆の利益を興し成績著明なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す(明治二十九年十二月二十八日)

開拓功勞受賞者